SN 0918-1334

考古論叢 神奈河

第18集

神奈川における縄文時代の自然環境……松島　義章
　－貝類群集からみた縄文海進－

神奈川県における有孔鍔付土器の様相……副島　蔵人

古代橘樹郡衙とその周辺の様相……栗田　一生
　－十三菩提遺跡・子母口植之台遺跡調査成果を中心に－

横浜考古学研究会とその会員……岡本　孝之

平成22年(2010)3月
神奈川県考古学会

考古論叢 神奈河 第18集

平成22年3月

目　次

神奈川における縄文時代の自然環境
　　－貝類群集からみた縄文海進－……松島義章　1
神奈川県における有孔鍔付土器の様相……副島蔵人　35
古代橘樹郡衙とその周辺の様相
　　－十三菩提遺跡・子母口植之台遺跡調査成果を中心に－……栗田一生　59
横浜考古学研究会とその会員……岡本孝之　77

神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は、鶴岡八幡宮文書のうち、北条時宗が文永3年（1266）5月2日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので、これが地名神奈川の初出文書である。

神奈川における縄文時代の自然環境

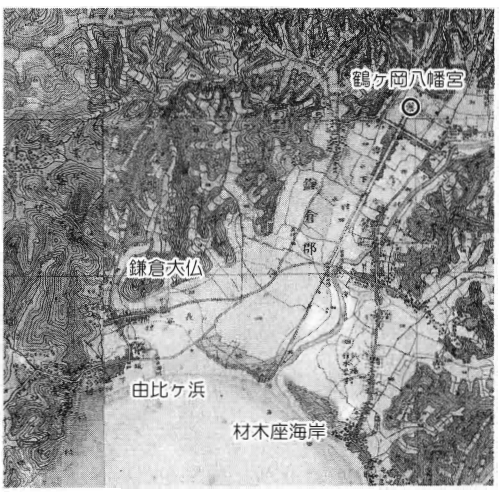
－貝類群集からみた縄文海進－

松島　義章

1. 鎌倉に縄文海進の海岸線を探る
2. 貝類群集から古大船湾を復元する
3. 横浜港周辺における完新世の相対的海面変化曲線
4. 海面上昇に伴う横浜港周辺の環境変遷
5. 貝塚出土貝類から推定する採貝活動域について
6. 海底に埋没した縄文時代早期の２遺跡が示す旧汀線
7. まとめにかえて

1. 鎌倉に縄文海進の海岸線を探る

古都・鎌倉といえば鶴ヶ岡八幡宮と長谷の国宝鎌倉大仏がその象徴といえよう。そこでこのよく知られている場所で縄文時代の海岸線を探って見ることにする。鎌倉の旧市街地は、滑川の低地に開けた都であり、南に開けて由比ヶ浜～材木座の海岸、東と西の二方向を山に囲まれた二等辺三角形をした沖積低地（第１図）となっている。この低地において縄文時代の海を復元することを試みる。この沖積低地を地表から数m掘り下げると、砂や泥の層から多くの貝化石の出ることが知られている。その貝化石がいつの時代のものか解らなくても、この低地へ海水が浸入し、入り海となった時に生きていた貝であることを物語っている。



第１図

縄文海進に伴って海水面が最も高い位置に達した時期は、本州では約6,500～5,500年前の縄文時代早期末から前期となることが明らかにされている(太田ほか,1982;1990)。その時期の海岸線を確認できれば、当時の鎌倉の海の様子を知ることができる。

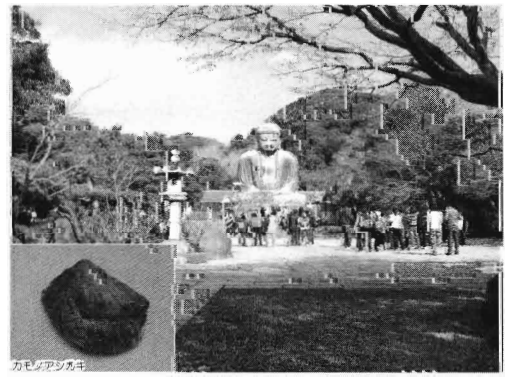
鶴ヶ岡八幡宮は二等辺三角形をした滑川低地のほぼ頂点に位置している。段葛をぬけ三の鳥居から入って源平池のある境内はこの低地奥部に位置、上宮は石段を登った背後の山の中腹にある。この石段の少し手前の平地を３～４ｍ掘ると下から貝化石が出てくる（第２図)。同様に源平池の脇にある神奈川県立近代美術館鎌倉館の建設工事では貝化石（菅野・加藤,1954;Kanno,1955）が、さらに境内の東端に位置する鎌倉市国宝館の収蔵棟の建設に伴う工事

でも海岸線を示す波打ち際の岩や礫（鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書，1985）が見つかった。低地の数ヶ所から産出した貝化石を使って^{14}C年代測定をおこなったところ、約5,900～5,800年前となることが明らかになった（松島，1974）。当時の海岸線が八幡宮境内とその背後の山裾の海抜8.4mに達していたことも明らかになった（松島，1984b）。産出した貝化石の中にはタイワンシラトリという珍しい貝が見つかった（第2図）。名前の頭にタイワンと付くことから分かるように、現在は台湾以南の熱帯の砂浜海岸で広く生息している貝である。この貝化石以外にも現在の南九州、奄美大島以南などで生息している熱帯～亜熱帯の種も一緒に出ている。このような南方の暖かい海に生息する貝（温暖種）が鎌倉の滑川低地から出るということは、当時この相模湾沿岸も現在より温かな海水が洗う湾であったことを示している。

この点を更に確かめることができたのが長谷の国宝鎌倉大仏地点である。鎌倉大仏は長谷に存在したおぼれ谷低地の奥に位置している（第3図）。先年、大仏の境内を整備するため地質調査をしている。やはり地表から4m下の海抜約8m（松島，1999）の泥層から、ウミニナなど数種類の貝化石が見つかった。その中にカモノアシガキが確認された（第3図）。この貝も現在では紀伊半島以南の内湾でも湾奥の泥干潟にすんでいる熱帯種である。大仏の地下からこれらの貝化石が出たということは、この長谷の谷にも海水が侵入し、この大仏の地点が入江の一番奥の干潟であったことを示している。この点をさらに理解できる資料がある。大仏の位置する長谷の谷を埋める地層は、泥と砂からなる軟弱な沖積層である。そのため大仏を造営するにあたって最初に、大仏殿の礎石地盤を固める版築が行われた。版築の厚さは2mに及んでいて、固い地盤へ改良し大仏の造営と大仏殿の建設を行っていたことが明らかになった（鎌倉市教育委員会，2000）。1923年の大正関東地震では大仏が約45cm前方へ移動、台座前側が約45cm地中にめり込んだため、大仏は若干前のめりとなった（鎌倉市役所自主研究グループNAMAZUの会，2008）。創建当初は大仏を覆う堂があったが、その後の地震と津波で堂は倒壊し流失して無くなり、それ以降はずっと露坐の大仏となっている。この点からも長谷の谷奥まで海水が侵入してもおかしくなかったということを示す。

相模湾は大きな地震が起きるプレートの境界にあり、巨大地震が起きる場所である。そのた

第2図



第3図

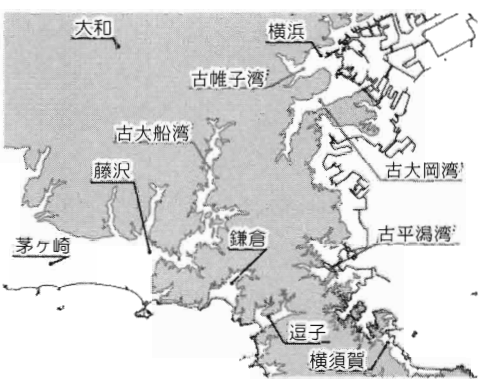
め西暦 818 年以降、相模湾周辺で被害を及ぼした主な歴史地震が 25 ほど知られており（松島 ,2006a)、地震とそれに伴い発生した津波被害が記録されている。歴史的にみると 1703 年の元禄関東地震で生じた津波は、滑川沿いに遡上して二の鳥居付近まで達したことが知られている（羽鳥 ,1996)。また 1923 年の大正関東地震の津波では滑川沿いに 900m 遡上し、延命寺橋まで達して流域の低地に溢れた。長谷の稲瀬川流域では、海岸付近の市街地で水位が 1.4m も上がり江ノ島電鉄長谷駅の線路を乗り越え、長谷寺前の由比ヶ浜通りまで達した（羽鳥 ,1996)。巨大な津波が来れば大仏の場所まで海水の到達したことは納得できる。

この点を理解する資料の一つに第 1 図の明治 15 年の迅速図がある。当時の鎌倉の町は、大町から海に面した材木座さらに小坪にかけて街道沿いに集落があり、JR 鎌倉駅周辺から段葛、さらに、滑川沿いから由比ヶ浜にかけての一帯はほとんど人家がなく、水田や畑などの耕作地であった。現在ではすべて住宅に覆われてしまっている。これまでの低地調査の成果や、鶴ヶ岡八幡宮と鎌倉大仏の両地点で明らかになった約 6,000 年前の海岸線が海抜 8 ～ 8.4m に達していた（松島 ,1984b;1999）ことを基に、約 6,000 年前の海を復元すると滑川低地最奥二階堂の市立第二小学校地点まで達する、入り海（古鎌倉湾）となっていたことが確認できた（第 4 図)。

註：本文に取り上げた ^{14}C 年代値は 1950 年を基準に求められた年代測定値である。最近はほとんど AMS（加速器質量分析法）による同位体分別を補正した年代測定値、あるいは暦年較正年代を用いているが、本論では使用していない。したがって、最初に発表された未補正値の ^{14}C 年代測定値を使っている。たとえば、最近では鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の年代は約 7,300 年前となるが、本文では未補正値の約 6,300 年前を用いている。

2. 貝類群集から古大船湾を復元する

約 6,000 年前の海岸線や内湾環境がどのようなものであったかという復元を、鎌倉に隣接する柏尾川低地で行った。柏尾川は横浜南部の丘陵を開析して流れ、JR 東海道本線沿いに戸塚～大船～藤沢へと流路をとり、JR 藤沢駅東方で境川と合流し片瀬川となり、江ノ島の北側で相模湾へ注ぐ。柏尾川低地に分布する沖積層は、大船貝層と呼ばれる地層である（大塚 ,1930;1931;1937)。大船貝層は柏尾川沿いに，境川と合流する藤沢市川名から上流の横浜市戸塚区柏尾に至る狭く帯状に発達する沖積低地を埋積し分布する海成沖積層である。その形成年代は貝化石の ^{14}C 年代によって約 6,500 ～ 5,100 年前となることが分った（松島 ,1984a)。この大船貝層はまさに縄文海進で形成された内湾に堆積した地層であることが明らかになった。この内湾を古大船湾と名付けた(第 4 図)。湾口は



第 4 図

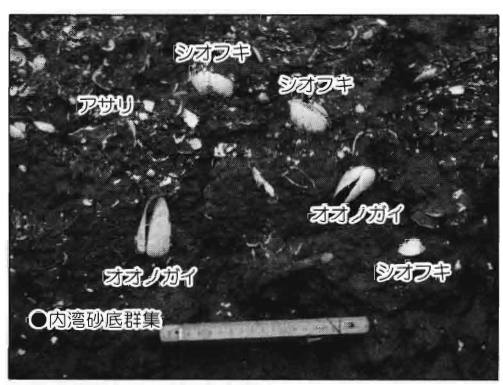
JR藤沢駅の東方の川名にあり、その幅が700mと狭く、湾奥が柏尾となり奥行き13kmに達する細長く複雑な海岸線を示す入り江となっていた。特に湾央部の大船付近には大小様々な形を示す小島が10個以上点在するなど、一層複雑な形の内湾となっていた。この古大船湾や古鎌倉湾、古逗子湾と同時期に形成された内湾には、東京湾側では横浜港周辺に存在した古大岡湾と古帷子湾、古鶴見湾、横浜南部の古平潟湾などが明らかとなった（第4図）。

この古大船湾にどんな貝がすんでいたという調査のきっかけは、この低地が昭和30年代となって急速に住宅団地と大きな工場が進出してきて地域開発が始まった。それと同時期にJR東海道本線が複々線化、さらにたび重なる洪水被害を起こす柏尾川が水害対策のため、護岸の拡幅による工事が連続的に行なわれ、各地で大量の土砂と貝化石が産出した。それらの工事現場に出向き露頭の観察と貝化石の採集をおこなった。

露頭の観察は、泥層や砂層中に貝化石がどのような状態で含まれているかを注意して調べた。特に、貝化石の地層中で生息していた状態（現地性）で埋もれていたか、死後流されて貝殻がばらばらになって堆積(異地性)しているのかを確かめるなどの基本を調べた。貝化石による^{14}C年代測定試料には、確実にその貝が生息していた状態（現地性）を示す個体に限り採取して使用した。明らかになった測定年代は、試料の貝が生きていた年代を示すからである。そのためには二枚貝では左右の殻が合わさって堆積している個体が重要で最適である。巻貝は死後のヤドカリなどのすみ家となり生息していた場所からかなり移動して堆積していることが多く、測定試料には向いていない。

次に、古大船湾における貝類の産出の様子を見ると、湾奥では泥層中にマガキを主体にハイガイ、オキシジミ、イボウミニナなど種が目立つ。特にマガキの産状はカキ礁となっていて、ウネナシトマヤガイやナミマガシワ、タマキビなどの岩礁に生息する貝が共産している。^{14}C測定試料としてはマガキが適し、これを採取して使用した。これらマガキを中心とする貝類の群れについて干潟群集とまとめた（第5図）。砂層中ではアサリ、シオフキ、オオノガイをはじめハマグリなどがみられる。これらの二枚貝はいずれも両方の殻が合わさっているので、その場で生きていて化石となったことを示す。このような種類の貝の仲間については、内湾砂底群集

第5図

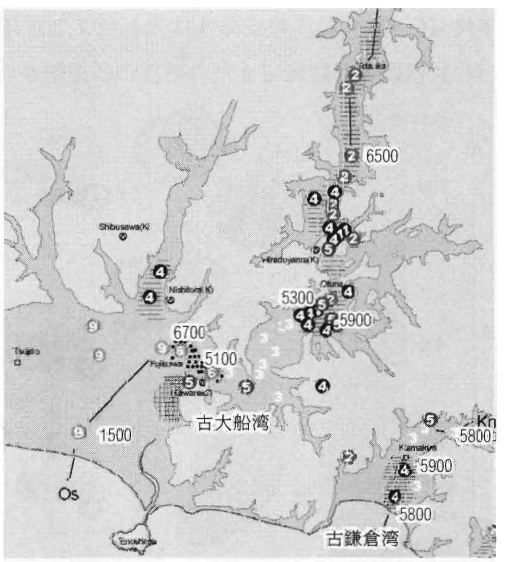


第6図

水域	沿岸水			内湾水					
地理的位置	湾の外側			湾口部	波食台	湾中央部		湾奥部	河口
底質	岩礁	砂泥質	砂質	砂礫質	岩礁	砂質	シルト～泥質	砂泥質	砂泥質
時間帯								干潟群集 マガキ ウネナシトマヤガイ ハイガイ オキシジミ イボウミニナ	感潮域群集 ヤマトシジミ カワザンショウ ヌマコダキガイ
上部浅海帯	外海岩礁性群集 サザエ アワビ クボガイ バテイラ カコボラ 沿岸砂泥底群集 イタヤガイ マツヤマワスレ スダレガイ ヤツシロガイ ナガニシ テングニシ 沿岸砂底群集 ベンケイガイ チョウセンハマグリ ダンベイキサゴ コタマガイ ワスレガイ			内湾岩礁性群集 オオヘビガイ キクザルガイ マガキ 穿孔貝類 砂礫底群集 イワガキ イタボガキ ウチムラサキ イボキサゴ		内湾砂底群集 ハマグリ カガミガイ シオフキ イボキサゴ アサリ サルボウ 内湾停滞域群集 シズクガイ チヨノハナガイ ケシトリガイ ヒメカノコアサリ マメウラシマ	内湾泥底群集 ウラカガミ イヨスダレ アカガイ トリガイ シズクガイ		藻場群集 チグサガイ シマハマツボ マキミゾスズメモツボ	

第7図

とした（第6図）。これら二つの群集が古大船湾で産出する地点をみると、干潟群集は湾奥に、内湾砂底群集は湾央部の砂底に分布していることが明らかになった。湾央部でも泥の地層の中には、ウラカガミ、イヨスダレやアカガイといった貝がみられ、内湾泥底群集と呼ぶ。この貝類はアサリやハマグリとは異なり、水深の大きい場所で生息している。この内湾泥底群集が見つかれば、その地点は内湾でも深い環境となっていたことを教えてくれる。潮通しに良い湾口部では砂礫層が分布しており、この砂礫層からはイワガキ、イタボガキ、ウチムラサキガイなどが産出した。これを砂礫底群集と呼ぶ。さらに、湾の外側は沖積低地が広がっていて、鵠沼海岸をもって相模湾に面している。この沖積低地の地層は砂層となり、本層からはベンケイガイ、チョウセンハマグリ、ダンベイキサゴなど現在の相模湾の湘南海岸や房総九十九里浜、駿河湾の御前崎海岸、九州宮崎海岸など外洋面した砂浜海岸に広く生息する貝類で知られる沿岸砂底群集である。逆に内湾の湾奥になると、最奥が河口となる。河口とか潟は塩分の濃度が低い汽水域である。このような汽水



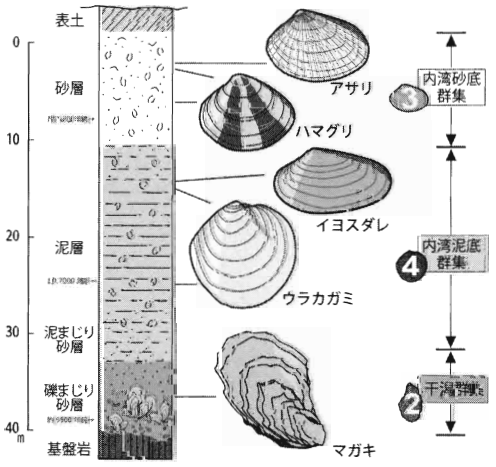
第8図

環境に生息する貝にはヤマトシジミを主体に、フトヘナタリ、カワザンショウ、カワグチツボなどの種がみられる。この貝類群については感潮域群集と名付けた。このように縄文海進に伴い形成された内湾から外洋沿岸に生息していた貝類は、第7図のように特徴ある11の貝類群集に区分できることが明らかになった（松島 ,1984a)。

この貝類群集区分で復元したのが古大船湾と古鎌倉湾であり、第8図の中には5300とか5800、5900、6500という数字が書かれている数字は1950年を基準として測定された^{14}C年代測定値である。ということは6,500年前あるいは5,900年前、5,800年前、5,300年前を示し、海進最盛期の約6,000年前には海水が低地の奥まで入っていたことを表す。つまり、古大船湾、古鎌倉湾や古逗子湾では約6,000年前の海岸線を復元することができた。これらの内湾を埋める低地の地下の貝化石を採集し調査することよって、相模湾沿岸の低地に残されていた縄文海進の様子を知ることができた。

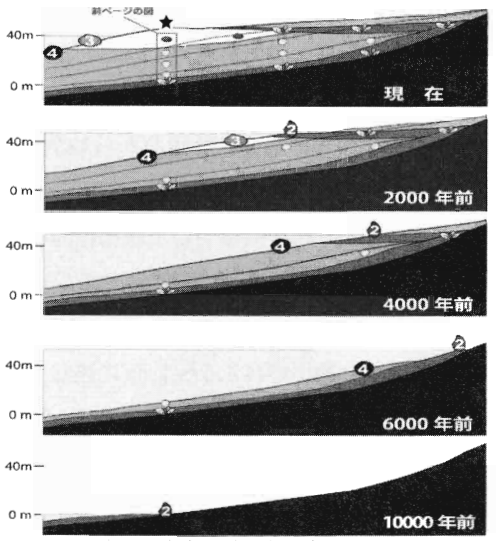
3. 横浜港周辺における完新世の相対的海面変化曲線

最終氷期の最も寒かった約20,000～18,000年前の海面は、現在よりずっと低い位置の海抜－120m付近にあったことが知られている。その後、14,000年前以降の温暖化に伴い急激に海面の上昇がはじまり、約10,000年前には－40m付近に達していたことが東京湾（遠藤ほか ,1979；松島編 ,1987；関本ほか ,2008)、伊勢湾（藤ほか ,1982）や大阪湾（前田 ,1977）で確認されている。このことを明らかにするには、低地に分布する沖積層の基底（基盤）まで達するボーリング掘削をして地層を採取して調べることになる。調べた成果をまとめると次に示す地質柱状図となる。採取した貝化石による地層の形成年代、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の確認による年代（6,300年前：較正年代によれば7,300年前）が明らかとなり、さらに各層準で生息していた貝類群集が確認できた。下部の砂礫層からはマガキ主体の干潟群集が、中部の泥層にはウラカガミとイヨスダレからなる内湾泥底群集が、上部の砂層にはハマグリとアサリで特徴づけられる内湾砂底群集の生息していたことが明らかになった。このような貝類群集の変遷と海面上昇の様子を解説するのが第9図となる。

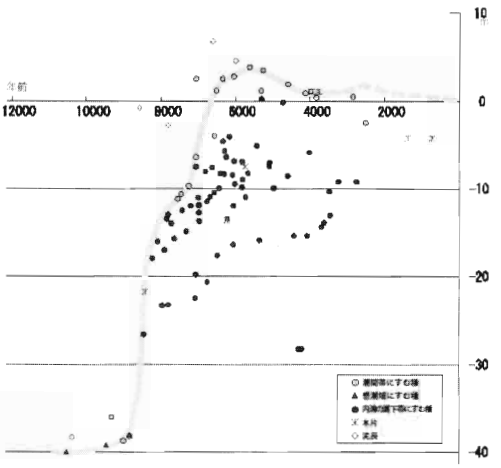


第9図

第10図には完新世となった約10,000年前に低地へ海水が浸入し始めた時期から現在までを五つの時期ついて説明をしている。約10,000年前、低地の地下に形成された内湾において最初に生息を始めるのがマガキを中心とする干潟群集である。内湾泥底群集と内湾



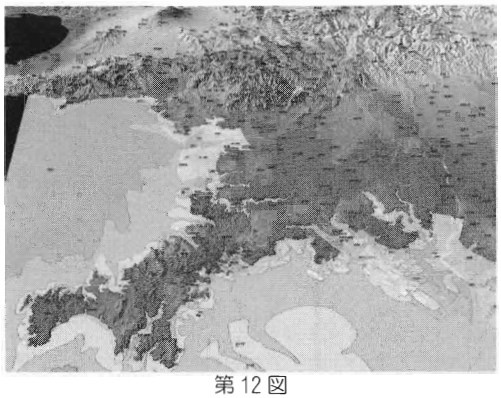
第 10 図



第 11 図

砂底群集はまだみられない。その海面の高度は地下－ 40m 付近にあったことが分った。その後、温暖化は更に進み海面上昇も大きくなり、約 6,500 年前の縄文海進最高期には海面が遂に現在より高い海抜 4m 付近に達したことを示す。湾央部には泥が堆積してウラカガミとイヨスダレからなる内湾泥底群集が生息し、湾の奥部には干潟群集が分布した。海進が最高に達した約 5,500 年前以降は、寒冷化がはじまり海面の低下となっていく。すなわち、「縄文中期の小海退」（太田ほか ,1982）となったことを示す。約 4,000 年前には 2m ほど海面が下がった。それまでの内湾は、湾奥から海水が退き陸地が広がることと、これまで泥の堆積していた湾奥部に砂の堆積が始まる。干潟群集にとってすみにくい環境となってきた。約 2,000 年前の弥生時代では「弥生の小海退」（古川 ,1972; 井関 ,1977）がさらに進み、湾奥の泥干潟は砂浜におきかわり、これまで生息していた干潟群集に代わって内湾砂底群集が生息するようになった。そして、現在の内湾の環境は、泥干潟が失われ砂浜の広がる内湾へと変り、内湾砂底群集が優勢となる環境へ変化している。このような内湾環境の変化をもたらしたのが約 10,000 年前以降に起こった温暖化による海面変化である。そこで、横浜港を中心とした地域で明らかとなった約 10,000 年前以降の相対的海面変化曲線（第 11 図）を取り上げる。

この第 11 図の海面変化曲線は、横浜港を中心とした多摩川・鶴見川低地における約 10,000 年前以降の相対的な海面の動きを示している。100 件以上の ^{14}C 年代資料が得られている中で、マガキやハマグリなど潮間帯に生息する貝と、その ^{14}C 年代、産出深度を調べ曲線でつなげていくことにより海面の上昇した様子を捉えることができる。縦軸は海面（地層）の高さ m、横軸は年代。図の中の点（●：潮間帯にすむ種、▲：感潮域にすむ種）を潮間帯にすむ種の点をむすんだ線となる。このようにしてつくられた曲線を相対的海面変化曲線と呼んでいる。この第 11 図からは約 10,000 年前以降から海面が急激に上昇してきた様子を読み取ることができる。


第12図

この図から、約10,000～9,000年前にかけての縄文時代草創期の海面を求めてみると、－40～－38mにある▲印を線で結んでおりほぼ安定している。その後、約9,000年前から約7,500年前の縄文時代早期にかけて急激な海面の上昇があり、約6,500年前にはついに現在の海面を越えた。そして、海進最盛期の約6,000～5,500年前の縄文時代早期末から前期にかけて現在の海面より高い標高3.5～4.5mに達している。この海進最盛期直後の約5,000年前の縄文時代前期末から中期のはじめになると、一転して海面の低下がはじまる。そして約4,500～4,000年前には1.5mまで下がった。これが「縄文中期の小海退」である。その後、約3,000年前の縄文時代後期にかけて若干の海面上昇が認められるが、縄文時代晩期から弥生時代にかけての約2,000年前には現在と同じか、若干低い位置まで再び海面の下がったとされている。この海面の低下が「弥生の小海退」である。それ以降はわずかな上がり下がりを繰り返して、現在の海面の位置になったと考えている。

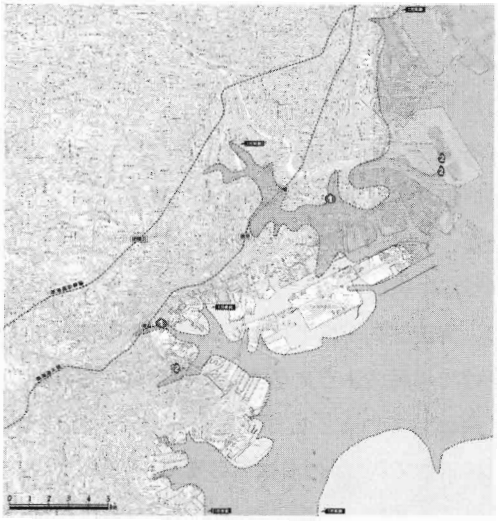
この縄文時代の地球温暖化によって生じた海面変化の様子を約10,000年前以降の海面上昇に注目すると、上昇が特に大きかった縄文海進前半の約9,000～7,500年前の1,500年間では、100年あたり平均2mも海面が上昇している。さらに、約7,500～6,000年前の1,500年間では、100年あたり平均1mとなり海進前半に比べて上昇率が半減している。したがって、縄文海進に伴なう海面の上昇速度は一様でないことが解った。このような縄文時代の海面の位置が大きく変化した状況を、内湾の干潟に生息していた貝化石から読み取ることができた。

これまでの調査で明らかになった東京湾西岸から相模湾沿岸に見られる、約6,000年前の海岸線を復元したのが第12図となる。これは木更津上空からの鳥瞰図である。縄文海進によって東京湾西岸沿いに発達する多摩川・鶴見川の低地と横浜港周辺の低地、さらに相模湾沿岸では相模川低地が広くて奥深い入り江となっている。三浦半島沿岸では古大船湾をはじめ古鎌倉湾、古逗子湾、古平作湾などが、おぼれ谷となって半島へ食い込み、複雑な海岸線を持つ見事なリアス式海岸となっていたことを示す。横浜港周辺における約10,000年前以降の相対的な海面変化が明らかになったので、この海面変化と内湾の環境変遷について横浜港を中心とする地域で復元してみる。

4. 海面上昇に伴う横浜港周辺の環境変遷

(1) 約10,000～9,000年前の縄文時代草創期の海岸線

この時期の海面は－40m前後の低い位置にあった。それ以前の最終氷期最寒冷期には海面が



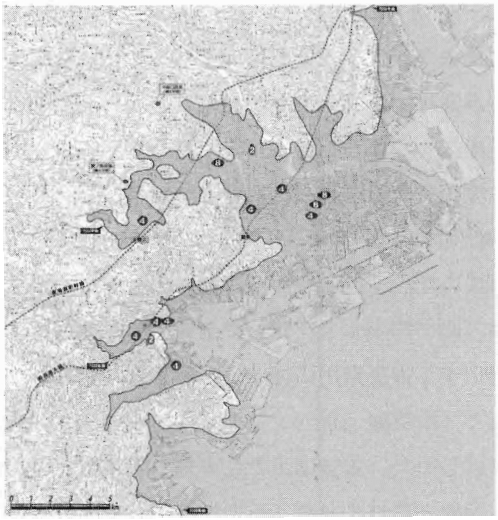
第13図

約－120mも低下していた。その時期に形成された古多摩川、古大岡川や古帷子川へ、その後の温暖化で海面上昇が急激に進み、一気に海水が侵入を開始した時期にあたる（第13図）。古多摩川の河道は現在の流路と全く異なり、多摩川低地の西端に偏り下末吉台地東縁の近くを流れていた。下流の横浜市鶴見区の矢向付近からは河幅が約1kmと広がって南東流し、東京湾を南下する古東京川に注いでいたことが知られており（松島編 ,1987)、この川に沿って海水が入りはじめた。古多摩川の左岸側（東京側）は広く陸地となっており、そこは立川段丘面が広がり、その中央部を荏原台地・武蔵野台地を刻んで流れる古呑川が直線的な流路をとって南下し、川崎市藤崎付近で古多摩川に合流していた。古大岡川と古帷子川は、横浜港内で合流し東へ流れ港の沖合いで古東京川に注いだ。

この時期の貝類の分布から海岸線と内湾環境をみると、古呑川と古多摩川の合流付近から河口域にかけては、ヤマトシジミやカワグチツボなど①感潮域群集の貝類が産出したことから、これらの種が生息する河口付近が汽水域となっていた。それより上流域は海水の影響を受けていなかった。一方、現在の多摩川の河口付近から羽田空港一帯、さらに東側沖合では長さが100m以上に及ぶ大規模なカキ礁の②干潟群集が分布していたことが明らかにされており（遠藤ほか ,1984)、この付近一帯は遠浅な干潟の発達していたことを推定できた。このような環境下では、当時の縄文人にとって、広い干潟の発達する背後の立川段丘面上に住居を構えていたことが考えられる。この点は今後この地域の海成沖積層の下から縄文時代草創期の埋没した住居遺跡がみつかる可能性が高い。

一方、古大岡川と古帷子川沿いでは幅の狭い入り江ができはじめた時期にあたる。古大岡川では中区太田町の海抜－35m付近からヒメシラトリやムシロガイからなる②干潟群集が産出した（松島・山口 ,1987)。また、古帷子川沿いでは相鉄線横浜駅ビルに伴う工事によって、地下約40m下で沖積層の基盤なる上総層群上星川層の泥岩を覆う砂泥層から①のヤマトシジミが確認できた。これらの貝類の分布からみた当時の入り江の奥部が現在の横浜港内となっていたことを示す。そのため港外の埋め立て地の大黒埠頭から扇島にかけての一帯は、下末吉台地から延びる陸地となっていたことを物語る。したがって、この陸地上にも縄文時代草創期の住居の存在したことが予想されるが、その後の海面上昇によってこの地域一帯は全て侵食されて埋没波食台となってしまった。

（2）約7,500～7,000年前の縄文時代早期中頃の海岸線



第14図

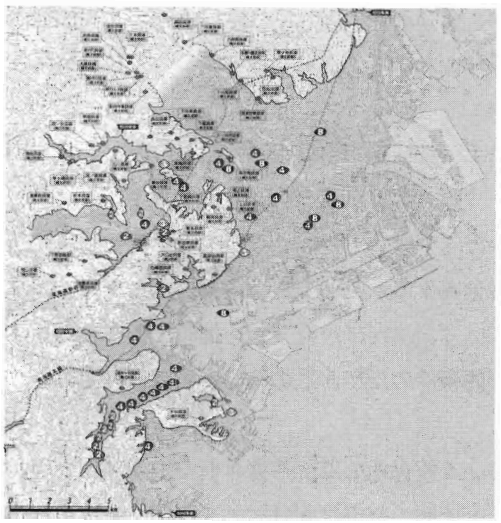
約9,000年前以降の海面は10年あたり平均0.2mの上昇率をもち急激に上昇してきた。この約7,500～7,000年前の海面は第11図に示されるように－10m付近に達していた。古多摩川沿いには川崎市元住吉付近まで侵入していましたが、多摩川左岸側の東京都大田区域はまだかなり広い範囲にわたって陸地となっていた。特に、大田区久が原台の前面は川崎市小向付近にかけて半島のように多摩川の入江（古多摩湾）に突出していた。古呑川沿いではJR蒲田駅付近に古呑の入江(古多摩湾の支湾)となっていた。それより北東の大森にかけてはまだ広く陸地であった。海水はこの古多摩湾や古呑湾より、むしろ鶴見川沿いの低地へ奥深く侵入し横浜市小机付近まで達する、典型的なおぼれ谷の古鶴見湾が形成された（第14図)。

この時期の内湾は、急激な海面上昇によって、上流から搬出される土砂による埋め立てがなく、泥底の環境となっている。各地点ともこれまでのマガキで特徴づけられる干潟群集に代わってウラカガミ、イヨスダレやアカガイよりなる④内湾泥底群集や、シズクガイ、チヨノハナガイやケシトリガイなどの微小貝を主体にウラカガミやイヨスダレを伴う⑧内湾停滞域群集の分布する内湾に大きく環境変化したことを示す。古多摩川から鶴見川沿いに形成されたおぼれ谷形の内湾は、貝類群集の分布からみて現在の東京湾の湾央の水深10～20m前後の泥底環境とよく似たものとなっていたと推定できる。この時期に形成された貝塚はまだ少なかったのか、古多摩湾沿いでは縄文時代早期の子母口貝塚と古鶴見湾沿い宮の原貝塚ぐらいしか知られていない。なお、この子母口貝塚は古多摩湾の入江から1～2kmも離れた下末吉台地上につくられたもので、当時の海岸沿いの低地にはかなりの貝塚がつくられた可能性も考えられる。

一方、古大岡湾と古帷子湾では、それまでの湾奥の干潟が水深の大きな湾央的環境に変わりウラカガミやイヨスダレからなる④内湾泥底群集が生息するようになった。古帷子湾の湾奥は保土ヶ谷区星川付近に、古大岡湾では南区弘明寺付近に位置していた。なお、下末吉台地には、二本木、大口坂、面滝などの貝塚が形成されたが（神奈川県立歴史博物館,2008)、まだその後の縄文時代前期の貝塚数と比べて極めて少ない。

(3) 約6,500～5,500年前の縄文時代早期末から前期の海岸線

この時期は縄文海進最盛期である。本地域では海面が現在より4m前後も高い位置に達した。そのため海が低地の最も奥まで入り、複雑な海岸線をもつ入江を形成した（第15図)。当時の海岸線は多摩川沿いでは川崎市等々木緑地と千年とを結んだ線付近に達していた。著しく谷奥



第15図

まで入江となったのは古鶴見湾であり、湾奥が川向町から佐江戸町、支流の早淵川沿いでは大棚町付近まで支湾となった。これらの海岸線を地形的にとらえると下末吉台地・武蔵野台地沿いでは、台地と低地の境界付近の等高線10mの通る位置の下にあったと推定される。多くの地点から産出した貝化石から推定して、この時期の内湾には貝の種類数が多く、しかも個体数も豊富となり、貝類にとって最適な環境となっていた。泥底の湾央部ではシズクガイ、チヨノハナガイ、ケシトリガイやヒメカノコアサリなどからなる⑧内湾停滞域群集とウラカガミ、イヨスダレ、アカガイやトリガイなどからなる④内湾泥底群集とが広く分布する。両群集の分布状況より古多摩湾から古鶴見湾の綱島付近まで、内湾でも水深10～20m前後の湾央泥底環境となっていたことが明らかとなった。両内湾の奥部は泥質干潟が発達して、マガキ、ハイガイやオキシジミガイの②干潟群集が、特に古鶴見湾の菊名付近、鳥山町付近から大熊町にかけては干潟群集で占められた。一方、一部の砂質干潟ではハマグリ、アサリ、シオフキやカガミガイなどの③内湾砂底群集構成種が分布していた。例えば下末吉台地前面のJR鶴見駅付近とか鶴見川低地の砂地の分布する場所ではごく限られて生息している。この点に注目すると武蔵野台地沿いの下丸子から大森に至る海成砂層の分布する地域では、ハマグリ、アサリやカガミガイなどの③内湾砂底群集がこの頃から生息できる沿岸環境になっていたと推測される。

干潟群集構成種は内湾砂底構成種と共に当時の人々の重要な食糧となり、古鶴見湾と古多摩湾左岸の荏原台地には、全国的にみて最も多くの貝塚が形成された。古多摩湾右岸では久本・新作八幡台・新作大原・影向寺台・有山台・井田伊勢台・矢上谷戸・矢上下町・下組・下田東・下田西・下田南・宮ノ台など、左岸では瀬田・稲荷丸北・六所東・上沼部・久ケ原・庄仙・雪ケ谷・塚越貝塚など、古鶴見湾沿岸では南加瀬・北加瀬金山・箕輪・駒林・南綱島・下組西・下組東（第16図）・高田・南堀・西ノ谷・茅ヶ崎・境田・北川・新羽・北新羽・駒岡・師岡・菊名・表谷東・折本・折本西原・梶山・供養塔・笹山貝塚・下菅田・上菅田など多くの貝塚が知られている（神奈川県立歴史博物館，2008）。このよ

第16図

うに多数の貝塚が古多摩湾と古鶴見湾の沿岸につくられたのに比べて、東京湾に面した側の下末吉台地では上末吉不動堂・上台・寺ノ谷・風早台・入江町・神之木台・二本木・白幡浦島丘など少ない。

古帷子湾では古帷子川の低地に沿って湾奥が保土ヶ谷区和田町付近に位置していた。湾口のJR横浜駅付近から湾央の西区南浅間町付近では、ウラカガミ、イヨスダレやアカガイなどよりなる④内湾泥底群集や、シズクガイ、チヨノハナガイやケシトリガイなどの微小貝を主体にウラカガミやイヨスダレを伴う⑧内湾停滞域群集の分布する水深の大きい内湾となっていた。本湾を縁取る台地は古鶴見湾と異なり急崖となっていて、浜がほとんど無く簡単に入江へ接することが困難な状況となっていた。このような地形的条件のためかこの湾沿いでは、湾奥に近い台地上に仏向町貝塚がみられるにすぎない。

古大岡湾は野毛・久保山・清水丘の台地と山手・本牧台地の間に形成された幅が狭く細長いおぼれ谷の入江である。湾奥部は弘明寺付近から上大岡の南方にかけての一帯で、②干潟群集構成種のマガキとハイガイが分布する干潟となっていた。湾口から湾央となる南区若宮町付近まではシズクガイ、チヨノハナガイ、ケシトリガイやヒメカノコアサリなどからなる⑧内湾停滞域群集とウラカガミ、イヨスダレ、アカガイやトリガイなどの④内湾泥底群集とが分布する水深の大きい内湾となっていた。湾を取り巻く台地は急崖となり古帷子湾と同様に砂浜がほとんど形成されてなく海岸線から急に深くなる湾となっていた。そのためもあって古帷子湾と同様に清水ヶ丘貝塚がわずかに確認されている。

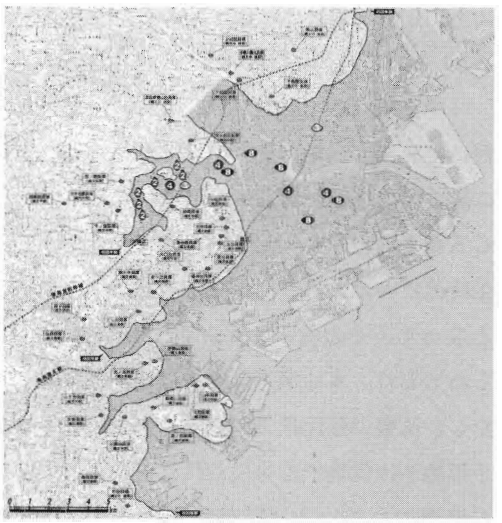
本牧台地の南東部は東京湾に面し、本牧の入江には大きく成長したマガキの②干潟群集やハマグリやアサリの③内湾砂底群集が分布する遠浅な浜がみられた。台地には間門平台貝塚が知られている。根岸湾沿岸は根岸から屏風ヶ浦にかけて急崖が湾を縁取り、海岸線と接する地点ではウラカガミとイヨスダレの④内湾泥底群集が確認され、急深な海岸となりまだこの時期には浜がほとんど形成されてなかった。

（4）約4,500年前の縄文時代中期の海岸線

約5,000年前より海面の低下が始まった。これがいわゆる「縄文中期の小海退」としてとらえられている。それまでの湾奥の干潟は、離水し陸地へ変わっていった。前の時期より海面がおよそ1～2m低下したことにより、これまで存在した内湾が急激に縮小したのである(第17図)。古鶴見湾は海岸線がJR新横浜駅付近まで一気に後退した。古多摩湾では多摩川が上流から押し出す大量の土砂や流木などで、湾奥部から埋め立てがはじまり（正岡，1981)、現在の中原区木月の東急東横線付近まで海岸線が後退したことで知られている。東京湾に面している下末吉台地沿いでは、これまでの泥地の海岸が沿岸流の発達により砂浜海岸へと急激に環境変化をした。同様に大森から池上、下丸子にかけての武蔵野台地前面の浜も、細かい泥の堆積物から粗い砂の堆積することにより、急速に砂浜海岸が発達して上部砂層となった。

貝化石の情報では、海面の低下でその影響を強く受けたのが湾奥部の干潟に生息していた②

干潟群集である。この状況を古鶴見湾で観察ができ、この時期の湾奥がJR新横浜駅付近に位置し、そこで形成された②カキ礁が、現在の鶴見川に沿って港北区新羽橋付近から下流の大綱町にかけての河床に露出していた（第18図）。しかし、古鶴見湾の湾口部では、シズクガイ、チヨノハナガイ、ケシトリガイやヒメカノコアサリなどからなる⑧内湾停滞域群集が確認でき、この付近一帯はまだ水深の大きな泥底であった。古多摩湾の中央部もまだ水深10～20m前後の内湾環境となっていたことを、各地点から産出する⑧内湾停滞域群集と④内湾泥底群集の存在から知ることができた。一方、蒲田付近ではそれまで⑧内湾停滞域群集の生息する泥底環境から、一転して砂の堆積環境となり、ハマグリ、シオフキやイボキサゴなどの③内湾砂底群集の生息する砂浜海岸へとなった。そこで、この縄文時代中期に形成された貝塚を古鶴見湾沿岸でみると、下田西・井田（西）・北川・宮の原・中ノ窪・池辺・師岡・源東院・利倉・荒立・大口台・会ヶ谷貝塚など少数となり、その規模も小さくなった。



第17図

第18図

古帷子湾も湾奥が星川付近まで後退し、沿岸には砂浜が形成され遠浅の入江になってきた。同様に古大岡湾でも湾奥が弘明寺付近まで後退し縮小した。なお、湾口に近い山手台地には縄文時代中期の元町貝塚がみられた（第19図）。

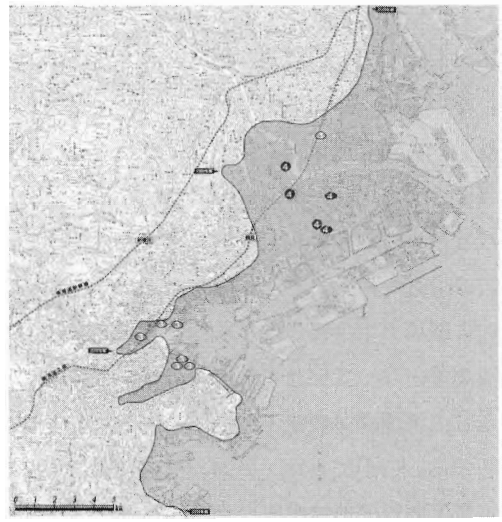
第19図

その後、縄文時代後期になると、東京湾に面した沿岸は上部砂層の堆積がさらに進んで、これまで比較的少なかった東京湾に面した台地上に貝塚がつくられるようになった。多摩川左岸の荏原台地では大森貝塚をはじめ千鳥窪・馬込・下沼部・多摩川園北貝塚などみられる。横浜港周辺では古帷子湾、古大岡湾、根岸湾がさらに遠浅になり、下末吉台、野毛～久保山～清水丘の台地、山手～本牧台地には、小仙塚・別所・史ケ丘・三ッ沢・帷子・仏向・池ノ坂・伊勢

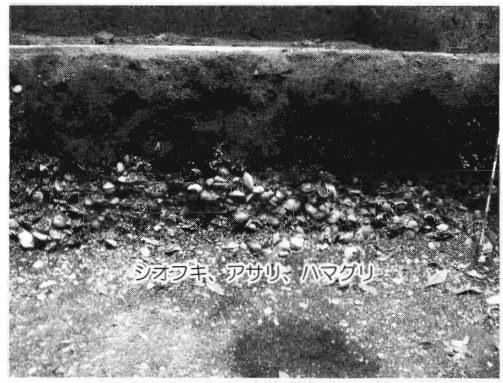
山・山手・三殿台・杉田・稲荷山貝塚など、多くの貝塚が形成されることになった。

（5）約2,500年前の縄文時代晩期末から弥生時代の海岸線

「縄文中期の小海退」は約4,000年前頃まで続いていたが、その後、約3,500～3,000年前の縄文時代後期には若干の海面上昇をみた。ところが、約2,500年前の縄文時代晩期末から弥生時代にかけて再び海面低下「弥生の小海退」となった。その低下の大きさは1m前後と考えられており、本地域では明瞭な資料がない。しかし、基盤の隆起量の大きな鎌倉滑川低地や逗子市池子川低地では弥生時代に形成された河跡が確認されている（神奈川県埋蔵文化財センター,1990)。多摩川沿いでは当時の汀線が第20図のようにJR新川崎駅あたりから鹿島田付近に位置していたと推定される。この海岸線もその後も多摩川より押出される多量の土砂によって急速に埋め立てられ後退していった。この搬出された土砂の一部は、古鶴見湾の湾口に当たる南加瀬にも達している。これまでの泥の堆積した穏やかな内湾環境は、一転してその土砂が湾口から湾内へ逆流し堆積したため、古鶴見湾はしだいに潟から湿沼へと変わっていった。



第20図

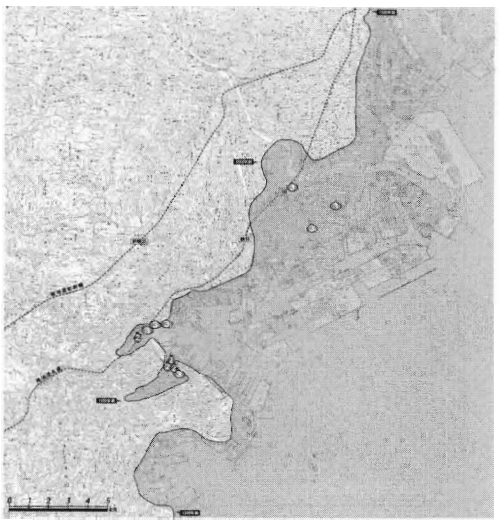


第21図

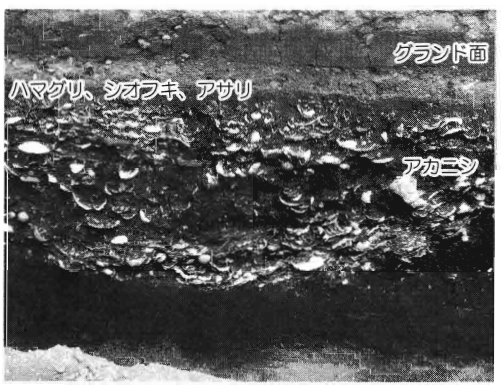
東京湾に面した大森から蒲田や鶴見から子安にかけての海岸は、沿岸流の発達によってさらに遠浅の浜となりハマグリやアサリ、イボキサゴなど③内湾砂底群集の生息する海岸へ変わった。一方、湾央にあたるJR川崎駅から東方の桜本付近にかけては、まだ④内湾泥底群集と⑧内湾停滞域群集が確認でき、依然として水深の大きな内湾環境にあった。

古帷子湾と古大岡湾では、沿岸流による砂の堆積が活発となり、砂浜の一気に発達してハマグリ、アサリ、シオフキやイボキサゴなど③内湾砂底群集の生息する浜へと変わった。特に古大岡湾では本牧から新山下にかけての台地の縁を沿岸流が侵食し、削り取られた土砂が湾口を塞ぐように砂礫堆として桜木町方向へ延びていった。さらに、根岸湾沿岸の杉田の低地では第21図で明らかなようにアサリを主体にシオフキ、ハマグリからなる③内湾砂底群集が生息する砂浜が形成された。

（6）約1,500年前の古墳時代の海岸線



第 22 図



第 23 図

この時代になると多摩川低地では砂堆上には古墳や貝塚が形成され、古墳時代人の生活の場が低地に広く拡大したことを示す。この時期の海岸線を古墳時代の貝塚、砂堆の位置、海成層の分布から復元を試みた（第 22 図）。

多摩川低地では現在の多摩川流路に沿って川崎市小向町付近まで海が入っていた。それ以外の蒲田から大森にかけてとか、鶴見から子安にかけての地域では、埋立てが行われる前の明治時代の海岸線に近い位置にあったと推定できた。この時期の内湾はいずれの地点で砂層が確認され、これまでの泥層の堆積する環境からすっかり上部砂層の堆積する環境へ置き換わったことが分かる。特に、多摩川のデルタの発達によってこれまで水深の大きかった古多摩湾が上流から運ばれる土砂で急激に埋立てられ陸化した。

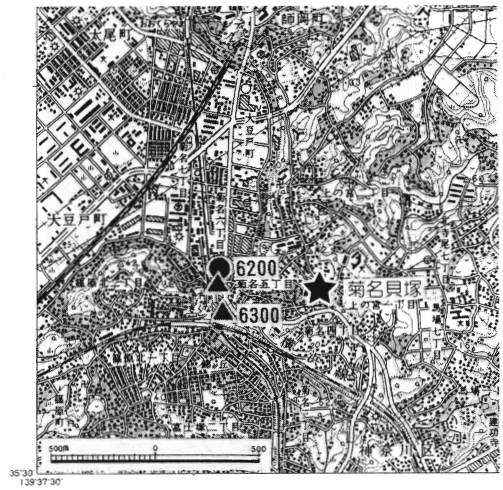
当時の浅海の様子は、JR 川崎駅前地下街工事で産出したイボキサゴ、シオフキ、ムシロガイなどの貝類から、③内湾砂底群集が生息する砂質干潟となっていた。JR 川崎駅より沖合に位置する川崎市藤崎から田島付近でもハマグリ、シオフキ、イボキサゴなどの③内湾砂底群集の分布することが確認されており、広く遠浅な砂浜海岸となっていた。このような沿岸環境は、さらに新しい時代へと続き、明治時代中頃以降の埋立てが始まるまで存在した。

古墳時代の遺跡に注目すると、多摩川左岸では関（1978）が指摘するように、浜端貝塚、下袋貝塚、清光庵、糀谷神社遺跡などが、海岸線に最も近い砂堆上に形成されている。下末吉台地の前下の低地でも鶴見神社貝塚・小池踏切貝塚が確認されており（神奈川県立歴史博物館 ,2008)、これらは当時の海岸線の位置を知る重要な手掛かりとなっている。同様に根岸湾沿岸でも第 23 図で示されるように杉田東漸寺貝塚（横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団 ,2004，松島ほか ,2006）が海岸線背後の砂堆上に形成されており、旧汀線を知る重要な遺跡となっている。

5. 貝塚出土貝類から推定する採貝活動域について

（1）横浜港北の菊名貝塚

古鶴見湾の湾奥に位置する菊名貝塚（第24図）は、縄文時代早期末から前期にかけて形成された貝塚で、古鶴見湾が最も拡大した時期と一致する。この貝塚出土の貝類は酒詰（1959）により巻貝類16種、二枚貝類20種、角貝類1種の計37種が明らかにされていた。その後、小宮（1977）の調査では巻貝類8種、二枚貝類13種の計21種が報告されたが、どの種類も酒詰の報告した種類と重複する（第25図）。したがって、両調査から明らかになった本貝塚の特徴種は、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミ、オオノガイの二枚貝で構成され、スガイ、ウミニナ、イボウミニナ、カワアイなどの巻貝がわずかに含まれていた。



第24図

一方、貝塚が位置する下末吉台地から西方へ約500m下った東横線菊名駅付近に分布する海成沖積層からは、ハイガイ、ハマグリ、マガキ、オキシジミ、オオノガイの二枚貝とウミニナ、イボウミニナ、ヘナタリなどの巻貝が産出した。この沖積層の貝類組成は、菊名貝塚のそれと一致する。沖積層産のマガキの^{14}C年代は、約6,300～6,200年前の年代値が得られた（松島編,1987）。この年代はまさに菊名貝塚の形成年代と一致することが確かめられた。すなわち、菊名貝塚の人達は日頃の採貝活動を行うのに当たって、住居から最も近い場所として貝塚の西方に広がる古鶴見湾の干潟に出かけいったことを示していた（第24図）。その後、桑山（1980）によれば、前述の内湾の貝類以外に少量であるが、外洋性種のアワビ、トコブシ、ウバガイを確認している。これら3種は古鶴見湾をはじめ東京湾では全く生息していない貝である。したがって、この3種の貝類は外部から持ち込まれたことを物語っている。特にウバガイは寒流系の貝として知られ、現在の生息域は茨城の大洗海岸を含む鹿島灘以北からオホーツク海沿岸となっている。当時の南関東の海況環境は、現在より少なくとも2℃ほど高かく温暖化していた

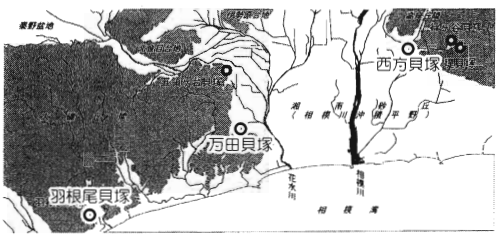
		桑山(1980)	小宮(1976)	沖積層
二枚貝類	ハイガイ	●	●	●
	サルボウ	●	●	●
	アカガイ	●	–	–
	カリガネエガイ	●	●	–
	マガキ	●	●	●
	イタボガキ	●	–	–
	ウネナシトマヤガイ	●	●	●
	カガミガイ	●	●	●
	オキシジミ	●	●	–
	マテガイ	●	–	–
	アサリ	●	●	●
	イソシジミ	●	●	–
	マテガイ	●	–	–
	シオフキ	●	●	●
	ウバガイ	●	–	–
	オオノガイ	●	●	–
	ムラサキガイ	–	●	–
	ハマグリ	●	●	●
	ヤマトシジミ	●	–	–
巻貝類	オンガイ	●	–	–
	トコブシ	●	–	–
	イボキサゴ	●	–	–
	スガイ	●	●	–
	カニモリガイ	●	–	–
	ウミニナ	●	●	●
	イボウミニナ	●	●	●
	ツメタガイ	●	●	●
	カワアイ	–	●	–
	ヘナタリ	–	●	–
	ナガニシ	●	–	–
	イボニシ	●	●	–
	アカニシ	●	●	–
	バイ	●	–	–
	ムシロガイ	–	●	●
	キクスズメ	●	–	–
	ナミギセル	●	–	–
	ミスジマイマイ	●	–	–
角貝類	ツノガイ	●	–	–
	ヤカドツノガイ	●	–	–

第25図

と指摘している（松島・大嶋 ,1974)。そのため本種の分布の南限にあたる東関東より、さらに北からもたらされてきたと推定できる。一方、アワビとトコブシは三浦半島南部から房総南端部の外洋水が洗う岩礁に生息しているのとから、これらの岩礁海岸地域から持ち込まれたことを示している。したがって、日頃の菊名貝塚人の採貝活動は、住居に最も近い古鶴見湾の干潟へ出かけていた。時に交易？として東京湾外の三浦半島南部へ出かけていたことが推測でき、さらに東関東とは何らかの交流のあったことを示唆する資料として、ウバガイが出土していることであり、注目される種の出土でもある。

（2）平塚の万田貝殻坂貝塚

万田貝殻坂貝塚は相模川低地の南西端、千畳敷山（湘南平）・高麗山北麓と相模川低地と境をなす斜面地上に形成された貝塚で（第 26 図)、縄文時代前期の黒浜式土器を出土する遺跡として知られる（八幡ほか ,1925; 山崎ほか ,1925; 日野 ,1987 ほか)。この黒浜式土器を伴う万田貝殻坂貝塚の形成期は、まさしく縄文海進最盛期に当たり、海水が相模川低地の奥まで侵入し相模湾が最も拡大した時期と一致する（松島 ,1984a)。

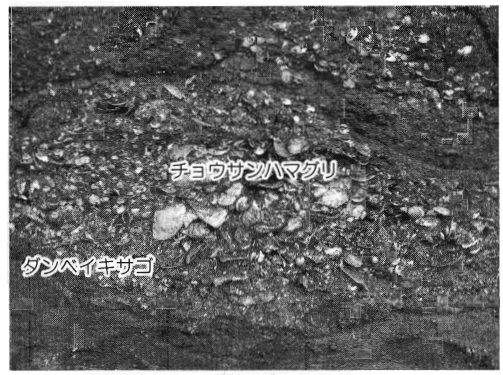


第 26 図

万田貝殻坂貝塚から出土した貝類は、八幡ほか（1925）によって最初に行われて以降、これまで何回かの調査が行われてきた。確認された貝類は、ハイガイ、ハマグリ、チョウセンハマグリ、サルボウ、アカガイ、イタヤガイ、イタボガキ、マガキ、ヤマトシジミ、ワスレガイ、オキアサリ、ダンベイキサゴ、イボキサゴ、キサゴ、サザエ、イボニシ、バイ、ツメタガ、コロモガイ、カワニナなどが明らかにされている（酒詰 ,1960 ほか)。その中でハイガイを除けば他の種はいずれも相模湾沿岸域で現在も生息している（生物学御研究所 ,1971)。明らかになったこれらの種を松島（1984a）による貝類群集区分（第 7 図）に対応させると、七つの貝類群集構成種にまとめられる。すなわち、①ヤマトシジミとカワニナは感潮域群集、②ハイガイとマガキは干潟群集、③ハマグリ、サルボウ、イボキサゴ、ツメタガイは内湾砂底群集、④アカガイとイタボガキは内湾泥底群集、⑤チョウセンハマグリ、ダンベイキサゴ、キサゴ、ワスレガイ、オキアサリは沿岸砂底群集、⑥イタヤガイ、バイ、コロモガイは沿岸砂泥底群集、⑦サザエとイボニシは岩礁性群集における主要構成種である。

最近の平塚市・玉川文化財研究所（2007）による貝塚調査では、大量の貝類が出土した（第 27 図)。それは多板類 1 種、巻貝類 32 種（陸産巻貝 8 種)、角貝類 1 種と二枚貝類 21 種の計 53 種である。確認した陸生の巻貝を除いた、海生の貝類で目立つ種をあげると、最も多いのが第 27 図で確認できるように、チョウセンハマグリとダンベイキサゴ、続いてコタマガイとヤマトシジミである。出土が少ないのに保存が良く確実混じっている貝にはハマグリ、カガミガイ、

サルボウ、オキシジミ、マガキ、バイ、アワビ、スガイ、イボニシ、レイシ、イシダタミ、イソシジミ、ツメタガイなどでる。わずかであるが確認できた種にはカワニナ、ハイガイ、イボウミニナ、ウミニナ、アサリ、サトウガイ、イタヤガイ、サザエ、アマガイなどである。この出土した貝類の主組成をまとめると、六つの貝類群集とからなる。すなわち、①チョウセンハマグリとダンベイキサゴを主体にコタマガイ、イソシジミ、サトウガイなどの沿岸砂底群集構成種が大半を占める。続いて②ハマグリ、カガミガイ、アサリ、サルボウ、ウミニナなどの内湾砂底群集構成種、③オキシジミ、マガキ、ハイガイ、イボウミニナなどの干潟群集構成種と、④アワビ、サザエ、スガイ、イボニシ、レイシ、イシダタミ、アマガイなどの岩礁性群集構成種、⑤イタヤガイとバイの沿岸砂泥底群集、さらに⑥感潮域群集構成種であるヤマトシジミとカワニナをともなっている。なお、特徴的な内湾泥底群集を示す構成種はみあたらなかった。



第27図

貝類遺骸群集から推定される沿岸環境は、第32図に示す約6,500～5,500年前の縄文海進最盛期に相模川低地に形成された内湾を復元したもので、海成沖積層から産出した各貝類群集の分布を読み取ることができる。今回の調査で明らかになった万田貝殻坂貝塚出土の貝類遺骸群は、前述のように六つの貝類群集主要構成種からなる混合遺骸群であった。この成果を基に各貝類群集の生態的特徴からその群集の分布域を推測してみる。

まず、沿岸砂底群集は第32図に示されるように相模川左岸側では、茅ヶ崎から藤沢にかけての低地で確認されている。すなわち、藤沢では市役所地下、上村四丁目と引地川左岸、茅ヶ崎では現海岸線から約4km奥の茅ヶ崎円蔵となる。一方、相模川右岸側では河口から約5km奥の平塚市四之宮で知られる。いずれの地点も砂層中よりチョウセンハマグリやワスレガイ、イタヤガイ、ヤツシロガイなどの貝化石が産出しており、広く沿岸砂底群集が分布していた。この貝化石産出地域は、地形区分から捉えると相模川低地でも湘南砂丘地（太田・瀬戸,1968;神奈川県,1986）と一致する。しかも縄文海進最盛期に形成された湾の海岸線に近い位置となっている。現在の沿岸砂底群集の分布は、相模湾沿岸でも砂浜が発達する湘南海岸の現海岸線から、沖へおよそ1kmまでの水深3～15mの範囲に広く生息する（松島,1984a)。これらの点から海進最盛期の海岸線は、湘南砂丘地と背後の相模原台地との境の前面に位置しており、茅ヶ崎円蔵か

貝塚名	主体貝類	構成貝類
万田貝殻坂貝塚（玉川文化財研究所, 2003）	ダンベイキサゴ	チョウセンハマグリ、コタマガイ、バイ、ワスレガイ、サトウガイ、ホソヤツメタガイ、サザエ、スガイ、イボニシ、レイシガイ、ハマグリ、アカニシ、アサリ、ウミニナ、マガキ、オキシジミ、ハイガイ、シオヤガイ、ヤマトシジミ、カワニナ、ヒカリギセルなど63種
羽根尾貝塚（玉川文化財研究所, 2007）	ダンベイキサゴ	チョウセンハマグリ、コタマガイ、サトウガイ、ヤマトシジミ、マメタニシ、タニシ科、サザエ、イシダタミ、バテイラ、イボニシ、サラガイ類、イガイ？など18種
西方貝塚（黒木, 1981）	ヤマトシジミ	チョウセンハマグリ、ダンベイキサゴ、コタマガイ、サトウガ、ナガニシ、バイ、サザエ、バテイラ、マガキ、ハイガイ、イタボガキなど

第28図

ら辻堂羽鳥、藤沢本町にかけては遠浅な沿岸環境となっていたといえる。したがって、本貝塚より出土したチョウセンハマグリとダンベイキサゴを主体の沿岸砂底群集は、貝塚地点から東へおよそ2kmにあたる高麗山の北東山麓前面の浜、現在の花水川を挟んで中里・桜ヶ丘から山下東南部にかけて分布していたと推定される。この地域は海進最盛期に形成された内湾西側の湾口部に位置して、沿岸流が洗う砂底の発達する環境となっていたと考えられる。干潟群集については、筆者が以前に本貝塚遺跡から800mほど北に位置する高村団地で掘削された地質ボーリングコアを調べ、マガキの化石を確認していたことから、この付近までは干潟群集が分布する干潟環境になっていたと判断した（松島 ,1984a)。

この地域は地形的に千畳敷山（湘南平）・高麗山の北側背後にあたる場所で、山下南西部から万田・高村にかけての一帯は奥まった入江となっていて、外洋水の影響を直接受けにくい内湾環境であったことを示す。そのため貝塚の前面には遠浅な干潟が広がり、砂地の発達する浜ではハマグリ・カガミガイ・サルボウなどの内湾砂底群集が、泥地の浜にはハイガイ・マガキ・オキシジミ・イボウミニナなどの干潟群集の貝が生息していたといえよう。この干潟へ続く背後の潟沼や河口には、ヤマトシジミとカワニナの感潮域群集が分布していたと推定される。つまり本貝塚の西側に位置する出縄との間の低地および、東側の高根との境に流れ出る谷の河口付近にできた潟沼などに生息していたと推測できる。

一方、アワビ・サザエ・スガイ・イボニシ・レイシ・イシダタミなどの岩礁性群集構成種は、高麗山南東側の高麗から大磯照ヶ崎にかけての地域に形成されていた岩礁海岸に生息していたものであろう。この地域は相模湾に面していて海成段丘（米倉ほか ,1968；熊木・市川 ,1982）が発達しており、海成沖積層の堆積はほとんどなく埋没波食台（松島 ,1984b）となっている。すなわち、ここは外海に面しいて常に強い波浪や沿岸流を受けて波食台の発達する岩礁海岸となり、岩礁性群集にとって最適な生息環境にあったといえる。現在でも照ヶ崎では岩礁性群集構成種が生息している。

このように出土した貝類遺骸群集の貝類についてその生息していた分布域を絞ることができ、万田貝殻坂貝塚人の採貝活動の範囲を推測することも可能になった。すなわち、貝塚地点から半径およそ2.5kmの範囲内の距離で、出土した貝類は全て採取できたことになる。地形変化に富んだ相模湾でも波静かな内湾沿岸に住居を構えていたことを示していた。

（3）茅ヶ崎の西方貝塚

本貝塚は万田貝殻坂貝塚から東北東へ約8.5km隔てた相模湾東岸の田名原段丘（久保 ,1997）先端部に位置する（第26図)。貝塚出土の貝類組成はヤマトシジミが全体の90%以上を占め、その他にチョウセンハマグリ、ハマグリ、ハイガイ、マガキ、イタボガキ、サトウガイ、コタマガイ、ナガニシ、バイ、サザエ、バテイラ、ダンベイキサゴ、キサゴなどが確認されている（第28図）（岡本 ,1969,1974,1981ほか)。これらの貝類の生態的特徴は河口や潟などの汽水域に生息するヤマトシジミ以外は、いずれも内湾の干潟から外海に面した沿岸砂底に生息する貝類と

なっている。すなわち、大量なヤマトシジミ群に、マガキやハイガイの干潟の貝、ハマグリの内湾砂底の貝、チョウセンハマグリ・ダンベイキサゴ・サトウガイ・コタマガイの沿岸砂底の貝、ナガニシやバイの沿岸砂泥底の貝、サザエやバテイラの岩礁の貝がわずかに混じっていたことを示す。このような特徴を示す西方貝塚の貝類組成を基に貝塚周辺の海域環境を復元してみる。

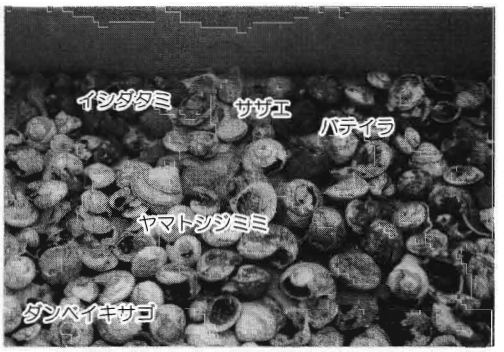
西方貝塚が位置する小出川と目久尻川下流部に分布する沖積層調査は、増渕ほか（1998）によって行なわれた。それによるとそれぞれの低地は、約6,400年前まで小規模なおぼれ谷の入江となっていて、内湾泥底群集を含む泥層が厚く堆積していた。しかし、約6,200年前以降になると入江の口は閉塞され急速に潟沼へ変わり、さらに泥炭層が形成される湿地へと変遷していったことが明らかにされた。また、松田ほか（1988）や大矢ほか（1991）によると相模川低地の相模川右岸側で現海岸線から約5km奥の砂堆は、約6,500年前より形成が進行し、約6,000年前には完了したことを指摘している。このことからみて相模川左岸側の本地域も砂堆の発達によって、約6,200年前以降には入江は閉鎖され潟へと変わったと判断できる。岡本（1974）は西方貝塚の形成期には砂州または砂丘によって入江が閉塞され潟が存在し、ヤマトシジミを採取していたことを推定した。この推定の正しかったことが増渕ほか（1998）などによる遺跡周辺の沖積層調査から裏付けられた。したがって、西方貝塚が形成された縄文時代前期の黒浜式期には、すでに貝塚前面の入江は潟へと大きく地形変化をしていた。この点は大磯丘陵で明らかになった羽根尾貝塚の形成時期とよく似ていて、共通する自然環境のもとで貝塚が存在したといえる。

西方貝塚人にとって住居の前の潟にはヤマトシジミが生息しており、常に採貝活動を行うことができる最適な場であった。時に第32図に示されているように貝塚の南東側に広がる相模湾沿岸へ出かけ、沿岸砂底群集が生息する砂浜海岸でチョウセンハマグリ・ダンベイキサゴ・サトウガイ・コタマガイなどの貝や、ナガニシ・バイなどの沿岸砂泥底群集の貝などを採取してきたことがわかる。つまり、ここでの採貝活動は貝塚から約1km範囲で十分に行える優れた立地環境となっていた。本貝塚は万田貝殻坂貝塚と比べて採貝活動がより地形的に恵まれた環境にあった。

（4）大磯丘陵南西部の羽根尾貝塚

本貝塚は大磯丘陵南西部の古中村潟（松島,2003）の潟畔に造られた貝塚で、万田貝殻坂貝塚から南南西へおよそ8.5km離れたところに位置する（第26図）。本貝塚は大磯丘陵南西部で初めてみつかった大規模な貝塚（第29図）であった（玉川文化財研究所,2003）。貝塚は地表から2～4m下の泥炭層中から発見されたもので、その高度は海抜約24～22mに位置する。貝塚からは保存のよい多種多様の遺物にともなって、大量なヤマトシジミ（第30図）を含めて動植物遺体が出土した(玉川文化財研究所,2003)。遺跡の立地環境を知るためすぐ際で深さ6mのトレンチ調査をおこなったところ、地表から約5.5m下の粘土層中に鬼界アカホヤ（K-Ah）火山

第29図



第30図

灰が確認された（松島・新井 ,2003)。この鬼界アカホヤ火山灰層の直下からは、下原層を特徴づけるサルボウやシオヤガイ、コゲツノブエガイなどを含む海成層が現れた（松島・新井 ,2003)。一方、羽根尾貝塚の形成年代は出土遺物から縄文時代前期の関山期（約 5,700 ～ 5,500 年前）から諸磯期(約5,400～5,300年前)までであることが明らかにされた(玉川文化財研究所 ,2003)。

本貝塚を構成する貝類は大きく成長したヤマトシジミを主体に、ダンベイキサゴやベンケイガイ、チョウセンハマグリ、ワスレガイ、コタマガイ、サトウガイ、サザエ、イシダタミなどが混じっていた（第 28 図)。ところが約 6,500 年前まで存在した古中村湾に生息していたサルボウやアサリ、シオヤガイ、マガキ、オキシジミガイ、コゲツノブエガイなどの内湾性種は全く含まれていない。出土した貝類の生息環境をみるとヤマトシジミは、潟および河口など海水の影響をうける感潮域に生息する汽水域群集主要種である。なお、鬼界アカホヤ火山灰を介在する腐植質泥層中にはヤマトシジミが含まれていた。一方、ヤマトシジミ以外のダンベイキサゴやベンケイガイ、チョウセンハマグリ、ワスレガイ、コタマガイ、サトウガイ、サザエ、イシダタミなどは、外海に面した沿岸砂底と岩礁海岸に生息する貝である。これらは現在の大磯～国府津の相模湾沿岸に生息している。このような本貝塚出土の貝類組成は、前述の西方貝塚のものとほぼ同じとみなすことができる。この貝類組成の生態的特徴から羽根尾貝塚形成期の沿岸環境を復元すると、約 6,500 年前まで存在した古中村湾が " 大磯型地震 " による大地の隆起で突然に消滅した。その直後、約 6,300 年前の鬼界アカホヤ火山灰層の降灰時には、完全に古中村潟へと変わっていたことが分かった（第 31 図）（松島 ,2003)。

そこで羽根尾貝塚人の採貝活動は、主に住居前面の古中村潟でヤマトシジミを取ってきていたが、時には 1km ほど離れた相模湾沿岸へでかけ、ダンベイキサゴ・ベンケイガイ・チョウセンハマグリ・ワスレガイ・コタマガイ・サトウガイなどの沿岸砂底群集の貝を採取してきた。さらに 8.5km ほど離れた大磯照ヶ崎の岩礁海岸まで行き、サザエとかイシダタミなどの岩礁性群集の貝を採っていたと推察できる。したがって、この照ヶ崎の岩礁海岸は羽根尾貝塚人と万田貝殻坂貝塚人とが出会い交流できた、共通な採貝活動の場となっていた可能性が高い。

羽根尾貝塚の形成期は、前述のように縄文時代前期の関山式期から諸磯式期である（玉川文

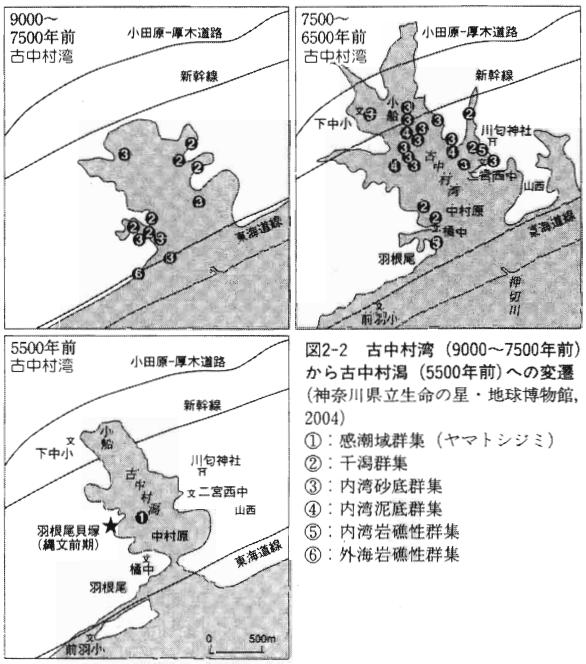
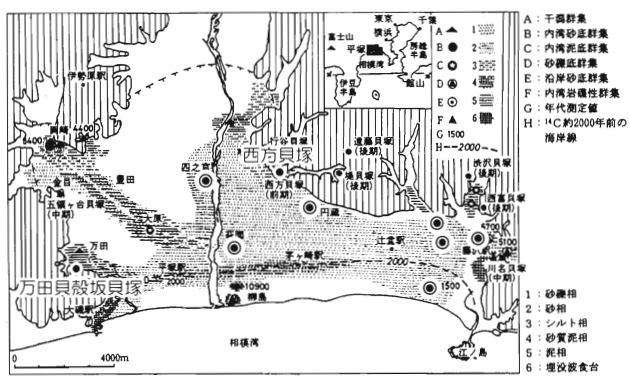


図2-2　古中村湾（9000～7500年前）から古中村潟（5500年前）への変遷
（神奈川県立生命の星・地球博物館，2004）
①：感潮域群集（ヤマトシジミ）
②：干潟群集
③：内湾砂底群集
④：内湾泥底群集
⑤：内湾岩礁性群集
⑥：外海岩礁性群集

第31図

化財研究所，2003)。この時期はまさに南関東で広く認められている海進最盛期であり、横浜港周辺の大岡川・帷子川・鶴見川・多摩川流域では、この時期に海水が低地の最も奥まで浸入し、その沿岸台地上には多くの縄文時代前期の貝塚が形成された。関東平野でも奥東京湾と呼ばれる内湾が形成された時期にあたる。しかし、大磯丘陵南西部ではこの時期に起こった"大磯型地震"に伴い大磯丘陵の基盤が大きく隆起して、それまで内湾であった古中村湾が一気に離水し、潟沼の古中村潟へ変わった。この地震変動については羽根尾貝塚遺跡の発見によって考古学の面からも明らかとなった。

羽根尾貝塚が形成された古中村潟の誕生は、"大磯型地震"による基盤の隆起によって古中村湾が一気に潟に変わったことによる。一方、西方貝塚の前面に形成された潟は、海進最盛期直前までの急激な海面上昇が終わり、海面が安定したことにより、沿岸流の流れが活発となり、沿岸侵食で砂堆の形成が急速の進んだことによる。その砂堆の発達によって相模原台地沿岸につくられていた小さな入江は、閉鎖されて潟沼へと変化したことを示す。両地域に起こった時期が約6,500～6,200年前である。その形成過程は全く異なるものであるが、両貝塚にとってよく似た自然環境となったことで、類似した貝類遺骸組成を残した。



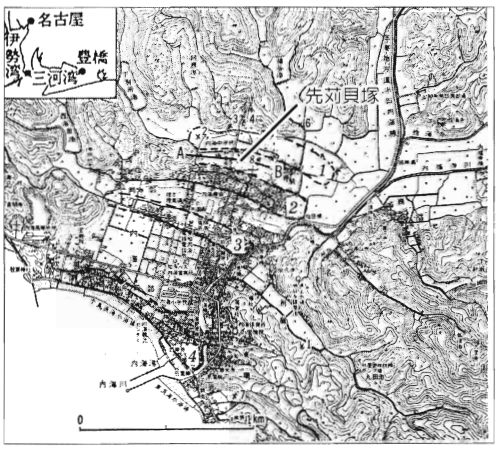
第32図

6. 海底に埋没した縄文時代早期の2遺跡が示す旧汀線

約 10,000 年の縄文時代草創期の海面は－ 40m 付近にあり、温暖化が進んだ約 9,000 年前から海面が急激に上昇したことが、横浜港周辺の調査で明らかとなった。この海面上昇（縄文海進）の初期、海面がまだ現在より低い位置にあった時期、その汀線付近につられた遺跡は、現在ではいずれも海底に埋もれていることが予想されていた。しかし、この点を検証できる証拠がなかなか見つからなかった。最初に発見されたのが、愛知県知多半島の内海低地の地下から確認された先苅貝塚である。さらに、最近見つかったのが館山の沖ノ島遺跡である。この海底 2 遺跡は、共に縄文時代早期に形成されたものである。

（1）知多半島内海低地の先苅貝塚遺跡

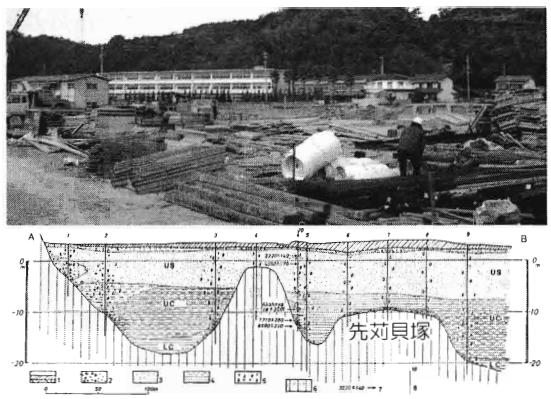
伊勢湾に面した愛知県知多半島の先端に近いところに内海の低地がある（第 33 図）。この地へ 1978 年名古屋鉄道により知多新線が引かれ、内海駅を建設中に地下から貝塚が見つかった。発見したのは地元で中学校教師をされていた山下勝年さんである。



第 33 図

地表から 13m も深いところから掘り出された黒土の中に、沢山の貝殻と一緒に土器や動物の骨が含まれていた。厚手の土器には、はっきりと縄文時代を特徴づける模様が認められた。掘削工事は低地の表面から始まった。表層から数 m 下の砂層からは沢山の貝殻が出てきた。さらに深く掘り下げ、硬い基盤岩を覆う最後の土砂が黒土であった。その黒土中に縄文土器が含まれていた。とっさに何処かからか持ってきた黒土ではないかと疑ってみたが、作業員もそのようなことは全く無いという。確かに 13m も下の地下から掘り出された黒土で、土器と貝殻を多く含んでいたことが明かになった。ということは貝殻と一緒に沢山の土器が出土した黒土は、貝塚である可能性が高いと判断できる。山下さんはそれを見たとたん考え込んでしまった。これまでの知識ではとても信じられない事実が、工事現場にひろがっていたのである。順序だてて説明すると、①：地表面から 13m も下に達する基礎杭の穴の底より掘り出された黒土中に土器、貝殻、動物の骨が含まれていた。②：土器は縄文式である。③：工事現場の地表面は砂地の土壌であるが、2 ～ 3m 下からはハマグリ、アサリ、シオフキ、イボキサゴなどの貝を沢山含んでいる砂層であり、土器や貝殻、動物の骨を含んだ黒土はさらにその下にあったことを示している。黒土の上を覆う貝を含んだ地層は、海に堆積した層である。つまり、山下さんは海水が内海の谷へ侵入する以前に、この地にすんでいた縄文人が残した貝塚が黒土中にあり、海底に沈んだのではないかと推測した。

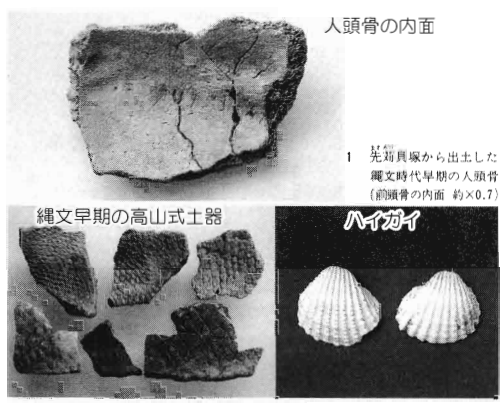
山下さんは推測した海に沈んだ縄文貝塚を、いかに調査して証明するのか大きな課題に直面した。まず、町の教育委員会に届けて、この貝塚遺跡の調査準備にかかり、駅舎を建設してい



第34図

る名古屋鉄道の工事事務所から調査協力と建設に関連する地質資料の提供を受けた。調査には名古屋大学考古学教室の渡辺誠先生、松島にも連絡があり、山下さんを中心とする調査チームができスタートした(南知多町教育委員会,1980)。調査は自然科学と考古学の両面から進めまとめた。この内海低地には第33図のように4列の砂堆が発達しておる。一番古い砂堆が低地の奥に位置し、縄文時代のかなり早い時期に形成された砂堆である。その後だんだん海が退いていくことによって砂堆が現在の海岸側にでき、低地が広がってきた。集落が砂堆の上にあって、背後の湿地は田んぼになっていた。砂堆上には集落があるため駅舎は建てられない。背後の田んぼのところに駅舎を建設することになった。そのため建物と線路の建設する上で、支持基盤の確認のため沢山のボーリング調査が行なわれた。ボーリング調査で明らかになった内海低地の地下の様子が、第34下図にまとめられた。それによると海抜－10～－9mに平坦な平場が確認できた。この場所に貝塚がつくられていた可能性が高いと考えられた。そこで、自然科学の調査では深度20mに達するボーリングをして、厚さ17.5mの沖積層のコアを採取した。

沖積層からは、貝、有孔虫、花粉、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）と^{14}C年代測定など調べようと各種の試料を取り分析を行なった。貝化石の出現をみると、下部の砂層にはヒメカニモリ、ハイガイ、ウネナシトマヤガイの干潟群集が、中部の泥層からはシズクガイ、ケシトリガイ、マメウラシマの内湾停滞域群集、上部の砂層からはイボキサゴ、ハマグリ、シオフキの内湾砂底群集へと変化して分布したことが分かった。その群集に生息年代をみると下部の干潟群集は約8,600～7,700年前となり、海水は内海の谷へ海水が入ってきたのが海抜－13mで約8,600年前のことであることが明らかになった。中部層の泥層の堆積は約7,700～5,500年前といえる。この時期の内海湾の水深は、内湾停滞域群集から推測して－10～－15mと深い入り江となっていたといえる。特に鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）が堆積した約6,300年前がもっとも水深の大きい内湾環境となっていたことも分かった。上部の砂層の堆積は約5,500～3,000年前となることも明かになった。海抜－10～－9mから掘り出された縄文土器と一緒に出土したハ



1　先苅貝塚から出土した縄文時代早期の人頭骨（前頭骨の内面　約×0.7）

第35図

イガイの^{14}C 年代は、約 8,300 年前となり縄文時代前期前葉であったことが分かった。一方、500 点を超える縄文式土器は、紀伊半島の高山寺から出土している厚手の押型文土器に対応する高山寺式土器となることが明らかとなり、紀伊の高山寺から持ち込まれたものであることも判明した（第 35 左下図）。高山寺式土器は、瀬戸内海の黄島貝塚から出土する黄島式土器より一型式だけ後の約 8,400 年前とさるので、一緒にでたハイガイの年代とほぼ一致した。土器の保存状態は良く、長い間海底に埋もれていたため表面が風化せず非常によく残り、高山寺式の模式の土器よりもわかりやすい状態であった。土器と一緒に人の頭骨（第 35 上図）の一部がみつかった。その他にも石器、骨角器の道具、イノシシ、シカ、クロダイやスズキなどの魚骨、マガキ、ハイガイ（第 35 右下図）、アサリ、サザエ、アカニシなどが出土しており、海抜－ 10 ～－ 9m の平場が貝塚であったことを物語っている。先苅貝塚が形成されていた時期の汀線を沖積層の貝類群集とその年代から推定すると、－ 12m 前後にあったと考えられる。貝塚は海面から 2 ～ 3m ほど高い位置にあったといえる。

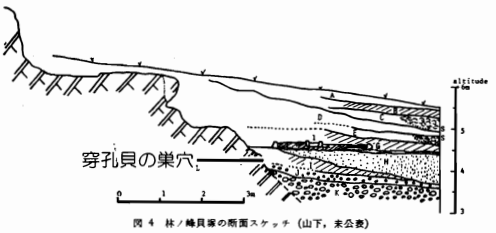
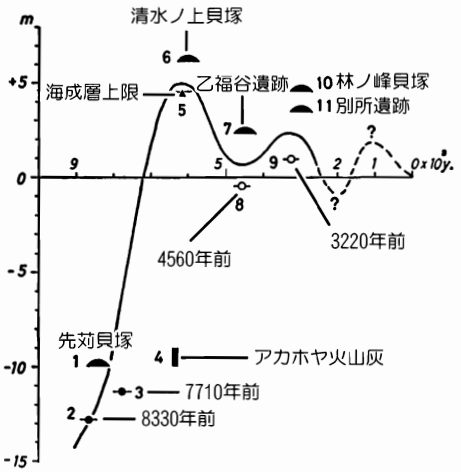


図 4　林ノ峰貝塚の断面スケッチ（山下，未公表）
A：表土，B：縄文後期・堀ノ内 II 式，C：貝層，縄文後期・堀ノ内 I 式，D：間層，E：貝層，G：縄文後期初頭・住居址，H：砂層・縄文中期最末葉の土器を包含，I：縄文中期，J：縄文中期前期，K：縄文中期初頭～縄文前期末，l：林の峰貝塚の住居址，L：基盤岩(師崎層群).

第 36 図



第 37 図

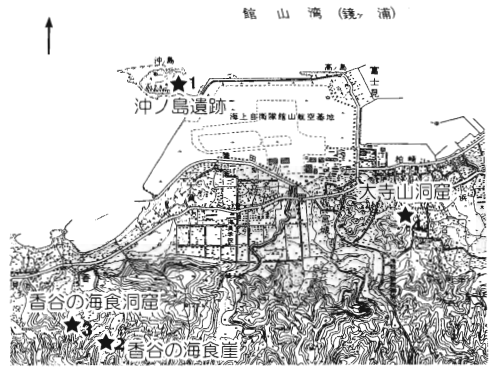
この内海地域には縄文時代の多くの遺跡が分布する。その遺跡の一つ縄文時代後期の林ノ峰貝塚の発掘を観察し露頭を調べてみた。遺跡の端にでている基盤岩の表面には、二枚貝により穿孔された丸く凹んだ穴がかなりの数残されていた（第 36 図）。よく観察すると貝殻は溶けてしまっているが、穴の形からニオガイかニオガイモドキがすんでいた巣穴であることが分かった。この巣穴の高さを測ると＋ 4m である。この海抜 4m に穿孔貝の巣穴が残されていることは、この位置に海面があったことを示す。発掘した林ノ峰貝塚は縄文時代後期に形成されたことから、それ以前の汀線であることを物語る。内海で縄文海進最盛期の約 6,000 年前に形成された清水ノ上貝塚は、海抜 6m にあることが報告されている（南知多町教育委員会 ,1976)。ということはこの海抜 4m の海面は、約 6,000 年前の汀線を示していたこたが確かめられた。

これらの資料から内海低地における約 9,000 年前以降の相対的な海面変化曲線を描くと第 37 図のようになる。海水が内海低地へ入ってきたのが約 8,700 年前で－ 13m である。約 8,300 年前を示す先苅貝塚は、海抜－ 10 ～－ 9m の台地上にあり、大体 2 ～ 3m くらい下に海面のあったことを推測できる。その後の急激な海面上昇で先苅貝塚は一気の海底に没してしまった。海面

が最も高い位置に達したのは約 6,000 年前の海抜 4 ～ 5m である。その後の海面の変化は、「縄文中期の小海退」や「弥生期の小海退」などの変動を経て現在の位置に達していることが明らかになった（松島 ,1983)。

（2）房総半島南端の館山沖ノ島遺跡

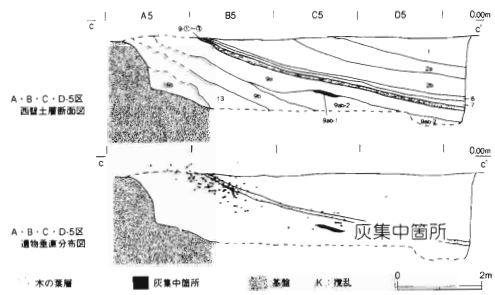
房総半島南端、館山の沖ノ島で最近明らかに海底遺跡を取り上げる。館山湾南岸に位置する沖ノ島は、現在では陸続きとなった小島である（第 38 図)。沖ノ島は南房総国定公園内にあり、海浜公園として多くの人々に利用されている。この小島の海岸も沢山の漂着ゴミのよって、ゴミの島となりつつある。地元の人達が大量のゴミの清掃を行ないながら、ビーチコーミングをしている。海岸に打ち上がるいろいろなものを拾い集め分類しコレクションしている考古学の好きな人もいた。この海岸の 1 ヶ所からはなぜか、イルカの耳石、いわゆる布袋石が沢山拾える。それはいろいろな色調を示し綺麗なことから、昔から根付として珍重されてきた。布袋石が拾えることが人々に知られ今までは数 100 個も拾われている。この布袋石（イルカの耳石）と一緒に、かなりの数の縄文土器が見つかっている。



第 38 図

第 39 図

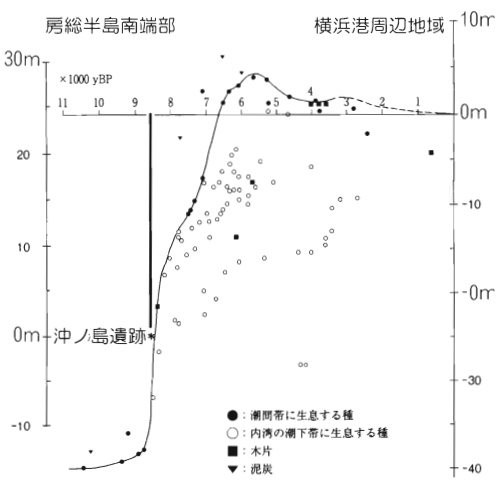
多数の縄文土器が海岸で拾えることは、背後に縄文時代の遺跡があって、そこから流れ出て海岸に打ち上がったものと推測できるが、この島は海抜 10m ほどしかなく基盤の岩石が露出しており、縄文の遺構などは全く無く不思議なものとされてきた。最近になってこの不思議さを解明するため、縄文式土器を千葉大学考古学教室へ持ち込み岡本東三先生に詳しく調べてもらった。縄文式土器は南関東でも相当に古い、縄文時代草創期撚糸文式土器であることが解った。拾われた地点は沖ノ島の東海岸である。この土器とその出土地点に注目した千葉大学考古学教室では、早速、遺跡確認のために本格的な発掘調査を 2003 年から実施した（千葉大学考古学研究室 ,2006)。



第 40 図

第 41 図

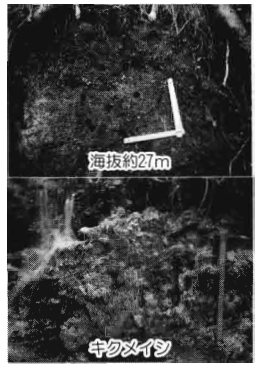
発掘地点は第 39 図のように沖ノ島東海岸の波打ち際である。発掘調査は潮が引く時間帯に合わせて実施し、満ち潮になると発掘現場がすっかり水没してしまう。翌日は水没して土砂に埋もれたトレンチを再び綺麗に整形しながら掘削調査を行った。トレンチは海岸線から海に向かって長さ 10m、幅 1m、深さ 2m 近くとなる。地層はいずれも砂層で予想以上に硬く絞まっており、遺物包含層を含めて陸側から海に向かって緩く傾斜している（第 40 図）。遺物の出土した深度は、汀線付近から－ 1m の範囲となっており、現在の海面下から確実に出土した。確認された遺物は無文土器、黒曜石製の石器、炭、灰の集中箇所、イルカの骨などであるが、沢山出土したイルカの骨（第 41 下図）以外はそれほど多くない。他の多くの遺跡で認められるような、この場で生活をしていた気配を全く感じない状況である。出土した無文土器は縄文時代草創期の大浦山式土器とか三戸式土器となり（第 41 左上図）、東京湾を挟んで対岸の三浦半島から持ち込まれたことを示す。土器と一緒に出土した植物遺体により、8,705 年前と 8,735 年前の ^{14}C 年代が明らかにされた。イルカの骨は肋骨とか脊椎骨が大部分を占め頭骨が稀である。それから一緒に黒曜石（第 41 右上図）が出てきている。このよう点からまとめてみると、骨の出土部位とその保存状態からみて、イルカの群れを湾奥の浅瀬に追い込み大量に捕えたと推測できる。捕えたイルカをこの低地へ持ち込んで、一部は解体をした可能性もうかがえる。そこで火を焚いた後の炭とその灰の集中箇所がみつかったわけである。このような場所を今の地形から考えると、遺物の出土高度は 0 ～－ 1m である。先に述べた知多半島の先苅貝塚の場合と同様に当時の汀線は、遺物が出土した高度から 2m くらい下に位置していたのではないかと推定でき、－ 3m 前後にあったといえる。この明らかになった沖ノ島遺跡の ^{14}C 年代値と海抜高度を、横浜港周辺で明らかになった約 1 万年前以降の相対的海面変化曲線に投影してみる（第 42 図）。そうすると、遺跡は現在の標高に換算して海抜－ 25m 前後に位置していたことを推測できる。この地点から下へほぼ 2m 下がったところで海面変化曲線と交差する。つまり、当時の海面が 2m 前後の低い地点の海抜－ 27m 付近にあったと推定できる。



第 42 図

香谷で確認された
穿孔貝による巣穴化石
（海抜 27～26m）

香谷の沼サンゴ礁



第43図

沖ノ島遺跡は約8,700年間に、およそ25m前後の隆起のあったことを示した。房総半島南端の本地域は10,000年前以降の基盤の隆起量が、いかに大きいのかを表している。横浜港周辺では約6,000年前に縄文海進最高期には海面が4.5m前後の高さに達したが、この房総南端部ではなんと海抜26～27mもの高さに達していたことが明らかになった。その証拠の一つは海抜16～17mの高さから見つかる沼のサンゴ礁の化石がある（第43下図）。このサンゴ化石の年代は、約7,000～6,500年前で、最も温暖化した時期と一致する。このサンゴ礁化石は熱帯のサンゴ礁と異なって、水深が10mくらいの海底でないと生息できない。それより浅いところでは冬期の低水温に耐え切れず死んでしまう。水深が10mぐらいであると冬期の季節風の影響を受けず、水温が17℃以上を保つことで生息することができる。サンゴの生息に必要な最低温度は17℃である。したがって、それより高い海水温が望まれる。冬期の海水温が17℃となる北限が、房総半島南端部の水深10mの場所となっている。また、サンゴと一緒に産出する貝類、貝形虫、有孔虫はいずれも潮間帯で生息する種ではなく、上部浅海帯に生息する種となっている。このように複数の生物の生態的特徴は、水深10m前後の環境で生息している生物群であることから、化石サンゴ礁が産出する高度に10mの海水を加算すると海抜26～27mとなる。この高さが沼のサンゴ礁化石が生息していた約7,000～6,500年前の海面の位置といえる。そこでこの推測した海抜26～27mの高さに、当時の海面が存在したのかを確認する調査をおこなった。山の中腹に点在する崖をしらみつぶしに観察したところ、ついに化石サンゴ礁から約10m上方に推定値と同じ高さに穿孔貝による巣穴痕の残された露頭（第43上図）を2ヶ所でみつけた。この穿孔貝の巣穴が化石サンゴ礁の生息していたときの汀線であることを証明した。

この発見した研究成果を1980年の日本地質学会で発表した（松島，1980；1990）。しかし、古生物を研究されている人は大いに関心を示したが、地形や地質を研究されている人にとってそれほどの反応を占めさなかった。なぜかというと、発見した露頭は穿孔貝の巣穴跡であることは理解するが、その形成年代を示さなかったため、いくらサンゴや共産した貝類、貝形虫や有孔虫の生態から推定し求めた高さであると解説しても納得されなかった。今から29年も前のことであるからなかなか理解されなかったのも当然であろう。最近なって、日本大学の大学院生石田大輔さんが、私が調べた崖の反対側の崖を調査して、海抜27m前後の高い位置に多数

第44図

の穿孔貝の巣穴とヤッコカンザシ化石を見つけ（第44図）、その^{14}C年代測定をした（Ishida et.al,2002）。その結果は私の示した汀線の測定値と年代値がいずれも一致した。したがって、この海抜27mは、房総半島南端部における約6,500年前の海面を示していたことが25年後に証明された。

このように高い位置に旧汀線が残されている原因は何かというと、地震による大地の隆起である。房総半島南端部は1923年の大正関東地震で1.8m、1707年の元禄地震の時には5mも土地の隆起したことで知られる。本地域は日本列島の中でも特に巨大地震によって土地が大きく隆起する顕著な場所であることを示す。

以上2地点から見つかった縄文時代草創期末から早期初頭の遺跡が、海底に埋もれていた様子の一端を知ることができた。そしてこれらの時期の海面が、現在よりずっと低い位置にあったことも確認できた。さらにそれぞれの遺跡は、短期間存在して水没したことも明らかとなった。

7. まとめにかえて

三浦半島北西岸に位置する片瀬川の支流柏尾川（古大船湾）、鎌倉の滑川（古鎌倉湾）と逗子の田超川低地（古逗子湾）を埋積する海成沖積層の貝化石は、内湾から沿岸に生息する主要な11の貝類群集にまとめられる。約10,000年前からの縄文海進で、おぼれ谷へ海水が侵入し最初に出現するのが干潟群集であり、その後の海面上昇で海進最盛期（約6,500～5,500年前）には水深の大きな内湾が形成され湾央部では内湾泥底群集が、湾奥部に干潟群集が繁栄した。それ以降（約5,000年前：縄文時代中期以降）は、沿岸流の発達と河川の搬出する土砂の堆積による砂層の発達で内湾砂底群集が繁栄した。このような貝類群集の消長は、それぞれの時期の貝塚出土の貝類組成と対応している。

海進最盛期の海面の高さは、横浜港周辺では約4～3mに達した。それ以降の海面の変化は「縄文中期の小海退」や「弥生の小海退」を経て現在に至っている。その結果、約10,000年前以降の相対的海面変化が求められたことにより、横浜港周辺では大きく（1）～（6）の時期における貝類群集の分布から内湾を復元できた。さらに、復元された内湾とその沿岸に形成された貝塚では、出土貝類の組成を基に採貝活動域の一端を復元することができた。

約10,000～7,000年前の縄文時代草創期から早期前半までの海面は、まだ低い約－40～－10mの位置にあった。その時期に海岸線近くにあった貝塚は、その後の海面上昇によって失われたか、海底に没してしまった。その後、海に沈んだ遺跡の上には厚く堆積物が覆っていて発見するには困難となっている。幸いに発見された先苅貝塚遺跡や沖ノ島遺跡などの情報から、多摩川低地や相模川低地の地下には、海成沖積層に埋もれている縄文時代草創期から早期の遺跡のある可能性が大きいことを示唆する。

謝辞

本稿は2009年3月8日に開かれた神奈川県考古学会の2008年度考古学講座「貝塚とは何か」で講演した内容をまとめたもので、発表と投稿の機会を与えて下さった岡本孝之・中村若枝の両氏に深くお礼申しあげます。また、神奈川県考古学会の会誌編集担当の川嶋実佳子氏、霜出俊浩氏と永田史子氏には大変お世話になり厚くお礼申しあげます。

引用文献

遠藤邦彦・高野　司・関本勝久 1984「関東平野の軟弱地盤」『月刊地球』6（11）海洋出版
千葉大学文学部考古学研究室 2006『千葉県館山市沖ノ島遺跡　第２・３次発掘調査概報』千葉大学文学部考古学研究室
藤則雄・松島義章・藤井昭二・北里洋・森忍 1982「名古屋港とその周辺の完新統の古生物に基ずく環境解析」『第四紀研究』21（3）日本第四紀学会
古川博恭 1972「濃尾平野の沖積層―濃尾平野の研究，その１－」『地質学論集』(7) 日本地質学会
羽鳥徳太郎 1996「津波を知る・防ぐ」『自然災害を知る・防ぐ』古今書院
日野一郎 1987「万田貝塚発掘調査略報」『平塚市文化財調査報告書』平塚市
平塚市・玉川文化財研究所 2007『神奈川県平塚市万田貝殻坂貝塚（万田遺跡第９地点）発掘調査報告書』平塚市
Ishida,D. ,Hirota,M. Yoneda,M.,Morita,M.and Endo,K.2002「Ages of the Holocene former shoreline from emerged erosional landforms along the southern coast of the Boso Peninsula,Central Japan」『国立環境研究所研究報告』(170) 国立環境研究所
井関弘太郎 1977「完新世の海面変動」『日本の第四紀研究』東京大学出版会
神奈川県 1986『土地分類基本調査　藤沢・平塚　５万分の１地形分類図』神奈川県
神奈川県埋蔵文化財センター 1990「No.1 － A 地点の弥生時代旧河道より出土品について」『池子遺跡群調査だより』(8) 神奈川県埋蔵文化財センター
神奈川県立歴史博物館 2008 『神奈川県貝塚地名表』神奈川県立歴史博物館
神奈川県立生命の星・地球博物館 2004 『企画展ワークテキスト +2℃ の世界』神奈川県立生命の星・地球博物館
鎌倉市教育委員会 2002 『神奈川県鎌倉市鎌倉大仏周辺発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
鎌倉市役所自主研究グループ NAMAZU の会 2008『新版鎌倉震災誌』鎌倉市役所自主研究グループ NAMAZU の会
菅野三郎・加藤直 1954「鎌倉産貝化石について」『東京教育大学地質鉱物学教室研究報告』(3)，東京教育大学
Kanno,S.,1955 Faunal analysis of the molluscan fauna from raised beach deposits of Kamakura,Kanagawa Prefecture. Sec.Rep.Tokyo Kyoiku Daigaku,sei.C, (28)
小宮　孟 1977「横浜市菊名貝塚採集の魚貝類遺存体」『史学』47（4）三田史学会
久保純子 1997「相模川下流平野の埋没段丘からみた酸素同位体ステージ5a 以降の海水準変化と地形発達史」『第四紀研究』36（3）日本第四紀学会
建設省河川局海岸課 1993『海岸の散歩－三浦半島－沿岸域情報マップ』建設省国土地理院地理調査部
桑山龍雄 1980『菊名貝塚の研究』菊名貝塚研究
前田保夫 1977「大阪湾の自然史―潜函でとらえた海と森の変遷」『科学』47（9），岩波書店
前田保夫 1980「１万年前以降の瀬戸内海東部の海面変化」『海と空』(56) 海洋気象学会
前田保夫・山下勝年・松島義章・渡辺　誠 1983「愛知県先苅貝塚と縄文海進」『第四紀研究』22（3）日本第四紀学会
正岡栄治 1981「川崎市沖積低地の多摩川旧河底から出土した埋没樹について」『川崎市文化財調査集録』(17) 川崎市教育委員会
増田富士夫・宮原伐折羅・広津淳司・入月俊明・岩淵洋・吉川周作 2000「神戸沖海底コアから推定した完新世の大阪湾の海況変動」『地質学雑誌』106（7）日本地質学会
松田時彦・由井将雄・松島義章・今永　勇・平田大二・東郷正美・鹿島　薫・松原彰子・中井信之・中村俊夫・松岡数充 1988「伊勢原断層（神奈川県）の試錐による地下調査―過去約 7000 年間の堆積環境と元慶２年地震の変位」『東京大学地震研究所彙報』(63) 東京大学地震研究所
松島義章 1974「神奈川県の地質１」『神奈川県立博物館調査報告（自然科学）』(5) 神奈川県立博物館
松島義章 1980「貝類群集からみた古館山湾の変遷」『日本地質学会第 87 年学術大会講演要旨』日本地質学会
松島義章 1982「相模湾北岸、足柄平野における沖積層の 14-C 年代とそれに関連する問題」『第四紀研究』

20（4）日本第四紀学会
松島義章 1983「小規模なおぼれ谷に残されていた縄文海進の記録」『海洋科学』（15）海洋出版
松島義章 1984a「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集－特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷」『神奈川県博研報（自然科学）』（15）神奈川県立博物館
松島義章 1984b「完新世段丘からみた相模湾・駿河湾沿岸地域のネオテクトニクス」『第四紀研究』23（2）日本第四紀学会
松島義章 1990「沼サンゴ層形成時の海面をみつけるまで―海抜 27m の海面―」『地学研究』39（1）日本地学研究会
松島義章 1996「貝類群集による完新世の環境変遷―横浜南部金沢八景の平潟湾を例にして―」『関東平野』（4）関東平野研究会
松島義章 1999「完新世海成段丘からみた相模湾沿岸地域の地殻変動」『第四紀研究』，38（6）日本第四紀学会
松島義章 2003「小田原市羽根尾から産出した完新統下原層の貝化石について」『神奈川県自然誌資料』（24）神奈川県立生命の星・地球博物館
松島義章 2006a「かながわにみられる地震と活断層」『よみもの 神奈川自然誌 海・山・街のいのちをつなぐ』神奈川県自然保護協会
松島義章 2006b「縄文時代早期初頭の海岸線の推定」『千葉県館山市沖ノ島遺跡　第 2・3 次発掘調査概報』千葉大学文学部考古学研究室
松島義章 2006c『貝が語る縄文海進―南関東　＋2℃の世界』有隣新書（64）有隣堂
松島義章編 1987『川崎市内沖積層の総合研究』川崎市博物館資料収集委員会
松島義章・新井房夫　2003「小田原市羽根尾工業団地内で出現した完新統下原層の貝化石について」『神奈川県小田原市羽根尾貝塚　羽根尾工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書Ⅰ』玉川考古学研究所
松島義章・大嶋和雄 1974「縄文海進期における内湾の軟体動物群集」『第四紀研究』13（3）日本第四紀学会
松島義章・田口公則・川名ひろみ　2006「第 3 次杉田東漸寺貝塚発掘調査で出土の貝類について」『杉田東漸寺貝塚発掘調査報告書 2 －横浜市立杉田小学校校庭整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
松島義章・山口佳秀 1987「横浜市内沖積層産の貝化石と泥炭の 14-C 年代」『神奈川県自然誌資料』（8）神奈川県立博物館
増渕和夫・嶋田　滋・松田光太郎・杉原重夫　1998「相模川下流低地における完新世の古環境変遷」『日本第四紀学会講演要旨集』（28）日本第四紀学会
南知多町教育委員会 1976『南知多町文化財調査報告書　第 1 集　愛知県知多郡南知多町清水ノ上貝塚』愛知県南知多町
南知多町教育委員会 1980『南知多町文化財調査報告書　第 4 集　愛知県知多郡南知多町先苅貝塚』愛知県南知多町
岡本　勇 1969「神奈川県茅ヶ崎市西方貝塚」『日本考古学年報』（16）日本考古学会
岡本　勇 1974「西方貝塚の謎」『日本考古学年報』（23）日本考古学会
岡本　勇 1981「西方貝塚の謎」『茅ヶ崎市文化財資料集』（8）茅ヶ崎市
太田陽子・瀬戸則子 1968「相模湾沿岸の砂丘の組成・時代などに関する若干の知見」『横浜国立大学理科紀要Ⅱ』（14）横浜国立大学
太田陽子・松島義章・森脇　広 1982「日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題－ Atlas of the Holocene Sea-level Study in Japan を資料として－」『第四紀研究』21（1）日本第四紀学会
太田陽子・海津正倫・松島義章 1990「日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題－ 1980～1988 における研究の展望－」『第四紀研究』29（1）日本第四紀学会
大塚弥之助 1930「三浦半島北部の層序と神奈川県南部の最新地質時代に於ける海岸線の変化に就て」『地質学雑誌』37（441）日本地質学会
大塚弥之助 1931『第四紀』岩波講座（地質・古生物）岩波書店
大塚弥之助 1937「関東地方南部の地質構造〔横浜－藤沢間〕『東京大学地震研究所彙報』（15）
大矢雅彦・松原彰子・久保純子・小寺浩二　1991「相模湾北部沿岸地形分類図」『地図』，29（4）日本国際地図学会
関　俊彦 1978「大田区の遺跡（10）－呑川のほとりに住みし人たち－」『史誌』（10）東京都大田区
関本勝久・遠藤邦彦・清水恵助 2008「東京湾北西部域，東京国際空港（羽田）付近の沖積層と古環境」『日本大学文理学部自然科学研究所紀要』（43）日本大学文理学部自然科学研究所
酒詰仲男 1961『日本縄文石器時代食糧総説』土曜会
生物学御研究所編 1971『相模湾産貝類』丸善
玉川文化財研究所 2003『神奈川県小田原市羽根尾貝塚　羽根尾工業団地に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』玉川文化財研究所

鶴岡八幡宮境内発掘調査団編 1985『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書（鎌倉市国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査)』鎌倉市教育委員会
八幡一郎・甲野　勇・中谷治二郎　1925「神奈川県中郡旭村満田貝殻坂の石器時代遺跡」『人類学雑誌』40 (4) 日本人類学会
山崎直方・八幡一郎・中谷治二郎　1925「相模国旭村満田貝殻坂遺跡一層位的に時代別を示す石器時代遺跡一」『人類学雑誌』40 (5) 日本人類学会
横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団　2004『杉田東漸寺貝塚発掘調査報告書－横浜市立杉田小学校校庭整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』横浜市教育委員会・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
米倉伸之・鈴木郁夫・長谷川大洋・上杉　陽・遠藤邦彦・岡田篤正・河名俊男・石川佳代・福田正巳　1968「相模湾北岸の沖積段丘，とくに下原貝層のC－14年代について」『第四紀研究』7 (2) 日本第四紀学会

挿図説明

第1図．明治10年代の鎌倉旧市街地（建設省河川局海岸課，1993）
第2図．約6,000年前の海岸線が鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の石段の下約4mに位置していた
第3図．約6,000年前の古鎌倉湾の長谷は小さな入り江の干潟であった
第4図．縄文海進最盛期、柏尾川低地に存在した古大船湾（神奈川県立生命の星・地球博物館，2004）
第5図．湾奥に分布するマガキ主体の干潟群集の産状
第6図．湾奥～湾央部に分布する内湾砂底群集の産状
第7図．内湾～沿岸における貝類群集区分と生息環境（松島，1984）
第8図．海成沖積層における貝類群集区分の模式地：古大船湾と古鎌倉湾（神奈川県立生命の星・地球博物館，2004）
第9図．完新世の海面上昇と貝類群集の垂直変化（神奈川県立生命の星・地球博物館，2004）
第10図．完新世の海面変化と貝類群集の変遷（神奈川県立生命の星・地球博物館，2004）
第11図．横浜港を中心とした地域における約10,000年前以降の相対的海面変化曲線（松島，1996）
第12図．復元された東京湾西岸～相模湾沿岸の約6,000年前の海岸線。木更津上空からの鳥瞰図（松島，2006c）
第13図．横浜港を中心とした地域における約10,000～9,000年前の縄文時代草創期の海岸線
第14図．横浜港を中心とした地域における約7,500～7,000年前の縄文時代早期中頃の海岸線
第15図．横浜港を中心とした地域における約6,500～5,500年前の縄文時代早期末から前期の海岸線
第16図．縄文時代前期の下組東貝塚の発掘状況（出土したハマグリの^{14}C年代：6,300±150，6,360±70年前）
第17図．横浜港を中心とした地域における約4,500年前の縄文時代中期の海岸線
第18図．横浜市港北区綱島西の鶴見川左岸河床に露出する約4,600年前のマガキ主体の干潟群集
第19図．縄文時代中期の元町貝塚の発掘状況（出土したカガミガイの^{14}C年代：5,020±40，5,080±40年前）
第20図．横浜港を中心とした地域に約2,500年前の絶文晩期末から弥生時代の海岸線
第21図．横浜市立杉田小学校の校庭における古墳時代前期の杉田東漸寺貝塚の基盤となる自然貝層（海成沖積層から産出したシオフキの^{14}C年代：2,876±42年前）
第22図．横浜港を中心とした地域における約1,500年前の古墳時代の海岸線
第23図．横浜市立杉田小学校の校庭に位置する古墳時代前期の杉田東漸寺貝塚の貝層断面（出土したカガミガイの^{14}C年代：2,160±200，2,310±180年前）
第24図．横浜市港北区菊名の縄文時代前期の菊名貝塚と遺跡近くの自然貝層の調査地点
第25図．菊名貝塚遺跡出土の貝類（桑山，1980；小宮，1977）と遺跡近くの自然貝層から産出した貝類一覧
第26図．相模湾湾奥沿岸に形成された縄文時代黒浜期の3貝塚遺跡の位置図（玉川文化財研究所，2007）
第27図．平塚市万田貝殻坂貝塚の黒浜期の貝層(チョウセンハマグリとダンベイキサゴが大量に含まれる)
第28図．万田貝殻坂貝塚・羽根尾貝塚・西方貝塚から出土した主体貝類と構成貝類（玉川文化財研究所，2007）
第29図．小田原市羽根尾の縄文時代前期の羽根尾貝塚遺跡遠景羽根尾貝塚（玉川文化財研究所，2003）
第30図．羽根尾貝塚遺跡から出土した貝類（ダンベイキサゴ、ヤマトシジミ、サザエ、イシダタミ、バテイラなど）
第31図．古中村湾（約9,000～7,500年前から古中村潟（約5,500年前）かけての海岸線と内湾環境の変遷（神奈川県立生命の星・地球博物館，2004に加筆）
第32図．相模川低地の縄文海進最盛期（約6,500～5,500年前）の貝類群集の分布と沿岸に位置する縄文

時代の貝塚遺跡（●）の分布（松島 ,1984 に加筆）
第 33 図．愛知県知多半島内海低地の先苅貝塚遺跡の位置（前田ほか ,1983）
第 34 図．内海低地における知多新線沿いの地質断面（南知多町教育委員会 ,1980）
第 35 図．先苅貝塚遺跡から出土した遺物（南知多町教育委員会 ,1980）
第 36 図．縄文時代後期の林ノ峰貝塚遺跡の地層断面（前田ほか ,1983）
第 37 図．内海低地における完新世の相対的海面変動曲線（松島 ,1983）
第 38 図．房総半島南端の館山沖ノ島遺跡に位置（松島 ,2007）
第 39 図．館山沖ノ島遺跡の発掘（左上）と水没（右下）の状況
第 40 図．館山沖ノ島遺跡で海に向かって掘られたトレンチの断面（千葉大学文学部考古学研究室 ,2006）
第 41 図．館山沖ノ島遺跡から出土した遺物（千葉大学文学部考古学研究室 ,2006）
第 42 図．横浜港周辺における約 10,000 年前以降の相対的海面変化曲線へ投影した沖ノ島遺跡の位置とその後の隆起量（松島 ,2006b）
第 43 図．館山市香谷の奥の海抜 15 ～ 16m に分布する沼サンゴ礁（下）と海抜 27m 付近で発見された穿孔貝による巣穴の生痕化石（上）
第 44 図．2000 年に日本大学大学院生の石田さんにより発見された香集落裏の海食洞窟（海抜 27m 付近に多数の穿孔貝による巣穴の生痕化石とヤッコカンザシゴカイの化石が分布する）

神奈川県における有孔鍔付土器の様相

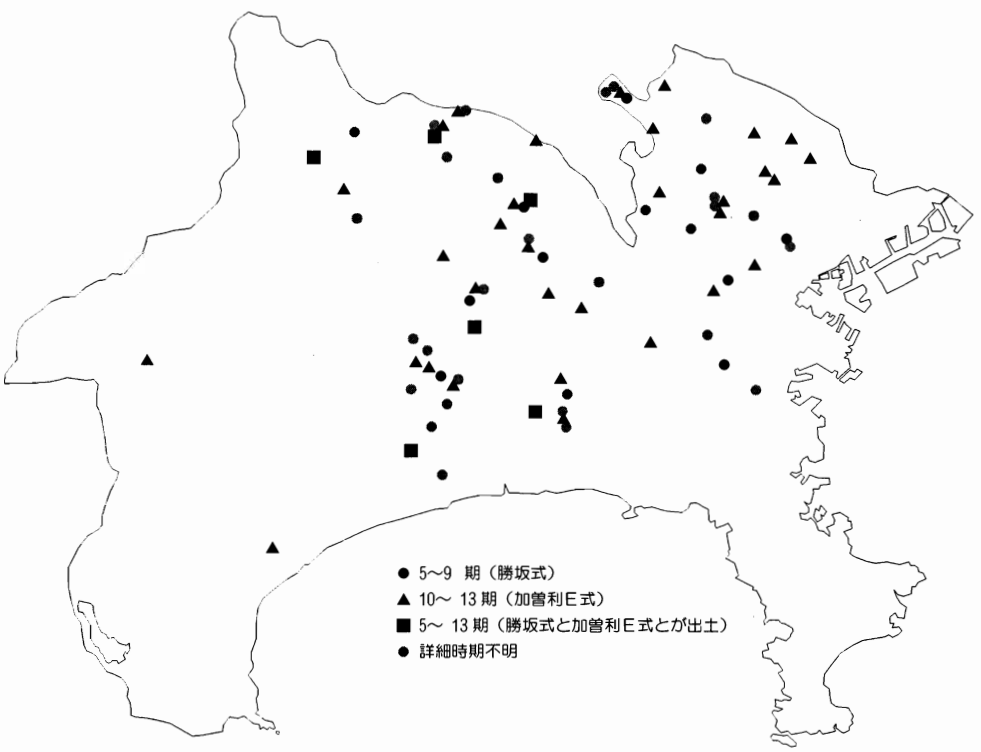
副島　蔵人

はじめに
1. 先行研究
2. 分布と出土状態
3. 編年
4. 内孔から外孔への変化と二孔一対の出現
5. 形態的特徴
6. 文様の特徴
おわりに

はじめに

有孔鍔付土器は、直立した平縁の口縁下に鍔状の隆帯が一周する土器で、鍔のすぐ上か又は鍔自体に径３～５ミリ程度の小孔が口縁部を一周するように複数穿たれる土器である。器形は樽形・壺形などを呈し、一般的な深鉢とは異なる形態であり、中部地方を中心に分布し、関東の土器型式でいうと五領ヶ台Ⅱ式期から加曽利Ｅ式期末の間に見られる。

容量はきわめて大きな樽状のものから小型の広口壺まで様々であるが、頸部に鍔状の隆帯を



第１図　神奈川県における有孔鍔付土器の分布

設け、その鍔あるいは鍔元の器面に等間隔で小孔を貫通させている点は多くのものに共通している。ほとんどの場合、口縁が鍔から垂直に立ち上がり、例外なく平縁の土器であり、その器形の多くが胴部に最大径をもつ。

有孔鍔付土器はきわめて限定的な土器であり、他の土器に比べて少数派の部類に属するが、器形・容量ともにバラエティーに富むものである。

従来、有孔鍔付土器の研究は、その特異な器形から、用途に関しての論考が中心となってきた。山内清男は、懸垂運搬用具説を唱えたが（山内 1960）、後に山内は太鼓説を、藤森栄一は種子壺説、武藤雄六は酒造器説を唱えることとなった。現在は主に太鼓説と酒造器説が対立し、長沢宏昌が酒造器説を主張し続けるだけで、活発な論争は行われていない。

この用途について長年論争してきているのにもかかわらず、未だ用途について明らかにすることができないのは、これまで出されてきた様々な説がどれも決定的な説得力を欠くか、または矛盾を発生させてしまっているかである。有孔鍔付土器はその特異な器形・文様や、それ自体の観察から、用途を明らかにしようとする研究が中心となっており、その他の視点からの研究は多くない。そこで本稿では関東地方でも出土量の多い神奈川県内の有孔鍔付土器の事例を土器編年にあてはめてゆき、その変遷から有孔鍔付土器の様相の一端を明らかにしてゆく。

1. 先行研究

有孔鍔付土器を詳細な土器編年にあてはめたものはない。武藤雄六は論考の中で「編年考察」として有孔鍔付土器の変遷を①発生期（前期末葉）、②確立期（中期初頭）、③盛行期（中期中葉～中期末葉初期）、④衰頽期（中期末葉～）の4段階に区分し、各時期の器形や文様、胎土や塗彩について述べ、さらに有孔鍔付土器の祖形を有孔土器に求めている（武藤 1970）。また、有孔鍔付土器は中期末になると注口土器に近い形態をとることから、注口土器へと発展することを示唆した。そして「有孔鍔付土器は発生期において、発生すべき重要な要素が含まれていたのである。すなわち①堅密な焼成、②一般的容器と煮沸以外の機能を具備した器形、③特殊性を強調したかに見られる施文と彩色・彩文の存在の三点である。これらの要素はさらに発展改良が加えられ、中期初頭の確立期において器形の完成をみ、中期中葉の盛行期への発展の過程をたどったものと推定される。」と述べている。富山・石川県の有孔鍔付土器については小島俊彰がまとめ、各有孔鍔付土器についての観察を行い土器型式に分類している（小島 1966）。長沢宏昌は「有孔鍔付土器の研究」（長沢 1980）で、有孔鍔付土器の形態や変遷、各土器圏への分布の研究が自ら主張する酒造器説との検証とともに行ない、そのなかで神奈川の事例は11例とし、それらを大まかに中期の前葉・中葉・後葉で分けている。また、西山太郎は「有孔鍔付土器の現状と課題」（西山 1986）で有孔鍔付土器の器形を編年順に5群に大別し、それぞれを特徴ごとに細別し、7系列に分けて器形から変遷を追っているものの、変遷を示すに留まり、型

式編年にはあてはめていない。近年、中山真治が多摩地域の有孔鍔付土器をまとめ、35 遺跡から約 150 個体を確認して型式分類し、主に勝坂式の事例についてまとめている（中山 2008）。

以上が有孔鍔付土器の編年について触れている論であり、神奈川県の有孔鍔付土器について触れているのは長沢と西山の論以外にはない。そこで、本稿では神奈川県における有孔鍔付土器の編年を確認し、その様相を明らかにする。有孔鍔付土器の定義は様々であるが、今回は縄文時代中期初頭以降のもので、孔と鍔を持つものに限定した。

2. 分布と出土状態

神奈川県内の遺跡からは 77 遺跡、約 340 例が確認できた。それらの遺跡の分布は主に相模川水系に属し、西から、酒匂川、花水川、引地川、境川、柏尾川、鶴見川の各水系からも確認されている。箱根山地と丹沢山塊、三浦半島からは事例が確認できず、津久井地域、西湘地域からも出土事例が少ないことは、発掘調査の絶対的な数の差が一因であるともいえる。

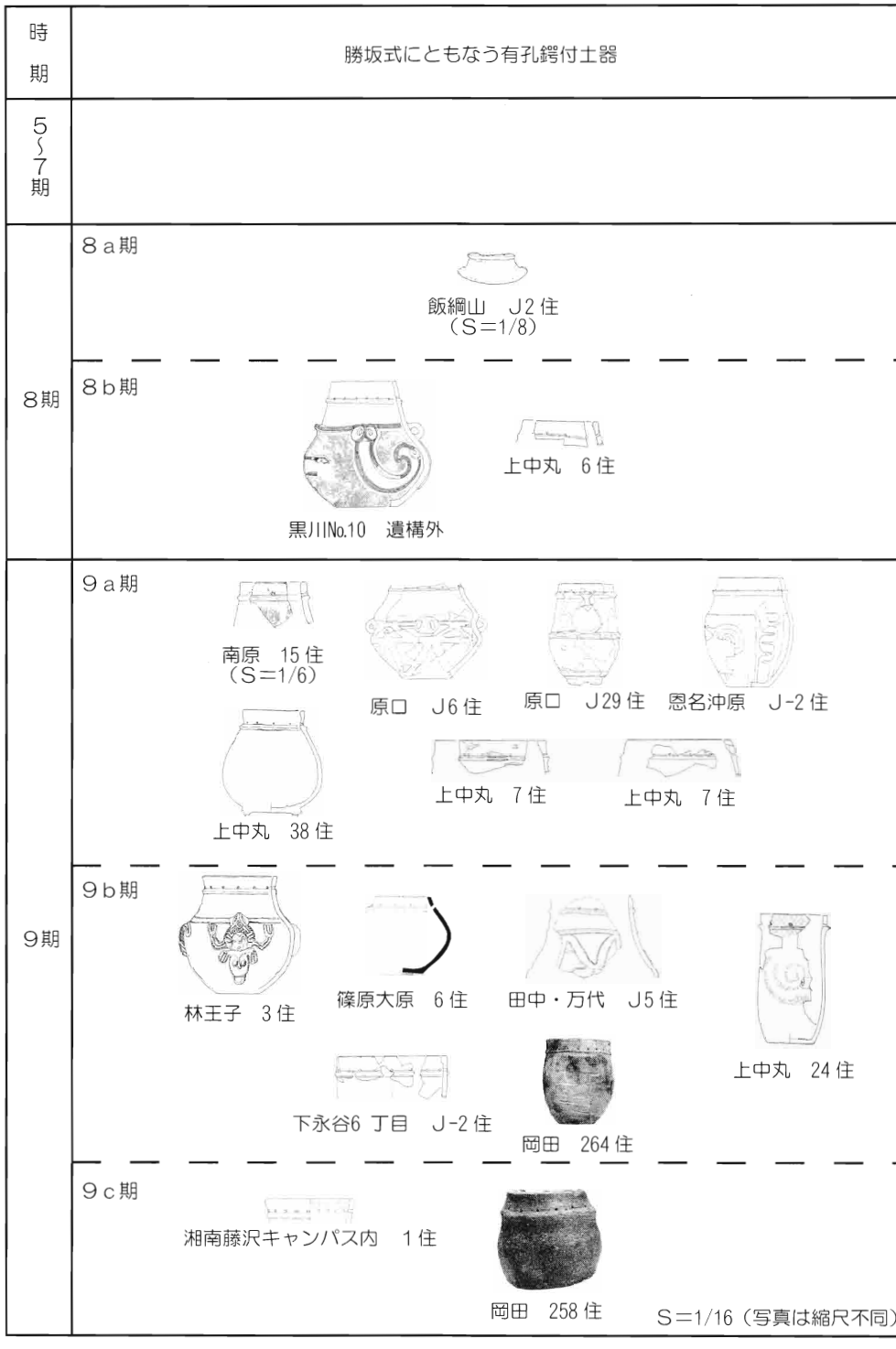
出土状態については有孔鍔付土器の用途に何らかの関連がうかがえる状況を示す、住居床面、ピットからの出土は少ない。野川西耕地遺跡 4 号住居址例、篠原大原北遺跡 6 号住居址例、岡田遺跡 106 号住居址例、上中丸遺跡 38 号住居址例、林王子遺跡 3 号住居址例の 5 例が挙げられるのみである。その中で特異な出土状態を示すものは、他の 2 個体の土器とともに埋甕として検出された岡田遺跡の例であるが、詳細は不明である。

3. 編年

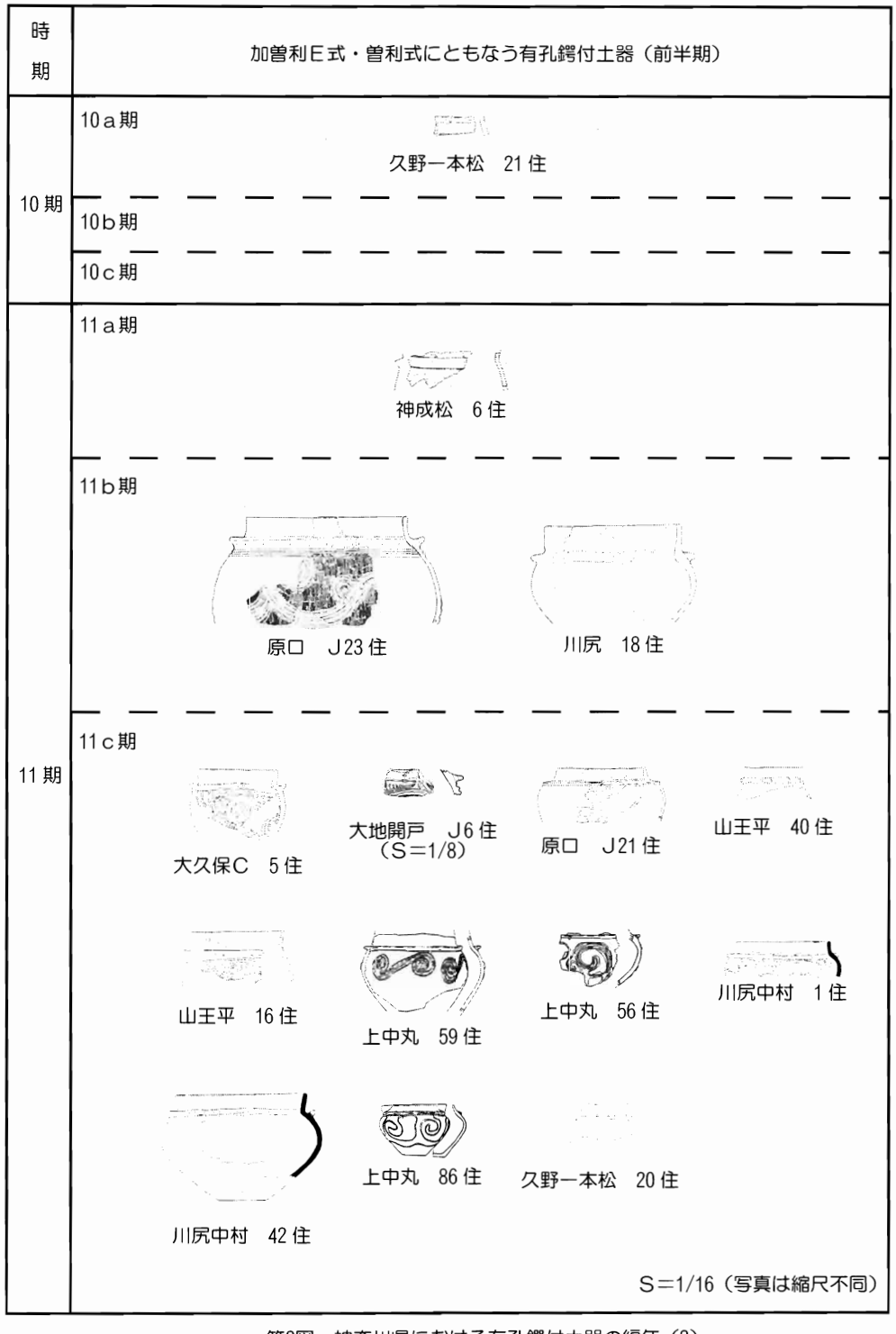
前述したように、中山が多摩地域の有孔鍔付土器を新地平編年（黒尾ほか 1995）に組み込み、その様相を述べているため、本項目でも共伴遺物・一括資料または施文方法をもとに新地平編年にあてはめた。

その結果、時期を特定できる資料は集成した約 340 例の中でも 1 ／ 3 程であり、その中でも図示するに耐えうる、または情報を抽出できる資料は 80 例未満と非常に少ない。

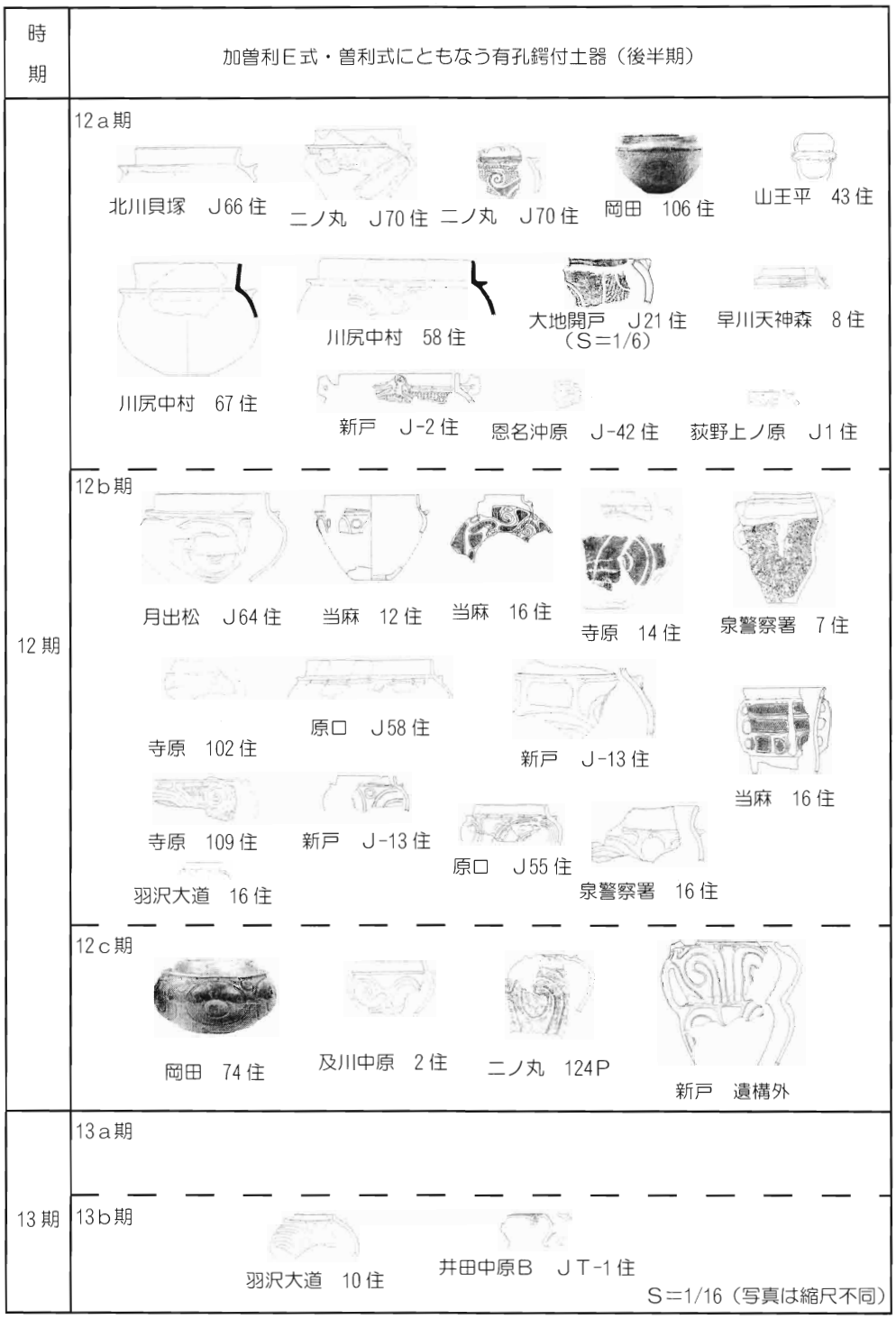
神奈川県内の有孔鍔付土器の初現は 8a 期（藤内Ⅱ式並行期）であることが確認できた。中山がまとめた事例では、多摩川地域では 5c ～ 6b 期（狢沢式中葉～新道式中葉並行期）に最古の例があるとしている。また、隆盛するのは 7 期（藤内Ⅰ式並行期）からであり、神奈川県には、その多摩川流域における隆盛期から南下してきたのではないかと考えられる。神奈川県における有孔鍔付土器の隆盛は 9 期（井戸尻式並行期）からであり、10 期（加曽利 E1 式～ E2 式前半並行期）と 11 期前半（加曽利 E2 式後半並行期）の事例は少ないものの、12 期中葉（加曽利 E3 式末葉並行期）まで続く。平塚市原口遺跡 J23 号住居址出土例（119）は、共伴遺物から 11 b 期（加曽利 E2 式末～ E3 式初頭並行期）に設定したが、地文が撚糸文であることと、隆帯の施



第2図　神奈川県における有孔鍔付土器の編年（1）



第3図　神奈川県における有孔鍔付土器の編年（2）



第4図　神奈川県における有孔鍔付土器の編年（3）

文方法から10 a期（加曽利E 1式並行期）に入れるほうが妥当かもしれない。また、平塚市上ノ入B遺跡16号住居址出土例も共伴遺物から11期としてもよいが、施文から見て9期のものであるが非常に高いため時期は不明とした。このことから、有孔鍔付土器が伝世する可能性も考えられる。

中山が論考で示した多摩川流域の事例では、加曽利E式以降衰退していくようであるが、神奈川県内においては、加曽利E式期にその隆盛の頂点があると見て取れる。また多摩地域有孔鍔付土器消失の時期について、中山は11期（加曽利E2式後半～E3式前半並行期）であるとしているが、神奈川県内では加曽利E式後半の12c期にまでは確実に存在し13期（加曽利E4式後半並行期）には羽沢大道遺跡10号住居址出土例のように、有孔鍔付土器と考えられるものが存在する。また、同時期には井田中原遺跡B地点JT-1号住居址出土例のように、有孔鍔付注口土器が存在することから、注口土器へと変容し、さらに、加曽利E式期に入ると有孔鍔付土器に似た器形の壺等が多く存在することから、浅鉢や壺にも変化していったと考えられる。

4. 内孔から外孔への変化と二孔一対の出現

勝坂式期に出現した有孔鍔付土器は鍔の上に、器内面に貫通する孔を穿ち、加曽利E式期になると鍔自体に貫通するように孔が穿たれるようになる。この器内面まで貫通する孔を"内孔"、鍔自体に穿たれる孔を"外孔"と呼ぶことにする。この"外孔"が確認できる時期としては11b期に入ってからである。原口遺跡J23号住居址出土例が10期まで遡るとするならば、加曽利E式期の初頭から変化が見られることになる。また、内孔のものは11c期の久野一本松遺跡20号住居址出土例を最後に確認できず、加曽利E式期に属する内孔のものは久野一本松遺跡出土の2例と神成松遺跡出土の1例を除いて存在しない。このことから、"外孔のものは加曽利E式期"であると断言でき、内孔のものについても勝坂式期のものであると断定してほぼ差支えないと考える。

一般的に有孔鍔付土器の孔は等間隔に穿たれるが、孔が二孔一対で穿たれるものが加曽利E式期に見られ、12例が確認できた。時期は11c期が2例、12a期が3例、12b期が2例、12a～b期が1例、時期不明が4例であり、寺原遺跡の1例を除いて全てが外孔であった。このことから、二孔一対の孔を有する有孔鍔付土器は神奈川県内では11期末に出現し、13期までに消滅することがわかる。また、外孔のものに施されるのが一般的であったとも考えられる。さらに、三孔以上が対になって穿たれる例はなく、"一対"であることが重要であった可能性が非常に高い。

5. 形態的特徴

有孔鍔付土器が多く出土する中部・甲信越における勝坂式期の有孔鍔付土器の器形はバラエティーに富み、樽状のものが主流となるが、下膨れの壺状、円筒形、さらには竹の節を表したようなものまで様々存在し、例を挙げればきりがない。しかし神奈川県内においては、8期に見られる錨形の器形を呈したものや、9期に属する原口遺跡J6号住居址出土例は最大径にくびれを持つものもあり、特異な器形を呈すものもあるが、それら以外は、樽形ないし、壺形を呈しており、特徴的なものは見られない。

一方、中期後半の加曽利E式期（10期）に入ると、南関東では①胴中辺部に最大径を持つ広口無頸壺形、②肩部（鍔直下）に最大径を持つ広口無頸壺、③深鉢形、④瓢簞形、の4種類の器形が確認できる。③に関しては、泉水警察署遺跡7号住居址出土例と当麻遺跡16号住居址出土例のみであり、一般的な深鉢形ではあるものの、有孔鍔付土器という範疇では特異な器形となる。④は新戸遺跡出土事例が当てはまり、二の丸遺跡124号ピット出土事例もおそらくこの形となるであろう。加曽利E式の終わりにこの瓢簞形の深鉢や注口土器、有孔鍔付注口土器が発見されていることから、時期的な特徴といえるだろう。①②はともに神奈川県内においてよく見られる羽釜形の器形であり、その量の多さから、定型化した形と考えることもできる。

6. 文様の特徴

勝坂式に伴う有孔鍔付土器の文様の分類については大まかに①無文のもの、②地文のみのもの、③型式的特徴をもつもの、④人体文及び抽象文、⑤渦巻き文、⑥区画文、⑦朱、塗彩による文様が描かれるもの、の7種類が確認できる。

①無文と⑦朱、塗彩による文様

事例：1、42、48、67、99、112、114、139、144、145、159、166、173、174、211、236、237、238、244、247、248、249、250、302、332

派手な装飾で知られる有孔鍔付土器であるが、このように無文の土器も珍しくはない。勝坂・加曽利E式を通して見られる。無文の事例の中には上中丸遺跡出土例（250）のように朱により文様が描かれている例がある。このことから、無文の事例の中には朱により文様が描かれており、洗浄の段階で洗い落としてしまっているものもあるはずである。211は環状把手が付くものの、無文である。

県内で発見されている事例の多くが鍔部から肩部にかけての破片資料であり、それらから文様の有無自体を判断するのも難しい。こうした資料が多いことから、この①の事例はもっと多く存在するといえる。

②地文のみのもの

事例：6、91、97、235

中山がまとめた事例の中にも地文のみのものが数点存在する。勝坂式期に伴う小形もしくは円筒形のもので、縄文の地文のみである。神奈川県内の事例も縄文のみであるが、多摩地域の事例に比べると91以外は時期的には下る。

③型式的特徴を持つものと④人体文が施されるもの

事例：1、14、58、70、74、122、125、128、149、158、162、167、212、232、253、254、279、317

器形の特徴でも挙げたように、瓢簞形をする1、212、232は加曽利E式末の器形であり、この時期には70、212のように、二本一組の隆帯が渦巻き状になりきらない文様が施される。文様からは14の眼鏡状把手と隆帯上の連続刻目文が勝坂2式（7・8期）、125、149のように幅が広くて低い隆帯は勝坂3式（9期）の特徴を示している。162のように地文の磨り消しが行われるようになるのは12期からである。また、58に見られる撚糸文は勝坂式期末から加曽利E1式期にかけて（9～10ｃ期）に多く見られ、連弧文盛行期（11期）にも見られる文様である。

人体装飾が多用される勝坂式期において、神奈川県内でも事例が見られる。また、2例とも身体装飾の施文方法に時期的な要素を残しており、122は腕に残る矢羽状の刻目文、317には髪型に残る交互刺突文等が井戸尻式期（9期）の特徴といえる。

⑤渦巻き文と⑥区画文

事例：5、46、58、59、60、61、68、69、71、75、76、77、81、109、115、113、126、128、129、130、147、152、156、157、158、162、163、171、172、175、176、177、181、207、210、214、215、216、224、229、230、242、250、251、252、253、254、268、272、303、304、310、311、318、322、324、331、335

以上のようにかなりの例数を上げることができる。250、251を除き全て加曽利E式（10～13期）の範疇に収まる。圧倒的にこの渦巻き文が多く、その起源はキャリパー形深鉢の口縁部文様帯からというよりは、250のように、もともとは朱書きの文様であった可能性も挙げられる。大半の資料の時期は不明であるが、隆帯で表現するものに関しては、全般的に早い時期のものが多いのではないだろうか。特に128のように、地文が撚糸文で、その上から半裁竹管文で施文された隆帯を持つものは、加曽利E1式のキャリパー形土器に見られる施文方法である。

時期的な特徴と照らし合わせると、11期には深鉢に施されていた隆帯の懸垂文が沈線へと変わる。このことが有孔鍔付土器にも影響を与えていると考えられ、時期が下るに従い、隆帯文が少なくなる。また、12期になると磨消文が出現する。これも有孔鍔付土器に影響を与えていると考えられる。区画文は区画内に文様が施されているが、この区画内文様が充填文であるのか、区画外を磨り消しているのかは不明である。

以上のように文様について検討してきたが、鍵となる文様が"円形刺突文"（列点文）であると考えられる。加曽利E式の有孔鍔付土器に顕著に見られ、一般的な深鉢にはほとんど見られず、浅鉢や壺形の土器に若干見られる程度である。この円形刺突文が施される有孔鍔付土器は遺構外の出土が多く、時期を特定できる資料は少ないが、11 c期～12 b期にかけて盛行するものではないかと考えられる。

また、土器の内面に貫通する孔（内孔）が加曽利E式期を境に、鍔に穿たれるようになる（外孔）。具体的には11期終わりには完全に外孔に移行する。さらに、二孔で一対になるものも加曽利E式期に入ってからである。

おわりに

南関東の出土の有孔鍔付土器の事例を集成し、検討してみた。約340例の資料を集めることができたが、小破片が多く、器形や文様を判断できる資料は多くない。また、鍔のみで、孔が穿たれていないものや、報告書に図示されていない資料は除外したため、そういったものを含めれば、400例程度になると考えられる。

今回、神奈川県の有孔鍔付土器を集成した結果、県内の有孔鍔付土器を論じる上で非常に重要な点は、①羽釜形（広口無頸壺形）、②渦巻き文、③外孔、④円形刺突文（列点文）の4点である。特に①②が揃う段階は11b期（遡るとすれば10期）で12期の終わりまで確実に見られる。このことから、①②が詳細な時期を特定する材料にはならないが、①②においては県内の遺跡において、この条件が定形化されていたことを示している。さらに、このことは集落間において有孔鍔付土器の用途を含めたあり方が決まっていたことを示しているのではないだろうか。③については前述したように、11b期から加曽利E式が終わるまで見られ、詳細な時期を特定することはできないが、④については11c期から12a期に見られ、ある程度時期を特定することのできる材料であることが判明した。

さらに今回は用途については触れていないが、有孔鍔付土器がどのように使われていたかを考える上で重要な要素も発見できた。いわゆる縄文時代中期、特に加曽利E式期（10～13期）には深鉢以外の器形は浅鉢と有孔鍔付土器を含む壺しか存在せず、④の円形刺突文が施文されるのも、壺と有孔鍔付土器が大半である点である。このことを考慮すれば、有孔鍔付土器と壺形土器は、ほぼ同等の使い方がなされていたことが想定される。また、器内面を研磨している事例もあることから、有孔鍔付土器の用途を液体と関連付ける傍証となる可能性は高い。そういった視点から、今後は他地域の事例も集成し、最終的には機能を検討して行きたい。

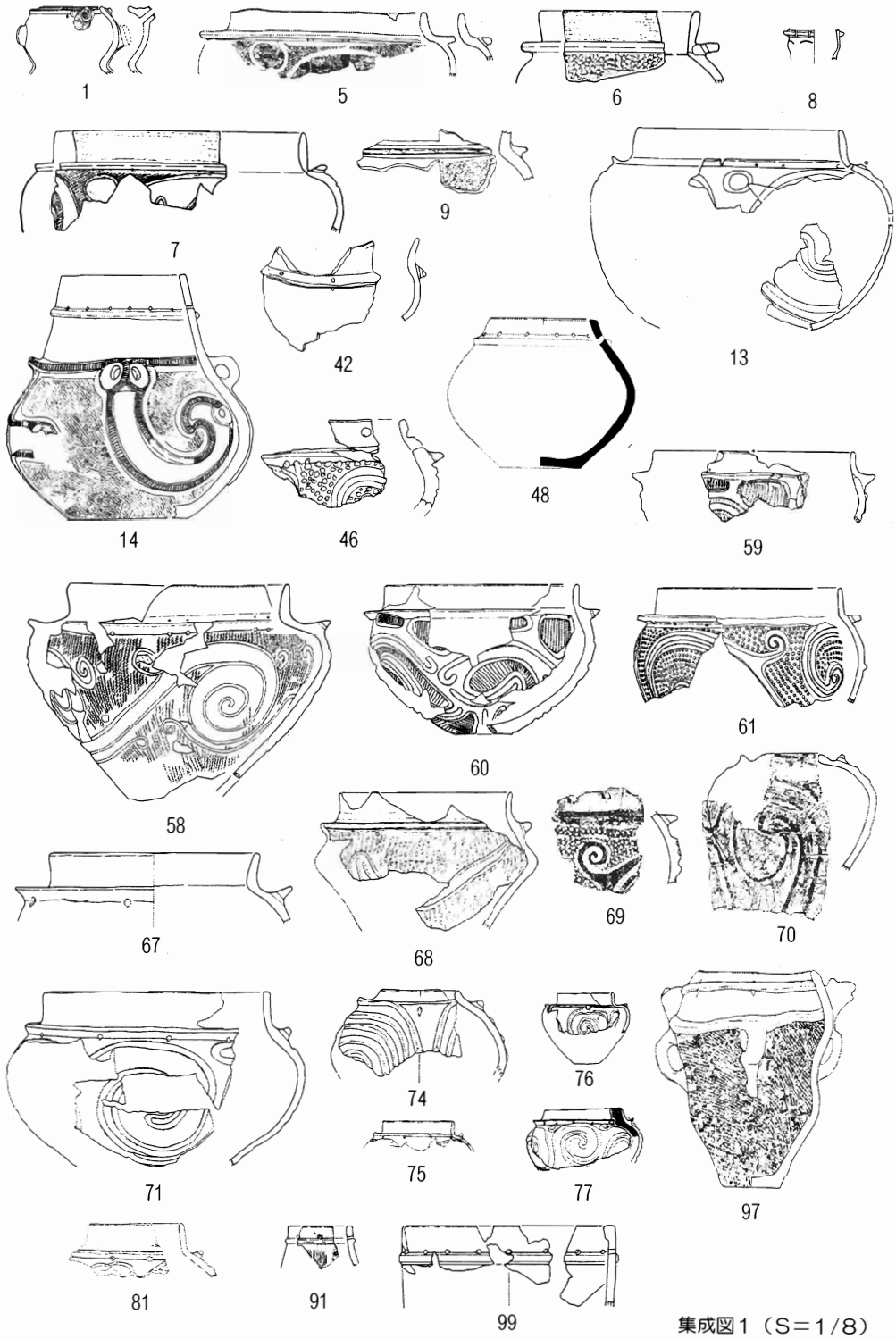
参考文献

厚木市教育委員会　2005 『厚木市埋蔵文化財調査報告書第５集　荻野上ノ原遺跡第２地点』
厚木市秘書部市史編さん室　1985.3 『厚木市史　地形地質編　原始編』
吾妻考古学研究所　2007.5 『横浜市港北区　篠原大原北遺跡』
泉水警察建設用地内遺跡発掘調査団　1992.10 『泉水警察遺跡　（泉水蛍雪建設用地内遺跡発掘調査報告書）』
伊勢原市№.160 遺跡発掘調査団　2000.3 『伊勢原市№.160 遺跡発掘調査報告書』
井田中原遺跡Ｂ地点発掘調査団　2003 『井田中原遺跡Ｂ地点』
市ノ沢団地遺跡調査団　1997.7 『市ノ沢団地遺跡　県営市ノ沢団地建設に伴う発掘調査報告書』
御伊勢森中世遺跡発掘調査委員会　1979.3 『御伊勢森遺跡（傳上杉定正館址）の調査』 産業能率大学
岡田遺跡発掘調査団　1993.3 『神奈川県高座郡寒川町　岡田遺跡範囲確認調査報告書』
小田原市教育委員会　2002.3 『小田原市文化財調査報告書第 101 集　久野諏訪ノ原遺跡群Ⅰ　久野一本松・久野天野藪・久野坂下窪遺跡　―市道 0036 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査―』
恩名沖原遺跡発掘調査団　2000.2 『恩名沖原遺跡発掘調査報告書』
粕上原土地区画整理事業区画内遺跡埋蔵文化財発掘調査団　1999.3 『粕上原遺跡発掘調査報告書』
神奈川県教育委員会　1977.3 『神奈川県埋蔵文化財調査報告 12　当麻遺跡　上依知遺跡　一般国道 129 号線改良工事にともなう調査』
神奈川県教育委員会　1977.3 『神奈川県埋蔵文化財調査報告 13　尾崎遺跡　酒匂川総合開発事業にともなう調査』
神奈川県教育委員会　2002 「中原遺跡－国道 246 号線バイパス建設に伴う調査－」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』48
神奈川県埋蔵文化財センター　1983.3 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告２　早川天神森遺跡　都市計画道路早川本蓼川線建設にともなう調査』
神奈川県埋蔵文化財センター　1988.9 『神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 17　新戸遺跡　県立新磯高校建設にともなう調査』
神奈川県立埋蔵文化財センター　1992.3 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 23　川尻遺跡　県道相模原津久井川尻バイパス建設に伴う調査』
神奈川県立埋蔵文化財センター　1992.12 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 26　三ヶ木遺跡　県立津久井高等学校部室改築にともなう調査』
かながわ考古学財団　1995.12 『かながわ考古学財団調査報告５　青野原バイパス関連遺跡　梶ヶ原遺跡・大地開戸遺跡・明日庭遺跡
長谷原遺跡・大地遺跡　国道 413 号線　青野原バイパス建設に伴う調査』
かながわ考古学財団　1996.3 『かながわ考古学財団調査報告 12　長津田遺跡群Ⅱ　住撰遺跡　長津田地区特定土地区画整理事業に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　1998.3 『かながわ考古学財団 41　宮ヶ瀬遺跡群ＸＶ　北原(№.10･11 北)遺跡　宮ヶ瀬ダム建設に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　1999.3 『かながわ考古学財団調査報告 60　臼久保遺跡　芹沢配水池建設に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2000.2 『かながわ考古学財団調査報告 69　川尻遺跡Ⅱ　谷ヶ原浄水場内事業に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2000.3 『かながわ考古学財団調査報告 66　後山田南遺跡　横浜新道川上インターチェンジ改築工事に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2000.3 『かながわ考古学財団調査報告 79　原東遺跡　県道 510 号（長竹川尻線）新小倉橋建設事業に伴う調査報告１』
かながわ考古学財団　2000.3 『かながわ考古学財団調査報告 67　坪ノ内・貝ヶ窪遺跡（№.18・19・43）笠窪・谷戸遺跡（№.20・42）　第一東海自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調査報告　―伊勢原市内―』
かながわ考古学財団　2001.1 『かながわ考古学財団調査報告 103　田中・万代遺跡　伊勢原郵便局庁舎増築その他工事に伴う調査報告』
かながわ考古学財団　2001.9 『かながわ考古学財団 121　飯綱上遺跡　自衛隊朝霞駐屯地座間分屯地内厚生施設建設に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2002.3 『かながわ考古学財団調査報告 129　南原遺跡　県営南原団地建設に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2002.3 『かながわ考古学財団調査報告 133　川尻中村遺跡　県道 510 号（長竹川尻線）新小倉橋建設事業に伴う調査報告２』
かながわ考古学財団　2002.3 『かながわ考古学財団調査報告 134　原口遺跡Ⅲ　農業総合研究所建設に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2004.3 『かながわ考古学財団調査報告 165　池端・椿山遺跡　緊急地方道路整備事

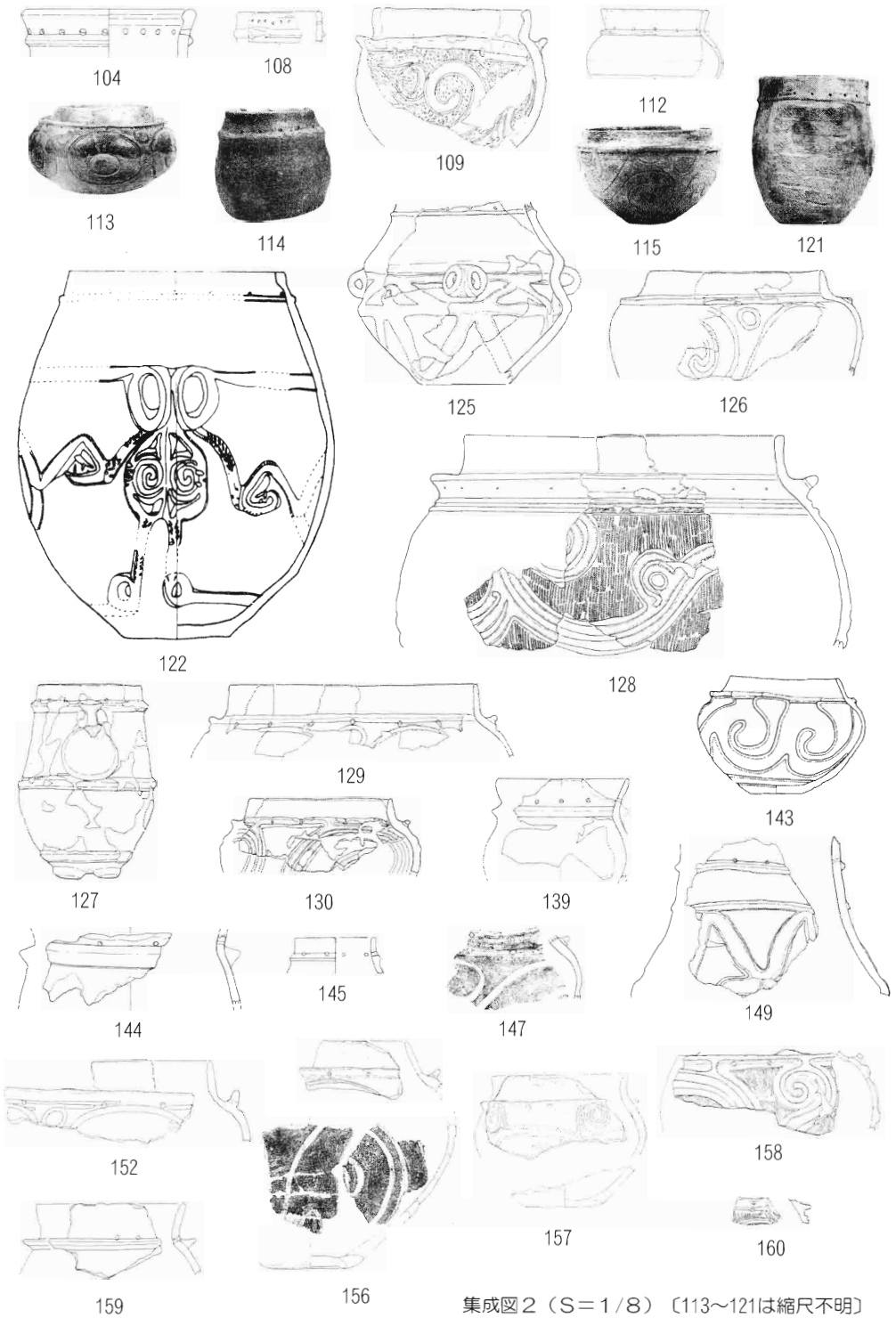
業（主要地方道路横浜・伊勢原線）に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2004.9『かながわ考古学財団調査報告175　篠原大原遺跡　篠原団地（先工区）建て替え事業に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2006.3『かながわ考古学財団調査報告195　大久保C遺跡　大久保D遺跡　県立茅ヶ崎里山公園整備工事に伴う発掘調査』
かながわ考古学財団　2008.3『かながわ考古学財団調査報告222　下北原遺跡Ⅱ　伊勢原調整池築造工事に伴う発掘調査』
神成松遺跡発掘調査団　1995.3『神成松遺跡発掘調査報告書』産能大学
川崎市麻生区黒川高区配水地用地内遺跡発掘調査団　川崎市水道局　1985『神奈川県川崎市　黒川丸山遺跡発掘調査報告』
川崎市教育委員会　2009『野川西耕地遺跡第4地点発掘調査報告書』
黒尾和久　1995「中期集落遺跡の基礎的検討（Ⅰ）―時間軸の設定とその考え方について―」『論集　宇津木台』第1集　宇津木台地区考古学研究会
黒尾和久・小林謙一・中山真治　1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」シンポジウム『縄文中期集落の新地平』発表要旨・資料集
慶應義塾藤沢校地内埋蔵文化財調査室　1992『湘南藤沢キャンパス内遺跡』
県営岡田団地内遺跡発掘調査団　1993.3『神奈川県高座郡寒川町岡田遺跡発掘調査報告書』
県営羽沢団地内遺跡発掘調査団　1993.3『羽沢大道遺跡発掘調査報告書』
国道412号線遺跡発掘調査団　1997.3『及川中原遺跡　神奈川県厚木市一般国道412号本厚木
上荻野バイパス事業に伴う発掘調査報告書（Ⅵ）』
国道412号線遺跡発掘調査団　1997.3『及川天台遺跡　神奈川県厚木市一般国道412号本厚木
上荻野バイパス事業に伴う発掘調査報告書（Ⅶ）』
小島俊彦　1966.1「富山・石川両県地方の鍔付有孔土器」『信濃』18巻1号　信濃史学会
相模原市相原地区遺跡調査団　相模原市相原4丁目土地区画整理組合　2002『相原八幡前遺跡』
相模原市遺跡調査会　2000.3『相模原市遺跡調査会調査報告2　勝坂遺跡54次調査　市道磯部47号改良工事に伴う調査報告書』
相模原市遺跡調査会　2000.3『相模原市遺跡調査会調査報告3　上溝7丁目遺跡
相模原市大島上ノ原遺跡発掘調査団　1996『大島上ノ原遺跡』
相模原市教育委員会　2009.3『国指定史跡　勝坂遺跡D区－勝坂遺跡保存整備に伴う発掘調査報告書』相模原市埋蔵文化財調査報告36
相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団　1993『勝坂遺跡第45次調査　相模原市市道磯部上出口改良事業に伴う埋蔵文化財調査』（仮称）市営田中第二住宅建替事業に伴う№.272遺跡の調査報告書』
相模原市当麻・下溝遺跡群調査会　1992.12『下中丸遺跡』
相模原市当麻・下溝遺跡群調査会　1994.12『上中丸遺跡』
相模原市橋本遺跡調査会　1986『橋本遺跡Ⅶ　一般国道16号改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
潮見台遺跡調査会　1971『潮見台　川崎市潮見台遺跡発掘調査報告書』
下原遺跡調査団　1992.9『神奈川県相模原市下原遺跡』相模原市当麻・下溝遺跡群調査会
下原宿遺跡発掘調査団　1993.5『下原宿遺跡発掘調査報告書』下原宿遺跡発掘調査団
住宅・都市整備公団　黒川地区遺跡調査団　1992.3『川崎市麻生区　黒川地区遺跡群報告書Ⅵ』
住宅・都市整備公団　黒川地区遺跡調査団　1997.8『川崎市麻生区　黒川地区遺跡群報告書Ⅷ』
玉川文化財研究所　2007.4『下永谷6丁目遺跡発掘調査報告書』
津久井町教育委員会　1997.3『寺原遺跡発掘調査報告書』
長沢宏昌　1980「有孔鍔付土器の研究」『長野県考古学会誌』35号　長野県考古学会
中山真治　2008「多摩川流域の有孔鍔付土器について―多摩地域とその周辺遺跡を中心に―」『東京考古』26　東京考古談話会
西山太郎　1986「有孔鍔付土器研究の現状と課題」『研究紀要』10号　印旛郡市文化財センター
日本道路公団　横浜市ふるさと歴史財団　1997.1『畳屋の上遺跡　西谷戸の上遺跡　北川貝塚南遺跡―第三京浜道路（改築）新港北インターチェンジ（仮称）埋蔵文化財発掘調査報告書―』
日本窯業史研究所　1991.11『松風台遺跡』
日本窯業史研究所　1998『赤田地区遺跡群』
沼目・坂戸（Ⅱ）遺跡発掘調査団　1999.3『沼目・坂戸遺跡第Ⅱ地点　発掘調査報告書』
平塚市　玉川文化財研究所　2007.1『万田貝殻坂貝塚（万田遺跡第9地点）発掘調査報告書』
平塚市博物館　1978.3『平塚市博物館資料№.13　平塚市発掘調査の回顧と展望Ⅱ』
淵野辺山王平遺跡発掘調査団　1998.9『山王平遺跡発掘調査報告書』
藤沢市№.322遺跡発掘調査団　1999.3『藤沢市№.322遺跡発掘調査報告書』
細山遺跡発掘調査断　2003.11『細山向原遺跡ｉ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
増田精一ほか　1977『多摩－多摩線沿線地区埋蔵文化財発掘調査報告』多摩線沿線地区埋蔵文化財発掘

調査委員会
溝野日影坂上遺跡発掘調査団　1998.3 『溝野日影坂上遺跡発掘調査報告書』
武藤雄六　1970 「有孔鍔付土器の再検討　―八ヶ岳南麓地方の基礎資料―」
信濃』第 22 巻 7 号　信濃史学会
大和市教育委員会　1983 『大和市文化財調査報告書第 12 集　一般国道 246 号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅰ』
山内清男　1960 『日本先史土器図譜』先史考古学会
横浜市教育委員会　横浜市ふるさと歴史財団　2003 『港北ニュータウン地区内埋蔵文化財調査報告 34　二ノ丸遺跡』
横浜市教育委員会　横浜市ふるさと歴史財団　2005 『港北ニュータウン地区内埋蔵文化財調査報告 37　月出松遺跡　月出松南遺跡』

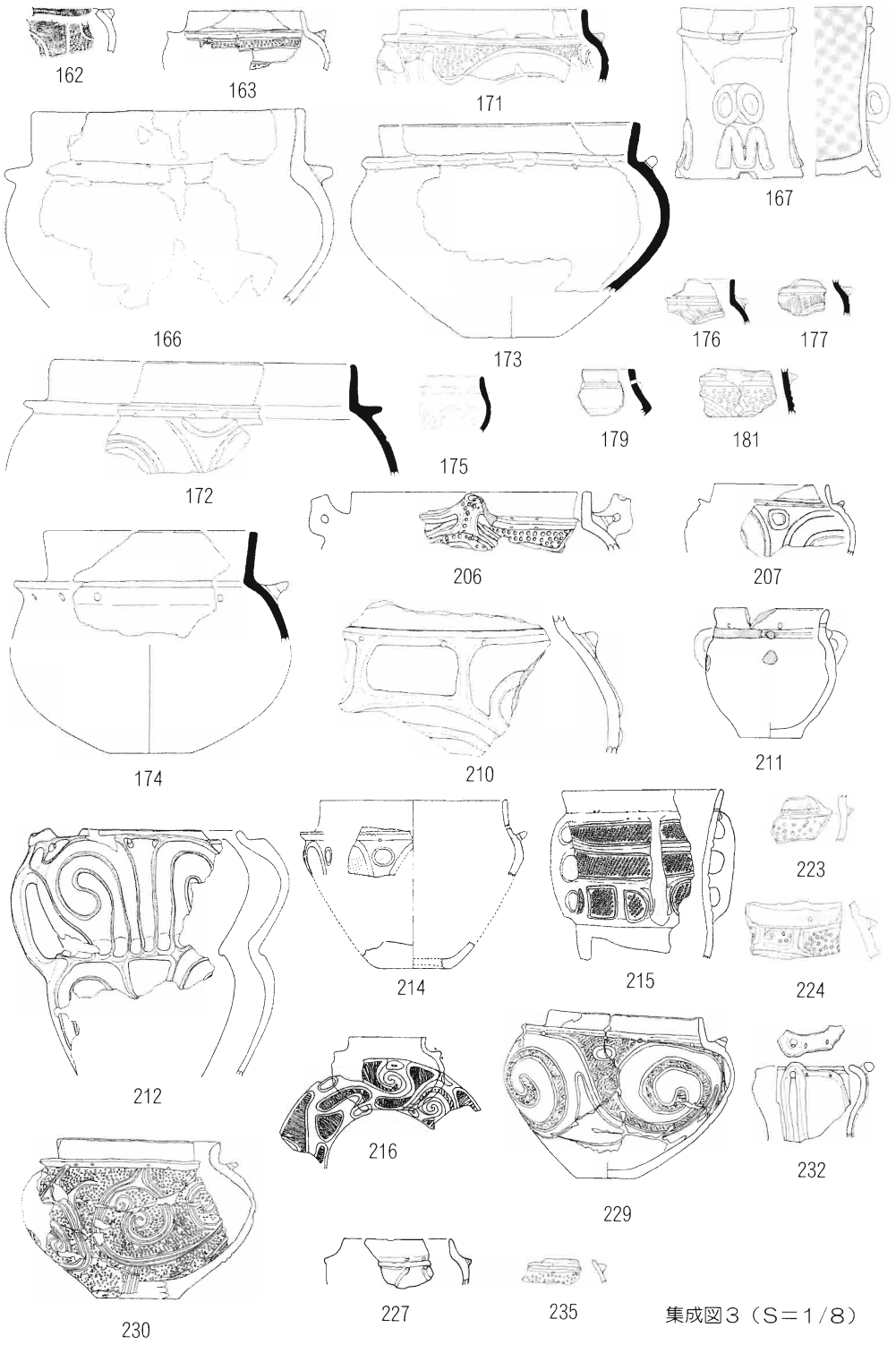
横浜市教育委員会　横浜市ふるさと歴史財団　2007 『港北ニュータウン地区内埋蔵文化財調査報告 39　北川貝塚』
横浜市道路局　横浜市ふるさと歴史財団　1996 『雑色杉本遺跡発掘調査報告　都市計画道路環状 2 号線街路整備事業（港南地区）に伴う』
横浜市埋蔵文化財調査委員会　1970 『昭和 45 年度　港北ニュータウン地内　文化財調査報告書（Ⅰ）　―早淵側南岸地域における埋蔵文化財の予備調査―』
横浜市ふるさと歴史財団　横浜市教育委員会　2001 『港北ニュータウン地内埋蔵文化財調査報告 29　前高山遺跡　前高山北遺跡』
横浜市ふるさと歴史財団　横浜市教育委員会　2004 『港北ニュータウン地内埋蔵文化財調査報告 35　高山遺跡』
吉田寿　1996 『勝坂遺跡第 47 次調査』 相模原市市道磯部 30 号ほか 1 道路改良事業地内遺跡調査団


1
5
6
8
7
9
13
42
14
46
48
59
58
60
61
67
68
69
70
71
74
76
75
77
97
81
91
99

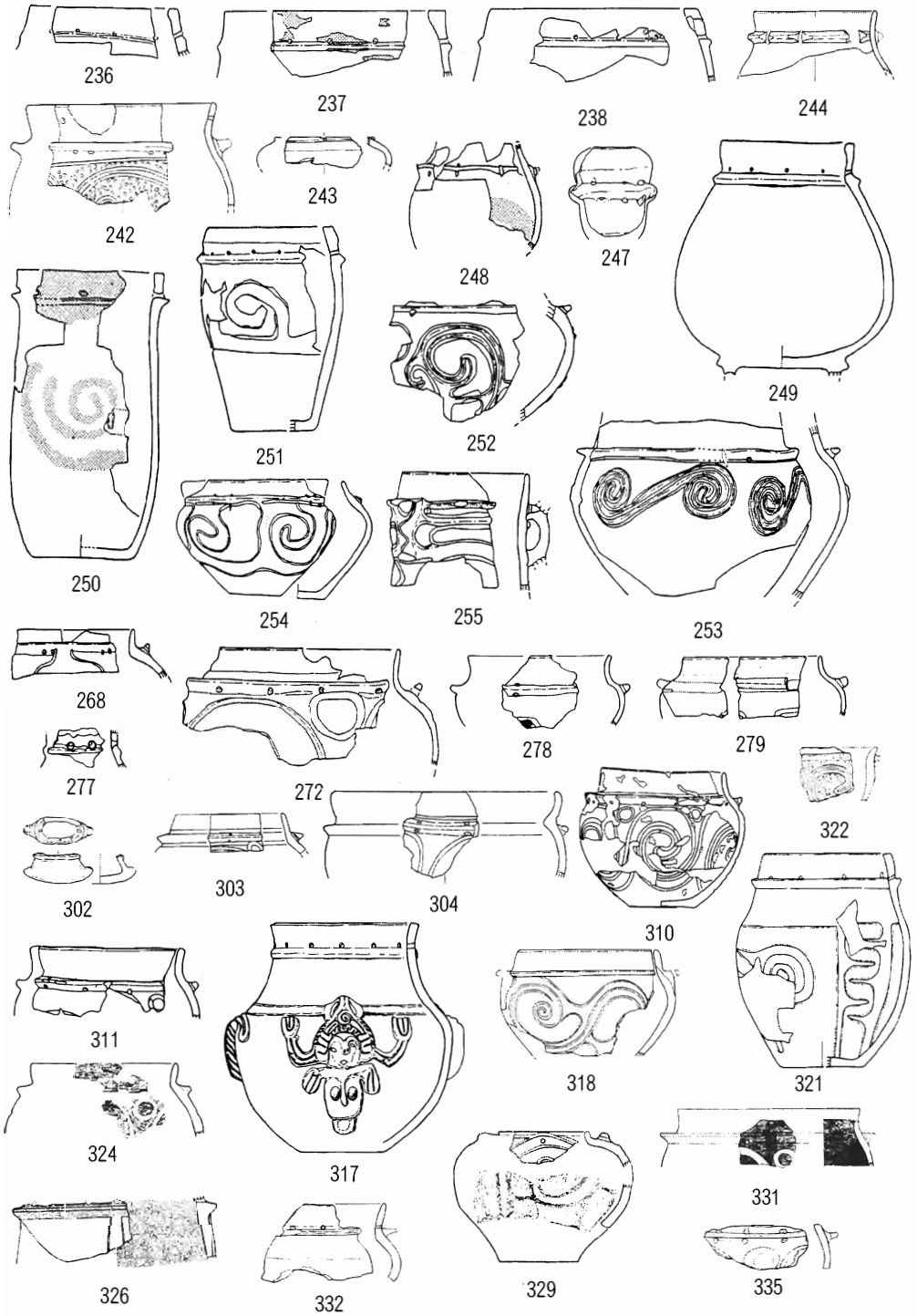
集成図1（S＝1/8）



集成図２（Ｓ＝１/８）〔113～121は縮尺不明〕


162
163
171
167
166
173
176
177
172
175
179
181
206
207
174
210
211
212
214
215
223
224
216
229
232
230
227
235

集成図３（Ｓ＝１/８）


236
237
238
244
242
243
248
247
249
251
252
250
254
255
253
268
272
278
279
277
322
302
303
304
310
311
318
321
324
317
331
326
332
329
335

集成図４（Ｓ＝１/８）

神奈川県における有孔鍔付土器集成表

No.	地域	市郡	区町村	遺跡名	点数	残存率		出土遺構	出土状態	時期	孔	研磨	赤彩	文様	備考
1	川崎・横浜	川崎市	中原区	井田中原遺跡 B地点	1	半完形		JT－1号住居址	覆土	13 b ?	外			有孔鍔付注口土器、隆帯、把手	瓢箪形
2			高津区	下原宿遺跡	1	破片		遺構外	包含層	12	内			無文	
3			宮前区	潮見台遺跡	1	破片		10号住居址	覆土？		外				
4				野川西耕地遺跡 第4地点	2	破片	a	1号住居址	覆土		外			無紋	
5						半完形	b	4号住居址	埋甕（逆位）	12	外			円形沈線文、区画外縄文（RL）	二孔一対（7対）
6			麻生区	葉積台遺跡	4	破片	a	1号住居址	覆土		外	○	○	渦巻沈線文？、区画外縄文（LR）	
7							b	18号住居址	覆土	12	外	口縁部	○	円形刺突文	
8							c	19号住居址	覆土下層		外			沈線文	小形、2次焼成？
9							d	不明	不明		外			円形沈線文	
10				細山向原遺跡 i地点	1	破片		2号住居址	覆土下層	12	外		○	沈線文、区画外縄文	
11				黒川No.16遺跡	1	破片		遺構外	包含層		内			無文	鍔の位置低い
12				宮添遺跡	2	破片	a	D-23号住居址	覆土		外			円形刺突文	
13							b	遺構外	包含層	11 c	外			円形沈線文	
14				黒川No.10遺跡	6	完形	a	遺構外	包含層	8b-9 a	内			縄文、隆帯刻目文、区画内無文	
15						破片	b				外				
16							c				外				
17							d				外				
18							e				外				
19							f				外			縄文	
20-38					19			i～A			内1 外18			未掲載破片19点	
39				黒川丸山遺跡	7	破片	a	8号住居址	覆土		内	内外面		無文	
40							b	9号住居址			内		内面黒彩	無文	
41							c	6・7号住居址			外			縄文	
42							d	8号住居址			外		内面黒彩 一部赤彩	無文	
43							e	遺構外	包含層		外			無文	
44							f	5号住居址	覆土		外			無文	
45							g	記載なし	記載なし		外			無文	
46		横浜市	港北区	篠原大原北遺跡	2	破片	a	遺構外	包含層		外		鍔～胴	円形刺突文、渦巻文	
47							b				外				貫通箇所破損
48				篠原大原遺跡	10	略完形	a	6号住居址	南西柱穴間の床面に正位	9 b	内			無文	
49						破片	b	遺構外			外				
50							c	4号住居址			内				
51							d	遺構外			外				
52							e	遺構外	包含層		外			沈線文、円形刺突文	
53							f				外		外面	円形刺突文	
54							g	20号土坑	覆土		外		内面	沈線文、円形刺突文	
55							h	遺構外	包含層		外				
56							i				外			沈線文	
57							j				外			沈線文	
58				畳屋の上遺跡	6	半完形	a	遺構外	包含層	11 c	外			沈線渦巻文、区画外撚糸文	二孔一対
59						破片	b				外			沈線区画文、区画内沈線	
60						破片	c				外		内外面	沈線区画文、区画内沈線	
61						半完形	d				外		外面	沈線・隆帯渦巻文、円形刺突文	
62						破片	e				外		○（一部）		
63						破片	f				外				
64			都筑区	前高山遺跡	1	破片		遺構外	包含層		内			無文	小形、橋状把手
65				高山遺跡	2	破片	a	遺構外	包含層		内			無文	
66							b				内			無文	
67				北川貝塚	1	破片		J 66号住居址	覆土	12 a－b	外		口縁外面	無文	

神奈川県における有孔鍔付土器の様相（副島）

No.	地域	市郡	区町村	遺跡名	点数	残存率	出土遺構		出土状態	時期	孔	研磨	赤彩	文様	備考
68	川崎・横浜	横浜市	都筑区	二ノ丸遺跡	3	破片	a	J 70 号住居址	覆土		外			磨消撚糸文	二孔一対
69							b				外			円形刺突文、沈線渦巻文	
70							c	124 ピット		12 c ?	外				有孔鍔付？
71				月出松遺跡	1	破片		J 64 号住居址	覆土	12 b	外			沈線渦巻文	
72				大熊第 3 遺跡	1	破片		遺構外	包含層		外			無文	
73			青葉区	赤田遺跡群 No. 15 遺跡	1	破片		遺構外	包含層		外		外面		
74			神奈川区	羽沢大道遺跡	2	破片	a	10 号住居址	覆土	13 b ?	外			隆帯渦巻文	無頸壺か？
75							b	16 号住居址		12 b	外			沈線渦巻文	
76			緑区	西之谷大谷遺跡	2	破片	a	SI-23 住居址	覆土		内			沈線渦巻文	鍔から小把手
77						破片	b	SI-26 住居址			外		内面	沈線渦巻文	
78				長津田遺跡群住撰遺跡	4	破片	a	遺構外	包含層		内				
79							b				外			縄文	
80							c				外				不貫通孔
81							d				外			沈線渦巻文	
82				松風台遺跡	9	破片	a	JT-2 号住居址	覆土	11 c	外				
83							b	遺構外	包含層		外			隆帯渦巻文、縄文	
84							c				外			楕円形沈線区画内縄文	
85							d				外			縄文	
86							e				外			円形（弧状）沈線文	
87							f				外				
88							g				外			円形（弧状）沈線文	
89							h				外			弧状沈線文	
90							i				外			弧状沈線文	
91			保土ケ谷区	南原遺跡	4	破片	a	15 号住居址	覆土	9 a	内		外面	縄文	
92							b				内				
93							c				内				
94							d	12 号住居址		9 b	内				
95			旭区	市ノ沢団地	1	破片		14 号住居址	覆土	11 b - c	外			円形刺突文	
96			戸塚区	後山田南遺跡	1	破片		遺構外	包含層		内				
97			泉区	泉警察遺跡	2	完形	a	7 号住居址	覆土	12 b	外				
98						破片	b	16 号住居址		12 b - c	外				
99			港南区	下永谷 6 丁目遺跡	1	破片		J-2 号住居址	覆土	9 b	内	内外面		無文	
100				雑色杉本遺跡	1	破片		遺構外	包含層		外			隆帯楕円形区画、区画内沈線充填	
101	湘南藤沢	藤沢市		湘南藤沢	4	破片	a	遺構外	包含層		内		口縁	無文	
102							b				内			内面に沈線横走	
103							c				内			無文	鍔下に穿孔
104							d	Ⅱ区 1 号竪穴住居址	床直	9 b	内			無文	
105				藤沢市No. 322 遺跡	3	破片	a	1 号住居址	覆土	11 c	外			無文	
106							b				外			無文	
107							c				外			無文	
108		茅ヶ崎市		臼久保遺跡	1	破片		遺構外	包含層		内				鍔元より若干上に穿孔
109				大久保 C 遺跡	2	破片	a	5 号住居址	床面（詳細不明）	11 c	外			沈線渦巻文、円形刺突文	
110							b	6 号住居址	覆土		外				
111				大久保 D 遺跡	1	破片		遺構外	包含層		外				
112		高座郡	寒川町	岡田遺跡（範囲確認調査）	1	破片		遺構外	包含層					無文	
113				岡田遺跡（本調査）	9	完形	a	106 号住居址	南西壁中央部小張出部の埋甕	12 a	外			沈線区画渦巻文、区画内を沈線 or 撚糸充填	二孔一対
114							b	258 号住居址	周溝直上	9 c	内				
115						破片	c	74 号住居址	覆土	12 c	外			沈線円形文	
116							d	89 号住居址		11 c ?	外				
117							e	91 号住居址		10 b	内			無文	
118							f	104 号住居址			内			隆帯文	
119							g	139 号住居址		9 b ?	内				
120							h	172 号住居址		11 b - c	外				
121						完形	i	264 号住居址		9 b ?	内			胴部「己」状沈線区画文、縄文	

No.	地域	市郡	区町村	遺跡名	点数	残存率		出土遺構	出土状態	時期	孔	研磨	赤彩	文様	備考
122	湘南	平塚市		上ノ入B遺跡	1	略完形		16号住居址（4次調査）	覆土	11 b－c	内		全体	人体文	
123				万田貝殻坂貝塚	2	破片	a	遺構外	包含層		内				
124							b				内				
125				原口遺跡	14	破片	a	J6号住居址	覆土	9 a	内			低い隆帯	
126							b	J21号住居址		11 c	外	内外面	内外面	円形沈線文	
127							c	J23号住居址		11 b－c	外			撚り糸文、隆帯渦巻文	
128						略完形	d	J29号住居址	中央床面？	9 b？	外		○	隆帯、沈線、脚付、円形突起、把手	
129						破片	e	J55号住居址	覆土？	12 b	外		外面	円形隆帯渦巻文	
130							f	58号住居址			外		内外面	円形渦巻沈線文	
131							g	J62号住居址	覆土	12 b	外				
132							h	J5号敷石住居址			内			縄文	
133							i	遺構外	包含層		外			円形（渦巻）沈線文	原口遺跡出土有孔鍔付土器は総数89点
134							j				外				
135							k				内				
136							l				外				
137							m				内				
138							n				内				
139		伊勢原市		粕上原遺跡	4	破片	a	遺構外	包含層		内				
140							b				外			円形刺突文	
141							c				内				
142							d				内				
143				御伊勢森遺跡	1	完形		1号住居址	覆土？		外		口縁、鍔上面	J字状区画沈線文	
144				神成松遺跡	1	破片		6号住居址d	覆土	11 a	内			無文	
145				No.160遺跡	2	破片	a	遺構外	包含層		内				小形
146							b				外			沈線文	
147				沼目・坂戸遺跡第Ⅱ地点	1	破片		2号住居址	覆土	12?	外			沈線渦巻文	
148				坪ノ内・貝ヶ窪遺跡	1	破片		遺構外	包含層		内				
149				田中・万代遺跡	3	破片	a	J5号a住居址	南東周溝上で住居覆土下層	9 b	内	○		隆帯文（X字状・鋸歯状幅広隆帯）	
150							b		覆土		内				
151							c		覆土		内				
152				下北原遺跡Ⅱ	2	破片	a	遺構外	包含層		外			弧状沈線	
153							b				外				
154				池端・椿山遺跡	2	破片	a	J3号住居址	包含層？		外				
155							b	遺構外	包含層		外		○	孔は一つ以外不貫通孔	
156	津久井	旧津久井郡	旧津久井町	寺原遺跡	4	破片	a	14号住居址	覆土	12 b	外		口縁	渦巻沈線文	
157							b	102号住居址			外			渦巻沈線文、孤状沈線文	二孔一対
158							c	109号住居址			外			条線、隆帯渦巻文	二孔一対
159							d	遺構外			内			無文？	二孔一対
160				大地開戸遺跡	5	破片	a	J6号住居址	覆土	11 c-12 a	外			沈線、隆帯	
161							b	J12号住居址		9 a？	内			無文	
162							c	J21号住居址		11 c-12 a	外			沈線区画内縄文	
163							d	遺構外	包含層		外			沈線区画内無文、円形刺突文	
164							e				外		内外面	沈線文	
165				三ヶ木遺跡		破片		遺構外	包含層		内		内面		
166			旧城山町	川尻遺跡	1	破片		18号住居址	覆土	11 b	外			無文	
167				川尻遺跡B地区	1	略完形		J2号土器集中区	遺構内	9 a	内			隆帯文、環状把手	

神奈川県における有孔鍔付土器の様相（副島）

No.	地域	市郡	区町村	遺跡名	点数	残存率		出土遺構	出土状態	時期	孔	研磨	赤彩	文様	備考
168	津久井	旧津久井郡	旧城山町	原東遺跡	3	破片	a	1号住居址	覆土	9 a	内	○	外面		
169							b	19号住居址		11 a	内	○			
170							c	遺構外	包含層		内			楕円形区画・渦巻沈線文、沈線区画内縄文	
171				川尻中村遺跡	12	破片	a	1号住居址	覆土	11 c	外			渦巻沈線文区画、区画内無文、円形刺突文	
172							b	42号住居址	覆土		外		内外面	無文	
173							c	58号住居址	炉址内	12 a	外		内外面	沈線円形（渦巻）文	
174							d	67号住居址	覆土		外	○		無文	
175						半完形	e	16号住居址			外			隆帯渦巻き文	ミニチュア
176						破片	f	遺構外	包含層		外			縄文、円形（渦巻）沈線文	二孔一対
177							g				外			撚糸文、円形（渦巻）沈線文	
178							h				外			沈線文、隆帯	
179							i				内			無文	
180							j				外			円形（渦巻）沈線文	
181							k				外			円形刺突文、円形（渦巻）沈線文	
182							l				外			円形刺突文	
183 - 205					23	破片	m ～ J	遺構外	包含層		外 22		内面 ×1	無文	図なし
206	相模原	相模原市		新戸遺跡	8	破片	a	J－2号住居址	覆土	12 a	外			円形刺突文、把手	
207							b	J-13号住居址		12 b	外			円形沈線文	
208							c				外				
209							d	J-13号住居址		12 b	外				
210							e				外			隆帯区画文	
211						略完形	f	J-535土坑			内			無文、把手	
212							g	遺構外	包含層	12 c-13?	外			隆帯文、片把手	瓢箪形
213						破片	h				内			部分的に縄文	ミニチュア
214				当麻遺跡	11	破片	a	12号住居址	覆土	12 a	外	○	○	円形（渦巻）沈線文	
215							b	16号住居址			内外			沈線区画内縄文、把手	内孔・外孔が交互に二孔一対
216						完形	c				外			沈線区画内集合沈線、渦巻隆帯文	二孔一対が一組
217						破片	d	遺構外	包含層		外		内外面		
218							e				内		内外面	無文？	
219							f				外		内外面		
220							g				外		内外面	隆帯	
221							h				外		内外面		
222							i				内		内外面		
223							j				外		内外面	隆帯区画文、区画内円形刺突文	
224							k				外		口縁外面	円形刺突文	
225				上溝7丁目遺跡	1	破片		遺構外	包含層		内	○			小形
226				勝坂遺跡第45次調査	6	破片	a	遺構外	包含層		内			無文	
227				勝坂遺跡第47次調査			b	5号住居址	覆土		外	内面	外面	沈線文	二孔一対？
228				勝坂遺跡第54次調査			c	1号住居址	覆土	12	内	内外面	鍔の上		内外両面から穿孔
229				勝坂遺跡Ｄ区		半完形	d	Ⅱ期3号住居址	覆土	12	外	内外面		渦巻沈線文、区画外縄文（RL）	
230						半完形	e	Ⅱ期3号住居址	覆土	12	外	内面	外面：口縁、磨消帯、内：肩	渦巻沈線文、円形刺突文	二孔一対、口縁破損部に被熱痕
231						破片	f	遺構外	包含層		外		内面		
232				大島上ノ原遺跡	1	破片		遺構外	包含層		外		表面	鍔から垂下する隆帯	小把手

No.	地域	市郡	区町村	遺跡名	点数	残存率		出土遺構	出土状態	時期	孔	研磨	赤彩	文様	備考
233	相模原	相模原市		相模八幡前遺跡	3	破片	a	(JSI-10) 10号住居址	覆土	11 c	外				
234							b		覆土		外				
235							c	遺構外	包含層		外			円形刺突文	
236				下中丸遺跡	5	破片	a	6号住居址	覆土	8b	内	○?			
237							b	7号住居址		9 a	内	○?	黒彩上に赤彩		
238							c				内	○?			
239							d				内	○?			鍔下に穿孔
240							e	遺構外	包含層		内				
241				山王平遺跡	7	破片	a	16号住居址	覆土	11 c	外				穿孔部破損
242							b	39号住居址		12 a	外			円形刺突文、渦巻沈線文	二孔一対
243							c	40号住居址		11 c	外			無文	
244							d	40号住居址			外			無文	穿孔部破損
245							e	43号住居址		12 a	外			渦巻沈線文	
246							f				外				
247							g				外				ミニチュア
248				上中丸遺跡	28	破片	a	16号住居址	覆土	11 c	外		内外面	無文	
249						略完形	b	38号住居址	炉址南東面より破片散在	9 a	内		内外面	無文	
250						半完形	c	24号住居址	覆土	9 b ?	内		内外面	赤彩による渦巻き文	
251						略完形	d	65号住居址			内			縄文、無文帯渦巻文	
252						破片	e	56号住居址			外			沈線と隆帯による渦巻文	
253						半完形	f	59号住居址		11 c	外			S字状隆帯渦巻文(連結渦巻文)	
254							g	86号住居址		11 c	外		内外面	沈線渦巻文	二孔一対
255						破片	h	5号集石土坑			外			沈線、隆帯、条線、撚糸文	
256							i	1 (A) 号住居址			内		内外面		
257							j	5号住居址			内		内外面		
258							k	9号住居址			外		内外面	沈線	内面炭化物付着
259							l	10号住居址			外		内外面		
260							m	16号住居址			外				
261							n	25号住居址			内			沈線区画文	
262							o	28号住居址			外		内外面	沈線、隆帯	
263							p	30 (A) 号住居址			外		内外面	沈線	
264							q	36号住居址			外				
265							r	56号住居址			外				二孔一対
266							s				外			隆帯、沈線	
267							t	59号住居址			外		内外面?		
268							u	72号住居址			外		内外面?	沈線	
269							v	96号住居址			外			沈線	二孔一対
270							w	109号住居址			外		外面	沈線	
271							x	112号住居址			外			沈線	
272							y				外			沈線区画内撚糸文	二孔一対
273							z	遺構外	包含層		外		内外面	沈線	
274							A				外		内外面	沈線	
275							B				外		内外面		
276				橋本遺跡	5	破片	a	SI-01	覆土		外			弧状沈線文	
277							b	SI-38	覆土		内			無文	
278							c	遺構外	包含層		外			円形沈線文、区画内縄文	
279							d	遺構外	包含層		外			弧状沈線文	
280							e	SI-37	覆土		外			無文	二孔一対
281 - 295					15		f ～ o	SI-32,37,42,45,SX-51,遺構外	覆土、包含層		外				小破片
296	県央	大和市		上草柳第3地点東遺跡	6	破片	a	遺構外	包含層		外	内面、外面口縁		縄文、渦巻文	同一個体か?
297							b				外	内面、外面口縁		縄文、渦巻文	
298							c				外	○		無文	
299							d				外	○		無文	

神奈川県における有孔鍔付土器の様相（副島）

No.	地域	市郡	区町村	遺跡名	点数	残存率	出土遺構		出土状態	時期	孔	研磨	赤彩	文様	備考
300	県央		大和市	上草柳第３地点東遺跡	6	破片	e	遺構外	包含層		外	○		縄文、渦巻文	同一個体か？
301							f				外	○		縄文、渦巻文	
302			座間市	飯綱山遺跡	1	略完形		J2 号住居址	覆土	8 a	内			無文	器形は皮袋状、俯瞰楕円形、小形
303			綾瀬市	早川天神森遺跡	2	破片	a	8 号住居址	覆土	12 a	外		外面	円形（渦巻）沈線文	
304							b	遺構外	包含層		外			円形（渦巻）沈線文	
305－309					5		c～g				外				鍔部のみ５点
310			海老名市	中原遺跡	3	略完形	a	7 号住居址	覆土	12	外	○		渦巻沈線文	
311						破片	b	7 号住居址		12	外			渦巻沈線文？	
312							c	12 号住居址			内				
313－316					4		d～g	15、16～19、21 号住居址			外		gの鍔	小破片	
317			厚木市	林王子遺跡	1	完形		3 号住居址	炉付近の床面	9 b	内			人体装飾	
318				及川中原遺跡	1	破片		8 区 2 号竪穴住居址	覆土	12 c	外	○		沈線渦巻文	
319				及川天台遺跡	1	破片		遺構外	包含層		外				
320				溝野日影坂上遺跡	1	破片		10 号住居址	覆土	11 c	外				
321				恩名沖原遺跡	2	略完形	a	J-2 号住居址	覆土	9 a	内			蛇行文、円形文	
322						破片	b	J-42 号住居址	覆土	12 a	外			円形刺突文、渦巻隆帯	
323				荻野上ノ原遺跡第２地点	1	破片		J1 住居址	覆土	12 a	外	○	内外面口縁沈線区画内	沈線文	
324		愛甲郡	清川村	北原No.10・11北遺跡（宮ヶ瀬遺跡群）	1	破片		J5 号住居址	覆土		外			円形沈線文	
325	足柄上	足柄上郡	山北町	尾崎遺跡	7	破片	a	7 号住居址	覆土	12 b	外		外面		
326							b	22 号住居址			内		内面、外面鍔	隆帯文	
327							c	23 号住居址		12 c	外		外面		
328							d	遺構外	包含層		外				
329							e				外			円形（渦巻）沈線文	
330							f				外		内外面		
331							g				外		内外面	円形（渦巻）沈線文	
332	西湘		小田原市	久野一本松遺跡	7	破片	a	J20 号住居址	覆土		内		口縁内面、外面		ヘラ調整
333							b	J21 号住居址		11 c ?	内				
334							c	遺構外	遺構外	10 a	内				
335							d				外			円形沈線文	
336							e				外			円形沈線文	
337							f				外				

□は集成図に掲載した事例
※時期は新地平編年にあてはめた

古代橘樹郡衙とその周辺の様相

－十三菩提遺跡・子母口植之台遺跡調査成果を中心に－

栗田　一生

はじめに
1. 調査・研究略史
2. 橘樹郡衙周辺遺跡の調査成果
3. 十三菩提遺跡で発見された溝状遺構の検討－方形区画溝の可能性－
4. 子母口植之台遺跡における調査成果からの検討－橘樹郡衙との関係－
おわりに

はじめに

橘樹郡衙は神奈川県北東部に位置する川崎市のほぼ中央にあたる川崎市高津区千年に所在している（第1図）。橘樹郡衙の発見は、1996（平成8）年に川崎市高津区千年で宅地造成工事に伴い実施された千年伊勢山台北遺跡の発掘調査であった（河合・中山ほか2000）。この調査で、東西方向に整然と柱筋を揃えた7棟の総柱式掘立柱建物跡が発見され、規模や構造、配置等が全国各地で確認されている郡衙の正倉跡と非常に良く似ていることから、武蔵国橘樹郡衙の「正倉」に相当するのではないかと推定された。この発見以前から橘樹郡衙についての考察はいくつか見られたが、この発見を契機に、郡衙西側に隣接し、7世紀末の創建と推定される影向寺との関係等も含め注目されはじめ、その重要性が認識されるようになっていった。そうした関心の高まりを受け、川崎市教育委員会が1998（平成10）年度から2003（平成15）年度まで橘樹郡衙推定地確認調査事業として8次にわたる現地確認調査を行い、郡衙正倉と推定される総柱式掘立柱建物跡や郡衙に関連すると推測される建物跡が広い範囲に展開すること、またこれらの建物跡がⅢ期の変遷をもつことなどを明らかにした(川崎市教育委員会2005)。千年伊勢山台北遺跡及び千年伊勢山台遺跡(註1)の調査により橘樹郡衙の正倉域がほぼ確定され、橘樹郡衙は神奈川県下の郡衙遺跡として武蔵国都筑郡衙（長者原遺跡：横浜市都筑区)、相模国鎌倉郡衙（今小路西遺跡：鎌倉市)、相模国高座郡衙（下寺尾西方Ａ遺跡：茅ヶ崎市）に次いで4例目の発見となった。

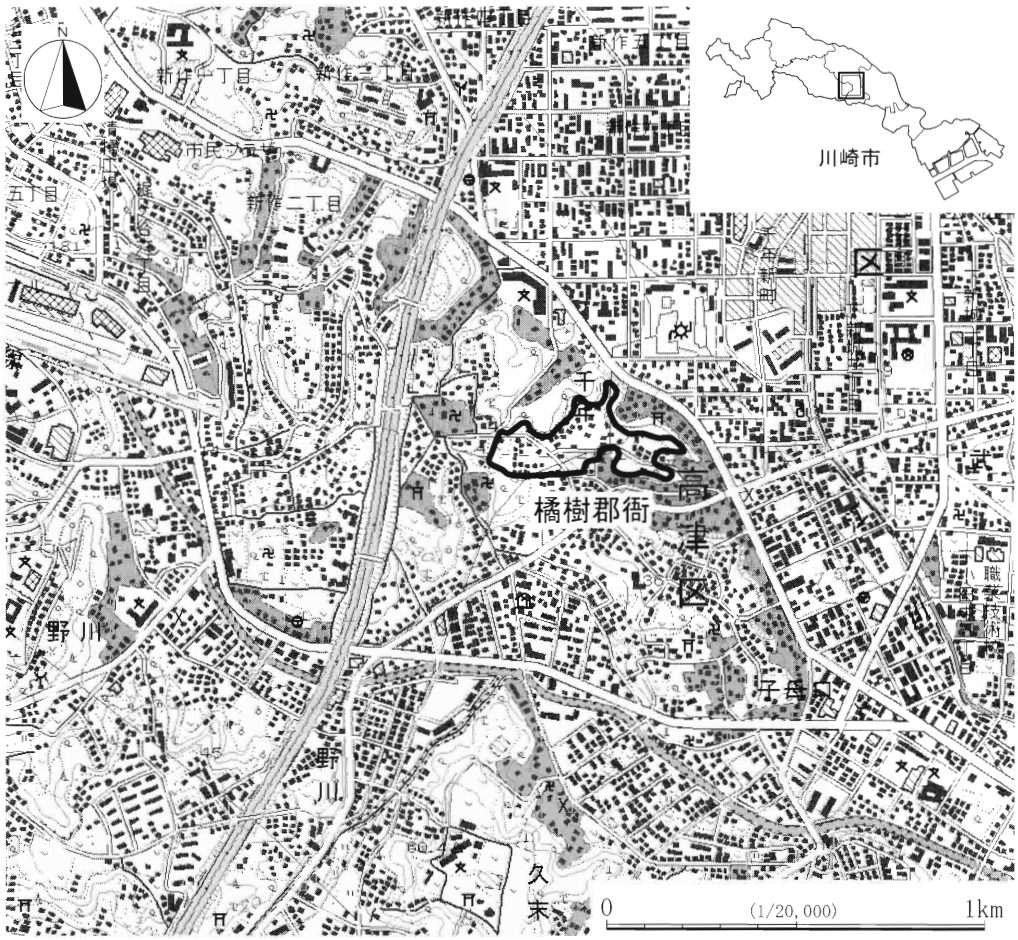
その後、2006（平成18）年に川崎市教育委員会の主催で「シンポジウム　古代の川崎市役所発掘する－橘樹郡衙推定地の調査成果と歴史的意義－」が開催され、調査成果や全国各地の調査例などから橘樹郡衙について発表・検討がなされたが（川崎市教育委員会2006)、このシン

ポジウム以降新たな知見は少なく、橘樹郡衙についての研究は停滞気味といえる。

そこで本稿では、将来の橘樹郡衙研究の一助となることを目的として、これまでの調査・研究をまとめるとともに、近年の橘樹郡衙周辺における発掘調査によって得られた成果を基に橘樹郡衙とその周辺の様相について検討を試みたい。

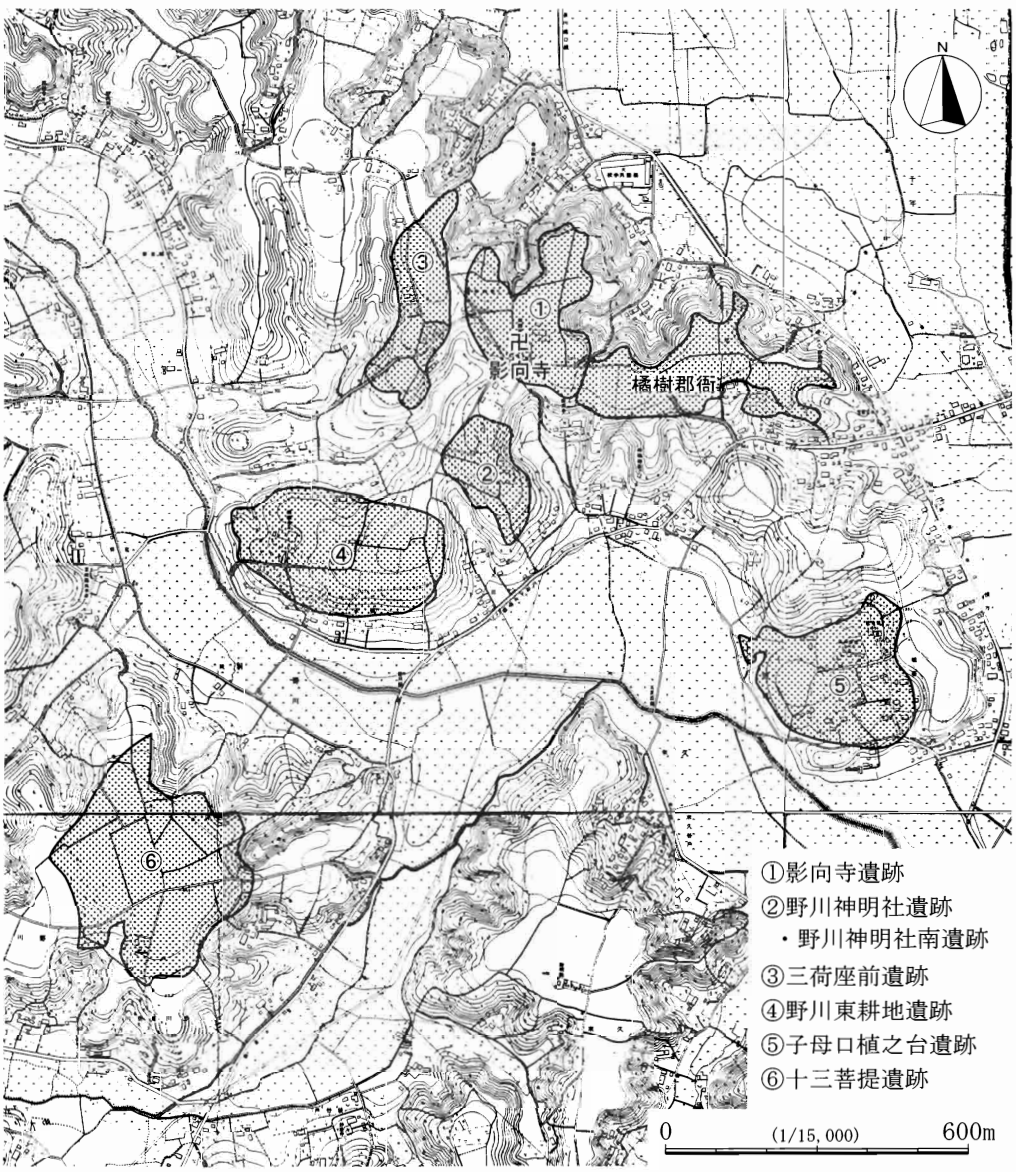
1. 調査・研究略史

橘樹郡衙に関する調査・研究の原点ともいうべきものは、『川崎市史』における古江亮仁の論考である（古江 1968）。古江は「律令時代」という項目の中で自身のこれまでの研究をふまえ、川崎市高津区子母口の橘樹神社周辺が橘樹郡衙の比定地として最も有力であると論じている。また、橘樹郡衙と密接な関連をもつ影向寺や小高駅家についても論述しており、発掘調査が実施されておらず考古学的知見がほとんどなかった当時にあって、的確に要点を捉えた考察を展



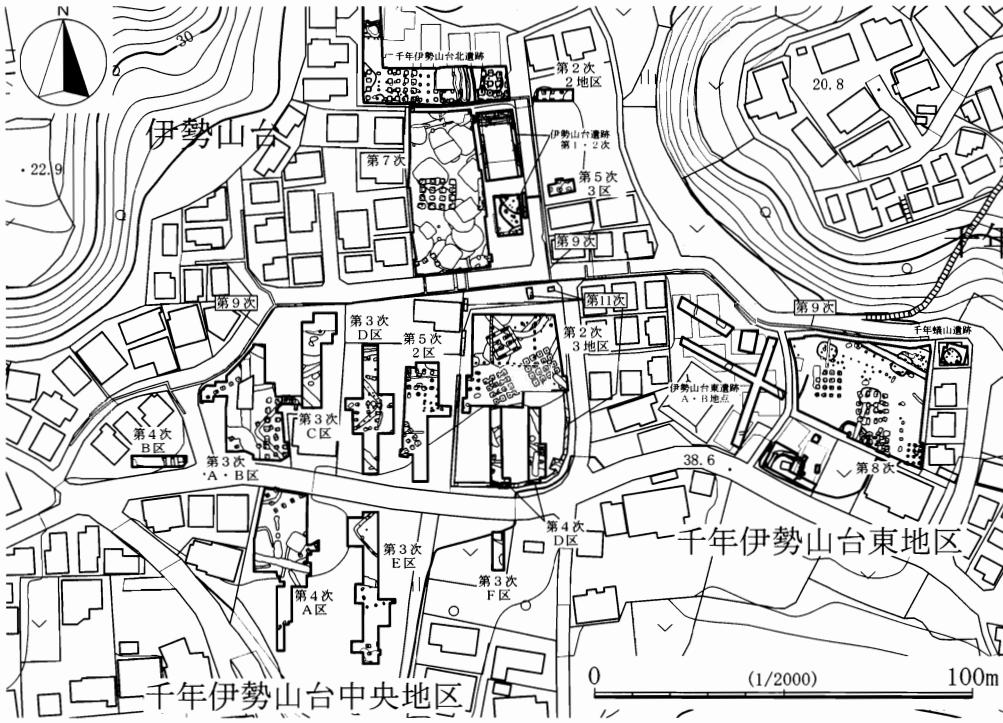
第1図　橘樹郡衙の位置

開している。しかしこの古江の論考後は発掘調査等により新たな資料が提供されることもなく、橘樹郡衙関連の研究・調査はほとんど進まなかった。再び橘樹郡衙が注目されるようになったきっかけは、1987（昭和62）年に高津区子母口で実施された蓮乗院北遺跡の発掘調査で総柱式掘立柱建物跡を含む遺構群が発見されたことによる。この総柱式掘立柱建物跡が郡衙正倉と酷似していること等から、調査者は直ちに郡衙とは言えないが公的な性格を有した施設であった可能性が高いと報告している（浅川・河合ほか1987）。またその後、この蓮乗院北遺跡の性格について、郡に設置された郷の施設「郷衙」の倉庫または橘樹郡衙正倉の別院といった可能性

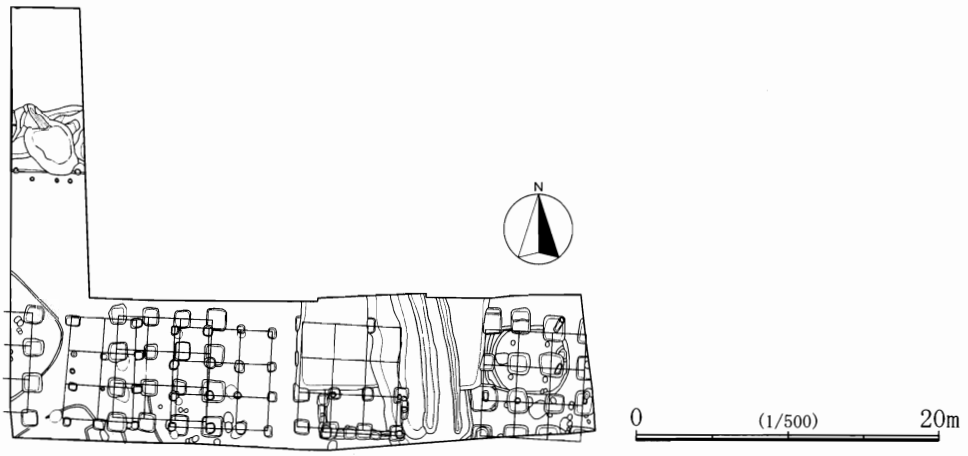


第2図　橘樹郡衙とその周辺遺跡

が論じられた（河合 1997、村田 1999）。この蓮乗院北遺跡の発見により、かつて古江が論じた高津区子母口周辺が橘樹郡衙の有力な候補地となったが、その後前述した千年伊勢山台北遺跡で東西方向に整然と柱筋を揃えた総柱式掘立柱建物群が発見されたことにより、この遺構群が橘樹郡衙正倉跡である可能性が高いと考えられ、川崎市高津区千年が橘樹郡衙の候補地として注目された。この橘樹郡衙正倉跡の発見により、近接する影向寺との関係も含め注目されるようになり、1998（平成10）年度から2003（平成15）年度まで川崎市教育委員会による橘樹郡衙推定地確認調査事業が行われ、千年伊勢山台から影向寺台にかけて橘樹郡衙やそれに関連すると想定される遺構が広範囲に広がる様相が明らかになった（千年伊勢山台遺跡第1～8次調査）。さらに、2004・2005（平成16・17）年にガス管埋設工事に伴う発掘調査（千年伊勢山台遺跡第9・10次調査）、2007（平成19）年に緑地整備事業に伴い確認調査（千年伊勢山台遺跡第11次調査）が川崎市教育委員会により実施され、この高津区千年に橘樹郡衙が所在していたことはほぼ確実となった（第3図・第4図）。ただし橘樹郡衙の所在地に関しては、郡衙正倉域は高津区千年に所在するが、郡衙の主要施設である郡庁がこれまでの調査で未確認であることや蓮乗院北遺跡で掘立柱建物群が検出されていること、さらにこの地域の旧地形などから、橘樹郡衙郡庁域は高津区子母口富士見台に所在していたとする村田文夫の論考も出されている（村田 2007）。



第3図　橘樹郡衙（千年伊勢山台遺跡）の検出遺構

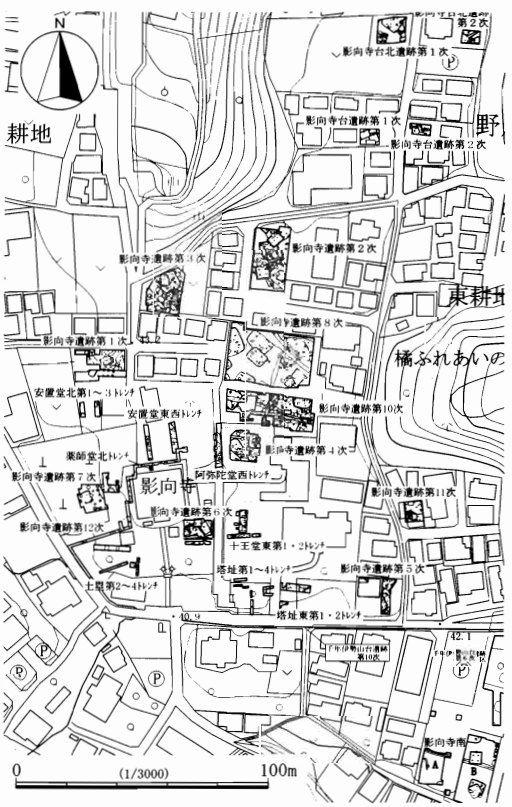


第４図　千年伊勢山台北遺跡検出の倉庫群

2. 橘樹郡衙周辺遺跡の調査成果

（1）影向寺遺跡・影向寺台遺跡（第５図）

川崎市宮前区野川字東耕地に所在する影向寺は橘樹郡衙西側に近接して位置しており、周辺ではこれまで多くの発掘調査が実施され、橘樹郡衙と同時期と推定される遺構も多数発見されている。影向寺境内やその隣接地を範囲とする影向寺遺跡では、これまで12次にわたる発掘調査が実施され[註2]、影向寺に関わる遺構や影向寺創建以前の大型建物跡など多くの建物跡が確認されるとともに、瓦・土師器・須恵器など多数の遺物が出土しており（久保・大三輪 1975、伊東・竹石・鈴木ほか 1982、竹石・澤田・野中 1984、伊東ほか 1986、川崎市 1988、竹石・澤田 1993、河合・中山 1997、河合ほか 2007、河合・伊東 2008）、出土した遺物には「无射志国荏原評」という国評銘が表記された瓦が存在するなど貴重な資料も含まれている（竹石・原 2002 ほか）。これまで発見された遺構・遺物の研究から古代影向寺が



第５図　影向寺とその周辺の調査

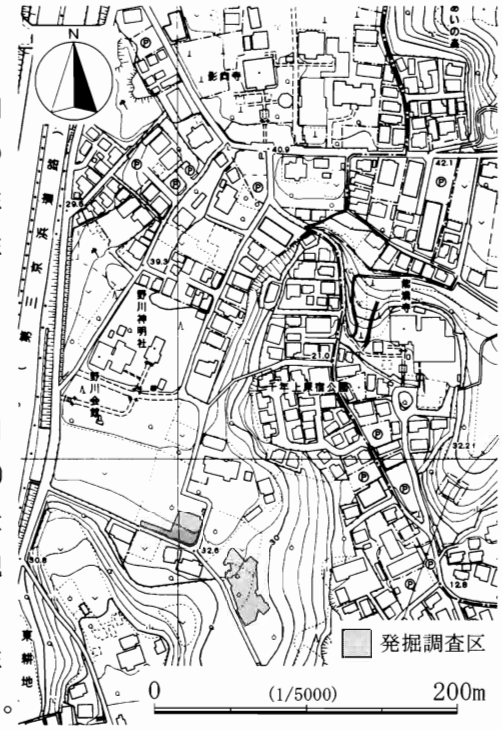
概ねⅢ期の変遷を辿ることが知られている（村田 2007)。また、影向寺から北側へと続く丘陵平坦面に位置し、影向寺遺跡と密接な関係が推測される影向寺台遺跡では過去3回の発掘調査が実施され、奈良・平安時代の竪穴住居跡や影向寺との関連性が推測される掘立柱建物跡が数棟検出されている（浅川・河合・福田 1997、北平 2004)。

（2）野川神明社南遺跡（第6図）

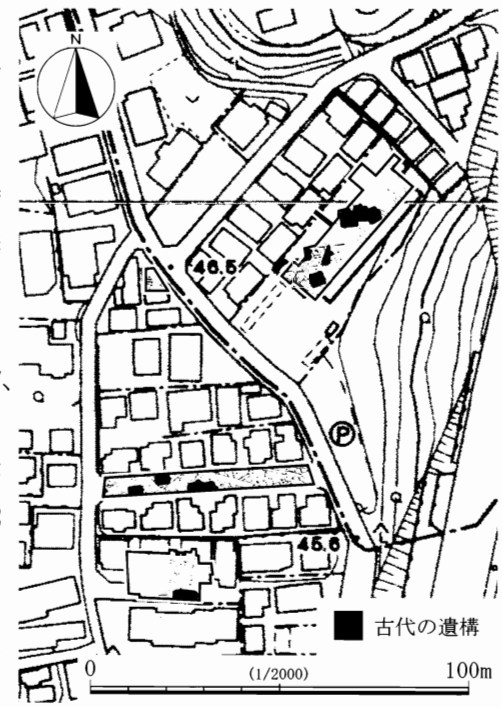
川崎市宮前区野川字東耕地に所在する野川神明社南遺跡は橘樹郡衙から南西側に約200m、影向寺から南側に約150mの場所に位置し、平成19年度に発掘調査が実施された。現在報告書作成中であり詳細は不明であるが、古代に比定される竪穴住居跡13軒及び掘立柱建物跡1棟が発見されている(小池・浅賀 2008)。影向寺北側の影向寺台遺跡と同様、影向寺及び橘樹郡衙に近接しており、そこで働く人々が生活していた集落の可能性等が想定され注目される。

（3）三荷座前遺跡（第7図）

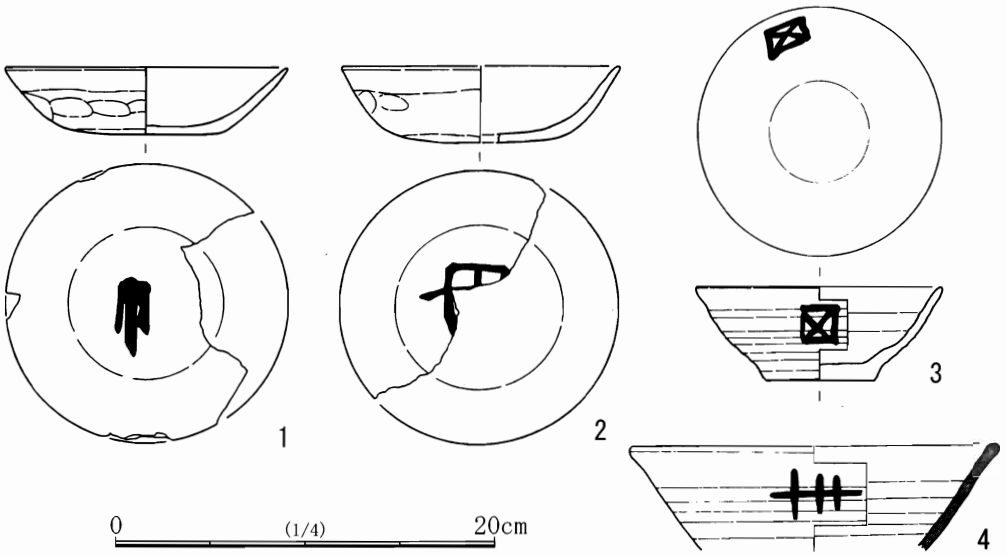
川崎市宮前区野川字北耕地に所在する三荷座前遺跡は橘樹郡衙から北西側に約350m、影向寺から北西側に約200mの場所に位置し、これまでに4回の発掘調査が実施されている（伊東・大坪ほか 1996、伊東・小林ほか 1997、小池・粕谷 2002、大坪・渡辺 2005)。これまでの調査では、古代に比定される竪穴住居跡が10軒以上検出されている。また、第1・2地点からは少量であるが墨書土器が出土しており（第8図)、隣接する橘樹郡衙や影向寺からあまり墨書土器が発見されていないことから貴重な資料をといえる。



第6図　野川神明社南遺跡



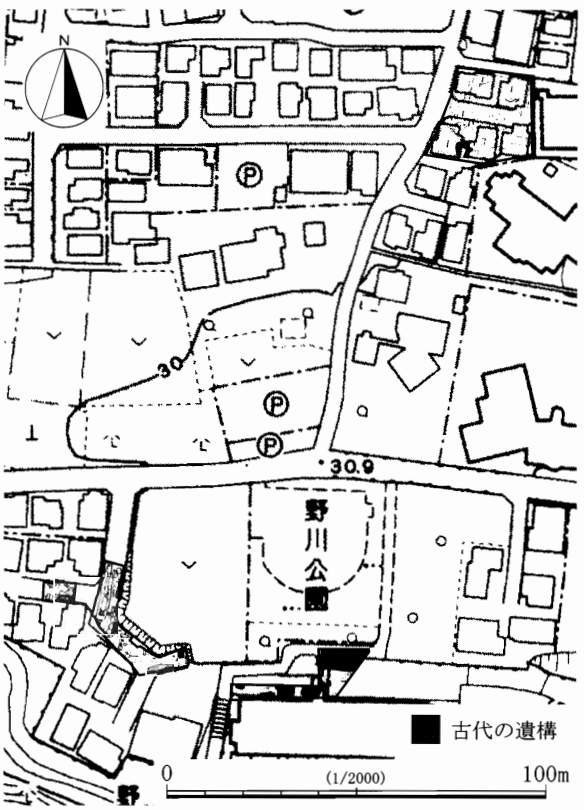
第7図　三荷座前遺跡の調査地点



第８図　三荷座前遺跡出土墨書土器（1・2：第１地点、3・4：第２地点）

（4）野川東耕地遺跡（第９図）

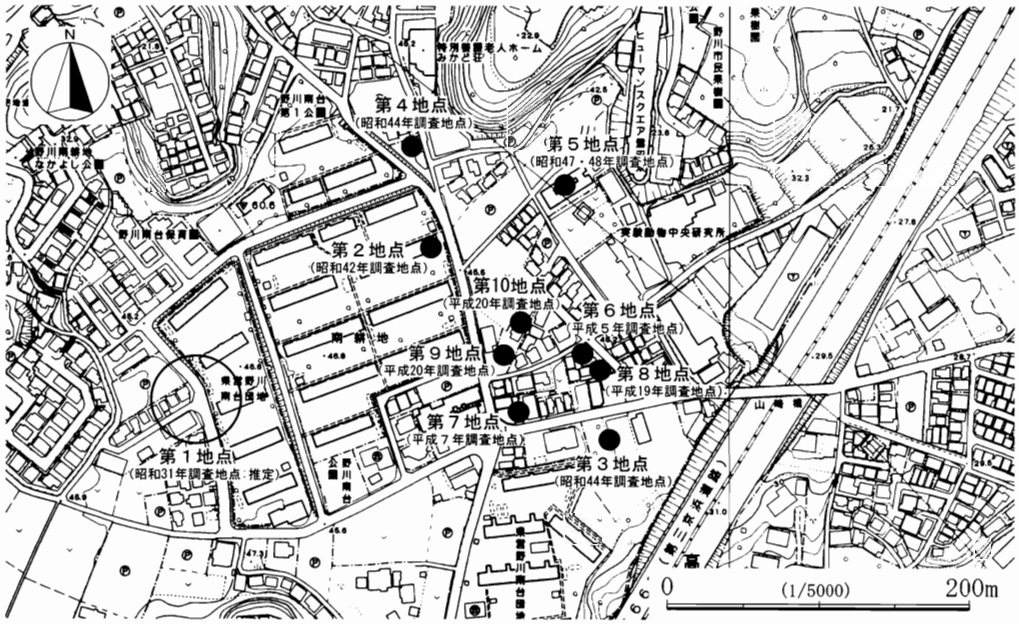
川崎市宮前区野川字東耕地に所在する野川東耕地遺跡は橘樹郡衙から南西側に約800ｍ、影向寺から南西側に約500ｍの場所に位置し、これまでに３回の発掘調査が実施されている（伊東ほか1994、伊東・碓井ほか2000、伊東・碓井ほか2001）。これまでの調査では、古代に比定される竪穴住居跡が11軒検出されている。特筆すべきは、第３地点で８世紀前半と想定される大型竪穴住居跡が確認されていることで、未報告のため詳細は不明であるが、東西約12ｍ以上、南北５ｍ以上の規模を有している。８世紀前半といえば、橘樹郡衙や影向寺とまさに一致する時期であり、この遺構がどのような性格を有していたのかが注目される。



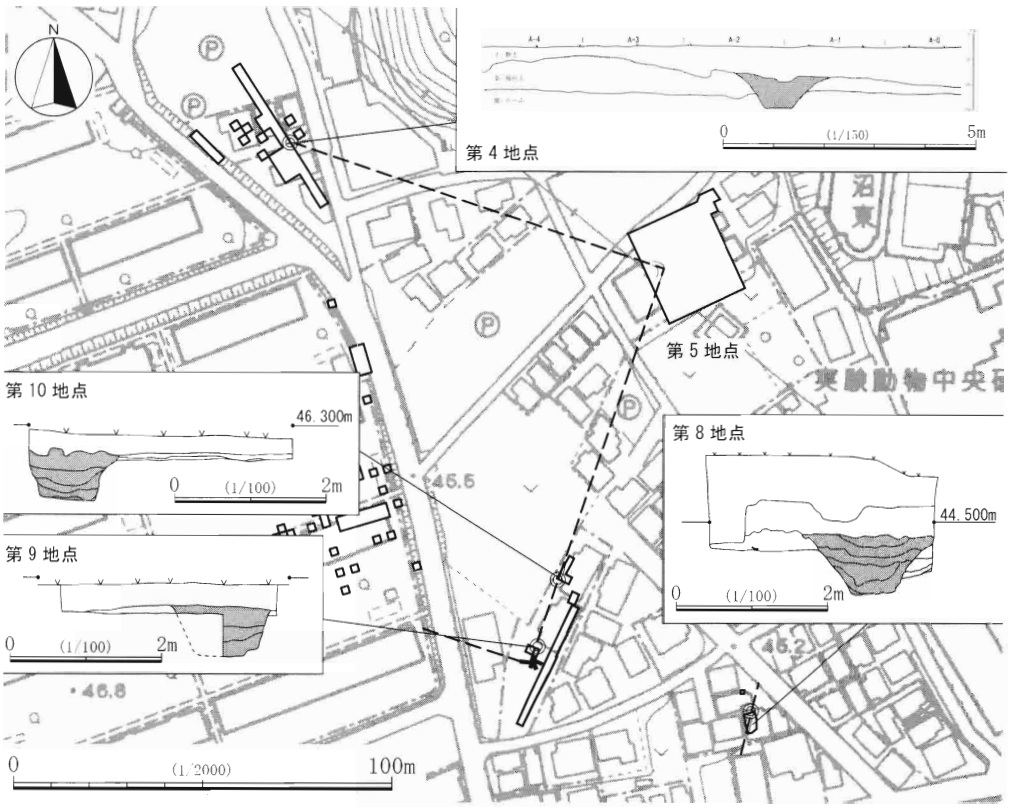
第９図　野川東耕地遺跡

3. 十三菩提遺跡で発見された溝状遺構の検討－方形区画溝の可能性－

川崎市宮前区野川に所在する十三菩提遺跡は橘樹郡衙から南西側約1,500 m、影向寺から約1,350 mの場所に位置し、現在までに10回の発掘調査（十三菩提遺跡第1～10地点：確認調査を含む）が実施されているが（第10図）、十三菩提式土器（縄文時代前期末葉）の標式遺跡であるため、当然当該期を目的とした調査が多く実施され、縄文時代以降の遺構・遺物についてはあまり触れられてこなかった。そのような状況の中、平成19年に十三菩提遺跡において個人住宅建設に伴う発掘調査が実施され、筆者が担当者として調査を実施した（十三菩提遺跡第8地点）。調査の結果、縄文時代の遺構は検出されなかったが、断面逆台形を呈する溝状遺構1条が検出された（第11図）。検出された溝状遺構の構築時期については、覆土から縄文土器及び黒曜石片以外の遺物が出土しなかったため決定できなかったが、その形態や覆土の観察から縄文時代以降の所産であると考えられた。その後、平成20年に第8地点北西側に位置する場所で宅地開発が行われることとなり、事前に川崎市教育委員会で試掘調査を実施した（川崎市教育委員会2009）。その結果、縄文時代の遺物が大量に出土するとともに、断面逆台形を呈し、直角に曲がる溝状遺構が検出された（十三菩提遺跡第9地点）。さらに同じ平成20年、第9地点北側隣接地において戸建住宅建設が計画され、川崎市教育委員会は周辺における調査成果により遺跡の現存は確実であると判断し、遺跡の詳細把握のため確認調査が実施された（川崎市教育委員会2009）。その結果、第9地点で確認した溝状遺構の延長部分と想定される溝状遺構が検



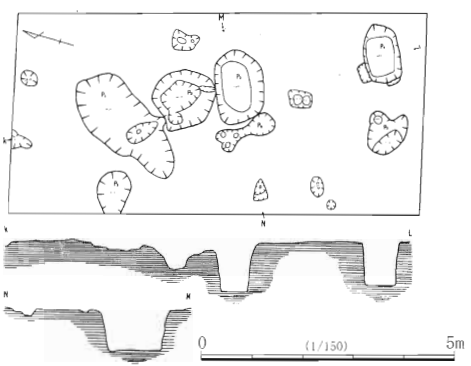
第10図　十三菩提遺跡における調査地点



第 11 図　十三菩提遺跡発見溝状遺構の位置関係

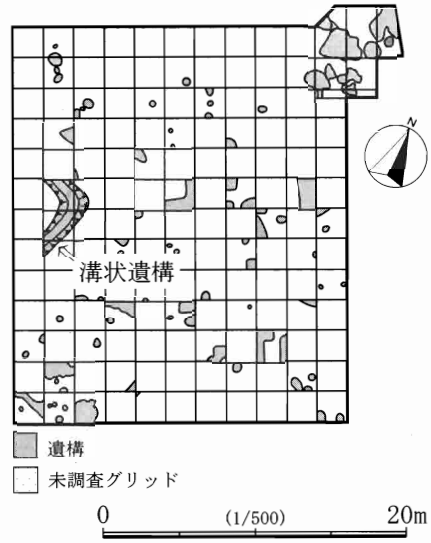
出された（十三菩提遺跡第 10 地点）。

このように近年の発掘調査で、縄文時代以外の時期の所産と考えられる遺構が確認されてきていることから、今回これまでほとんど検討されていなかった十三菩提遺跡の縄文時代以降の遺構について再検討することとした。その結果、1967（昭和 42）年 12 月に神奈川県営野川南台団地建設に伴い野川南台団地埋蔵文化財調査団（団長：樋口清之氏、団長補佐：麻生　優氏）によって実施された第 2 地点において、概要報告書では歴史時代の所産であるとされた土坑 2 基が検出されていた（樋口・麻生 1968）。概要報告書に掲載された形状などからは掘立柱建物跡の一部である可能性が高いのではないかと考える（第 12 図）。また、1972・73（昭和 47・48）年に久保常晴氏の指導のもと高津図書館友の会郷土史研究部が調査した第 5 地点においても、今回の調査で検出した溝状遺構と類似する溝が確認されていたことが判明



第 12 図　十三菩提遺跡第 2 地点検出遺構

した（持田・東原・北原 1973）。第5地点検出の溝状遺構は、北へと延びる溝が西へとほぼ直角に曲がる様相が確認されており、溝上面が広く、底面が狭い形状であることが図面から確認できることから、断面逆台形状を呈していたと考えられる（第13図）。

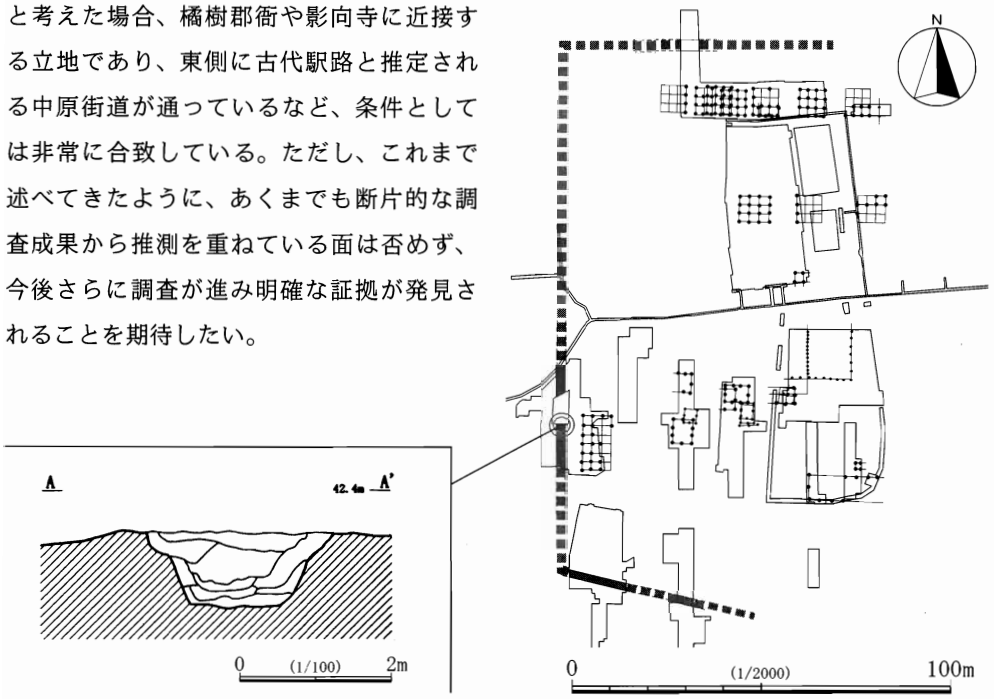


第13図　十三菩提遺跡第5地点検出の溝状遺構

過去の調査を再検討したところ、上記のように、十三菩提遺跡において断面形が逆台形状を呈する溝状遺構が広い範囲に存在していることが明らかになるとともに、掘立柱建物跡が存在していた可能性も推定されたことから、各地点で検出された溝状遺構の位置関係を確認してみた(第11図)。この位置関係図からは、第9地点・第10地点で確認された溝状遺構をそのまま北へと延ばしていくと第5地点で確認された溝状遺構とほぼ重なる状況を明らかにできた。第5地点と第9・10地点の間では発掘調査事例がないため推測の域は出ないが、両地点の溝状遺構を同一遺構として捉えれば、十三菩提遺跡東側に1辺約100mで南北端が直角に曲がる方形の区画が存在していた可能性が浮かんできた。また、第8地点で検出した溝状遺構はこの方形区画（推定）の外側に位置することになるが、その形状は極めて類似していることから、方形区画（推定）と何らかの関係を有する溝である可能性が考えられる。

十三菩提遺跡で検出された溝状遺構と類似する遺構として、橘樹郡衙である千年伊勢山台遺跡から検出されている古代橘樹郡衙に関連する区画溝が挙げられる（第14図）。橘樹郡衙の発掘調査は確認調査のため限られた範囲での調査であったが、確認された溝状遺構は断面形が逆台形を呈し、遺物がほとんど出土しない等特徴も非常に類似している。このように、十三菩提遺跡で発見された溝状遺構が橘樹郡衙で確認されている区画溝と類似していることから、橘樹郡衙におけるそれと同じく官衙的な施設を区画した溝の一部である可能性が想定される。そして、官衙的な施設を区画した溝であると想定した場合、それに比定できる施設として最も考えられるものが小高駅家である。従来、小高駅家は現在に残る地名などから川崎市高津区新作小高台や川崎市中原区上小田中・下小田中がその比定地として挙げられてきた。しかし、前者が古代駅路の推定線からやや外れており駅家としての機能を果たすのが難しい上に、過去に小学校建設に伴う大規模な発掘調査（新作小高台遺跡）を実施したものの関連する遺構が全く検出されなかったこと、後者が古代の駅路とも推定される中原街道が通っているが、橘樹郡衙などからは離れすぎており、古代における地方官衙の設置状況とは大きく異なることなどから、近年では両説に疑問が呈され始めていた。もし十三菩提遺跡の方形区画（推定）を小高駅である

と考えた場合、橘樹郡衙や影向寺に近接する立地であり、東側に古代駅路と推定される中原街道が通っているなど、条件としては非常に合致している。ただし、これまで述べてきたように、あくまでも断片的な調査成果から推測を重ねている面は否めず、今後さらに調査が進み明確な証拠が発見されることを期待したい。



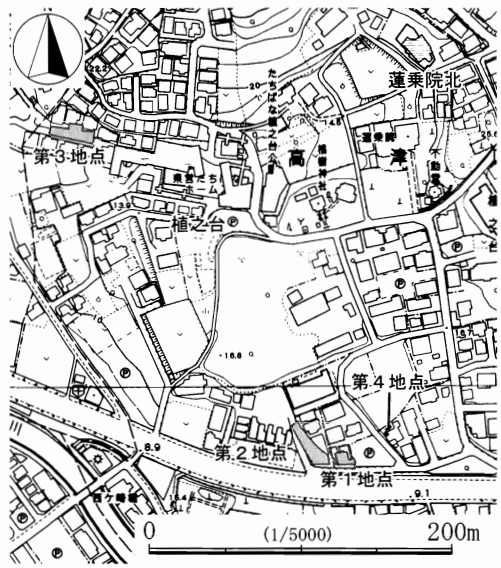
第 14 図　橘樹郡衙検出の溝状遺構

4. 子母口植之台遺跡における調査成果からの検討－橘樹郡衙との関係－

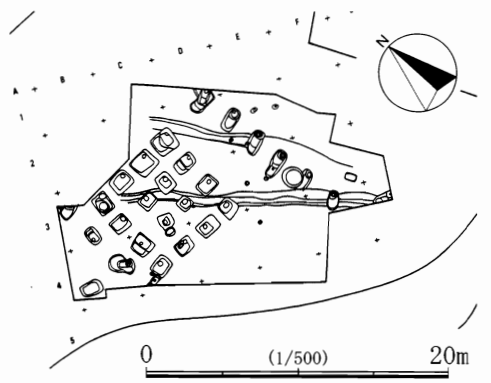
川崎市高津区子母口に所在する子母口植之台遺跡 (註3)は橘樹郡衙から南東側約 700 m、影向寺から南東側約 1,000 mの場所に位置し（第 15 図）、子母口植之台遺跡という名称で 4 回、植之台遺跡として 1 回、蓮乗院北遺跡として 1 回の合計 6 回の発掘調査が実施されている（浅川・牧野・河合・中山 1993、浅川・河合・小山・福田 1998、戸田・小山・赤間 1998、栗田・藤田 2009、浅川・呉地ほか 1990、浅川・河合ほか 1987）。遺物には畿内系土師器が多く見られるとともに、瓦塔片も採集されている（吉野 2003）。子母口植之台遺跡の性格を語る上で最も注目される遺跡が蓮乗院北遺跡であり、北側丘陵上に所在する橘樹郡衙正倉とほぼ同規模の総柱式掘立柱建物跡（倉庫跡）等が検出され（第 16 図）、この遺跡が一般的な集落跡とは異なる性格を有していたことを明らかにした。また、子母口植之台遺跡第 3 地点及び植之台遺跡では谷戸に接した中世～近世にかけての遺構群が確認されており、古代に属する遺構は検出されなかったがこの遺跡の旧地形について貴重な知見を得ることができた。さらに、子母口植之台遺跡内で実施したその他の発掘調査及び試掘調査等から、かつては幾筋かの小規模な谷状地形が存在していたことも明らかになってきた（第 17 図）。筆者は、上記の調査などにおける成果を基に子母口植之台遺跡をいくつかの小地区に分けてその性格を考えたことがある（栗田 2009）。それは、

本遺跡北側で谷戸内における湿地状もしくは小川といった場所であった可能性が推測されるA地区、本遺跡北東側で谷戸状地形の最奥部に位置し、掘立柱建物で構成された倉庫域であった可能性が高いB地区、本遺跡南側で竪穴住居跡が検出されており、集落域であったと想定されC地区、本遺跡中央部で南北の谷状地形で画されたD地区となる。D地区は地区の性格を把握するまでには至っていないが、川崎市教育委員会の試掘調査で当該期と想定される大型掘立柱建物の柱穴が検出されていることから、本遺跡を地盤とする有力者の居住地やB地区から続く倉庫域であった可能性を想定している（第18図）。

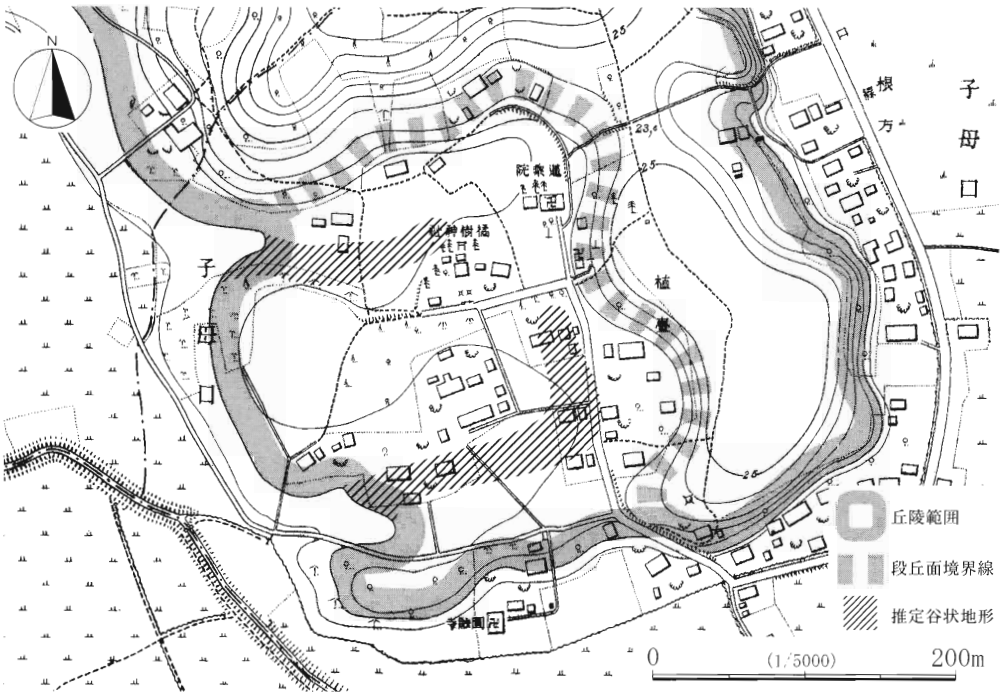
近年の調査成果などから、郡衙・初期寺院といった官衙域は人や物資の移動・運搬を容易にするため、幹線道や津（川津・港津）という水陸両交通路を活かせる場所に隣接していたと想定されているが（田尾1999・2006、松井2006）、子母口植之台遺跡も北方約700m付近に橘樹郡衙が所在するとともに、郡衙と本遺跡とのほぼ中間には古代駅路と推定される中原街道が通り、南側及び西側には矢上川とその左岸に広がる低地部が広がるなど、古代官衙等に隣接する交通の要衝に立地している。特に、矢上川左岸の低地部はA地区の谷状地形へとつながっていく様相が想定され、当該期においてA地区近くまで舟による移動が可能な状態であったと考えれば、ここが人や物資などの運搬を行う「川津」としての機能を有していた可能性も考えられる。A地区を「津」であると考えると、B地区で確認されている倉庫群の位置づけが問題となってくることになるが、現状では資料に乏しく、論じることは困難であろう。ただし、さらに推測を重ねさせてもらえれば、前述したように、幹線道や津といった地域における交通の要所に隣接して郡衙・初期寺院といった古代官衙が設置された様相が明らかになってきていることを考慮すれば、A地区が橘樹郡衙の人や物資の移動・運搬場所としての「川津」、B地区が橘樹郡衙の出先機関としての物資一時貯蔵施設（正倉別院など）であったと考えることもできよう。



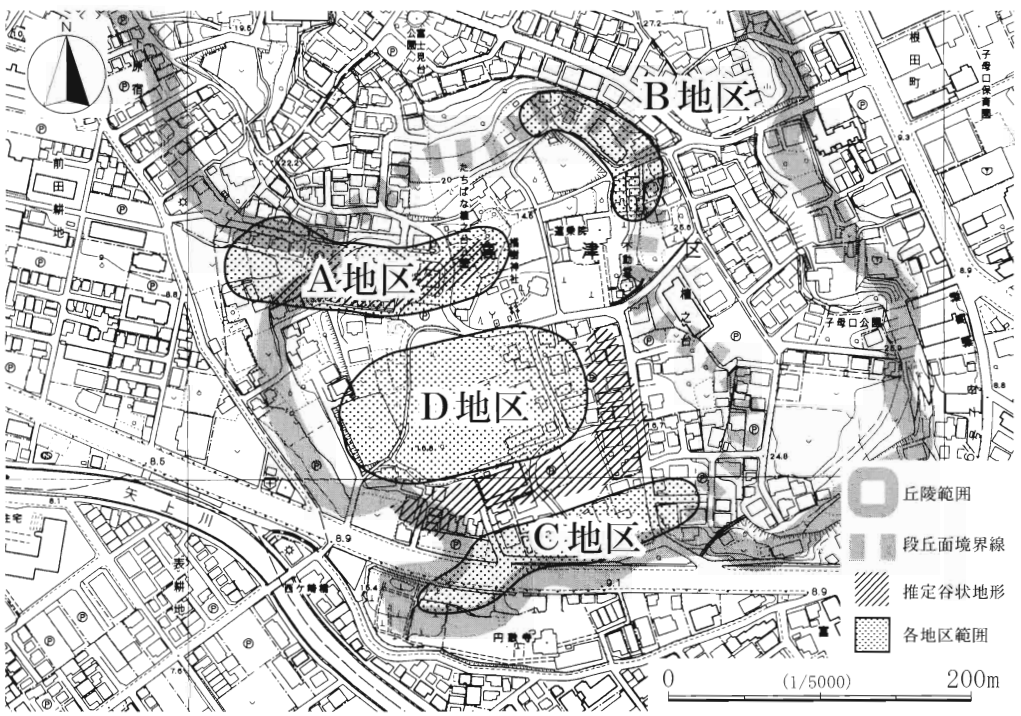
第15図　子母口植之台遺跡の調査地点



第16図　蓮乗院北遺跡



第 17 図　子母口植之台遺跡の旧地形

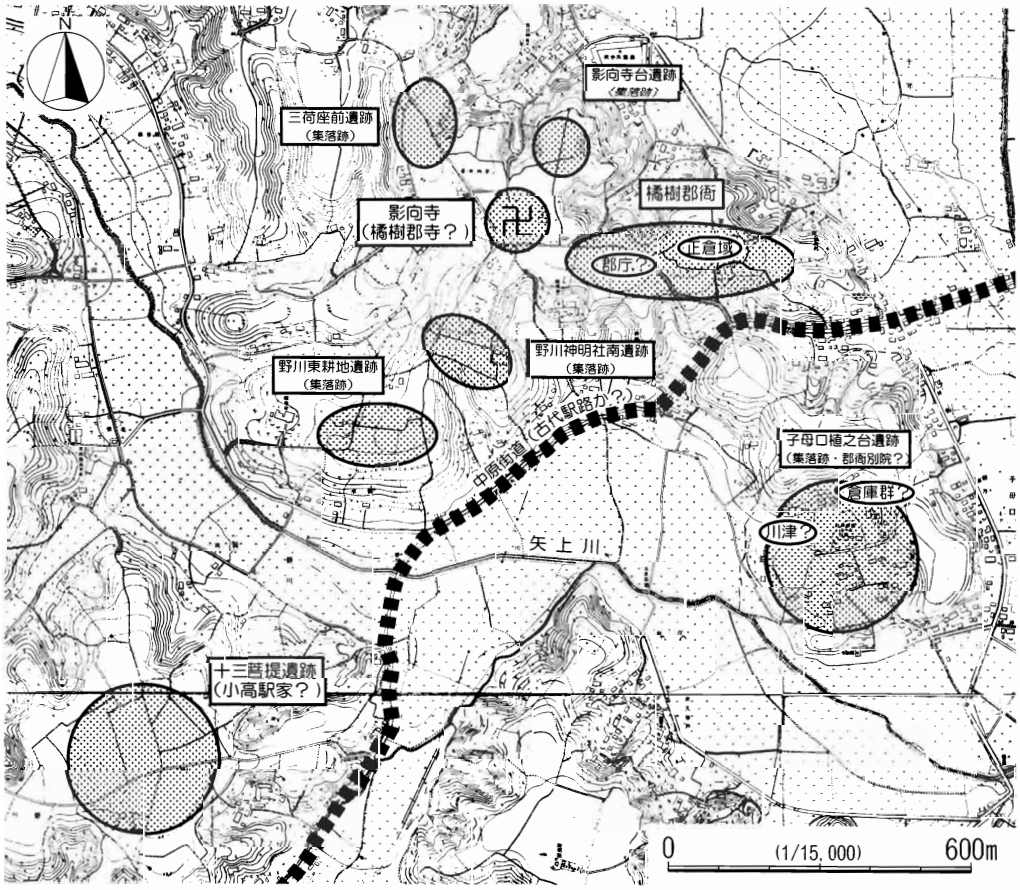


第 18 図　子母口植之台遺跡の各地区

おわりに

ここまで、橘樹郡衙及びその周辺における調査事例・成果を紹介するとともに、十三菩提遺跡発見の溝状遺構が古代小高駅家である可能性を考え、また子母口植之台遺跡が橘樹郡衙の正倉別院や川津ではないかと推測してみた。そこで、橘樹郡衙とその周辺における関連遺跡の位置関係から古代の景観を想定したものが第19図である。ここでは、橘樹郡衙周辺丘陵上に古代橘樹郡の中核となる施設が見事に展開している様相が見える。駅路に沿った丘陵上に小高駅家、古代寺院である影向寺、そして橘樹郡衙を望み、また矢上川を使った水上交通のための川津やそれに伴う保管施設としての倉庫群やおそらくそこで働く人々が生活したであろういくつかの集落を眺める、当時駅路を歩いて橘樹郡に来た人々はこのような光景を見たのではないかと想像してみると、古代橘樹郡の中心地としてのこの地域をより理解していくことができるだろう。

最後に、本稿では橘樹郡衙及びその周辺における調査成果を最大限利用して論じてきたもの



第19図　橘樹郡衙とその周辺における古代の景観

の、調査成果自体非常に限定的なものが多く、推測に推測を重ねてしまった部分が多いと筆者自身反省している。しかし、橘樹郡衙の調査・研究が本格的にスタートして約20年、最初は点としてしか捉えられなかった遺跡がようやく面的に広がりをもったものとして捉えることが可能な段階になってきたとの思いが強い。発掘調査等で得られた情報をしっかりと認識していくことが中心であったこれまでの橘樹郡衙の研究が、今まで蓄積された成果を基に、いよいよ考察や解釈を加えていき歴史の復元を試みていく段階に入ってきたと考える。当然、全ての基本となる地道な調査・検討がなされていてこそではあるが、今後も橘樹郡衙について様々な角度から検討し、橘樹郡衙の正しい姿を明らかにしていく努力をしていきたい。

末筆になりましたが、本稿をまとめるにあたって、発掘調査の事実確認について貴重なご教示をいただくとともに、図の掲載について快く了承をいただきました相原俊夫、碓井三子、大坪宣雄、河合英夫、小池聡の各氏、挿図作成などで多大なご協力をいただいた藤田征史氏に、心から感謝申し上げる次第です。

なお、本稿3は『十三菩提遺跡第8地点』、本稿4は『子母口植之台遺跡第4地点』において筆者が報告した内容について再考したものである。

註

(1) 橘樹郡衙については、郡衙発見以前に統一的な遺跡名称がなく混乱が生じていたことから、川崎市教育委員会は橘樹郡衙推定地確認調査事業の実施に際して遺跡名を「千年伊勢山台遺跡」とした。本稿は橘樹郡衙について検討したことから、より分かりやすいように千年伊勢山台遺跡については全て橘樹郡衙と表記した。

(2) 影向寺境内及びその周辺においては古くから数多くの発掘調査が実施されてきたが、統一的な遺跡名称がなく調査・研究に際し混乱が生じていたことから、川崎市教育委員会が「影向寺遺跡」と名称を統一し、過去からの調査順に第1～12次調査とした。

(3) 川崎市高津区子母口植之台地区では過去に数回発掘調査が実施されているが、統一的な遺跡名称がなく混乱を生じていたことから、川崎市教育委員会が遺跡名を「子母口植之台遺跡」とした。ただし、すでに遺跡名のあった「蓮乗院北遺跡」「植之台遺跡」については、この名称が定着しており、名称の変更によりさらなる混乱をもたらす恐れがあったことから、そのままの名称としている。本稿では、遺跡全体を示す場合には「子母口植之台遺跡」とし、個々の遺跡内容を指す場合には個々の遺跡名を用いている。

図版出典

図3・5　川崎市教育委員会2008を改変
図4　河合ほか2000を改変
図8　伊東・北村ほか1996、伊東・小林・杉本1997より転載
図11　栗田・藤田2008を改変
図12　樋口・麻生1968より転載
図14　戸田・河合ほか2005を改変
図16　浅川・河合ほか1987より転載
図17・18　栗田・藤田2009より転載
図19　栗田・藤田2009を改変

引用・参考文献

浅川利一・河合英夫ほか　1987　『川崎市高津区蓮乗院北遺跡埋蔵文化財調査概要』　蓮乗院北遺跡発掘調査団
浅川利一・河合英夫・小山裕之・福田　良　1999　「川崎市高津区子母口植之台遺跡第２地点発掘調査報告

書」『川崎市文化財調査集録』第34集　川崎市教育委員会
浅川利一・河合英夫・福田　良　1997「川崎市宮前区影向寺台遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第33集　川崎市教育委員会
浅川利一・呉地英夫ほか　1990『川崎市高津区植之台遺跡発掘調査報告書』植之台遺跡発掘調査団
浅川利一・牧野健一・河合英夫・中山　良　1994「川崎市高津区子母口植之台遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第29集　川崎市教育委員会
伊東秀吉・大坪宣雄ほか　1986『川崎市宮前区影向寺遺跡－第2次発掘調査報告書－』影向寺遺跡第2次発掘調査団
伊東秀吉・大坪宣雄ほか　1994『川崎市宮前区野川東耕地遺跡発掘調査報告書』野川東耕地遺跡調査団
伊東秀吉・大坪宣雄ほか　1996「川崎市高津区伊勢山台東遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第32集　川崎市教育委員会
伊東秀吉・北村尚子ほか　1996『川崎市高津区三荷座前遺跡第1地点発掘調査報告書』三荷座前遺跡発掘調査団
伊東秀吉・小林克利・杉本靖子　1997『川崎市高津区三荷座前遺跡第2地点発掘調査報告書』三荷座前遺跡発掘調査団
伊東秀吉・竹石健二・鈴木　亘ほか　1982『川崎市高津区野川影向寺文化財総合調査』川崎市教育委員会
伊東秀吉・横山太郎　1998「川崎市宮前区久末－9遺跡（f地点）発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第34集　川崎市教育委員会
岩崎卓也　1958「川崎市野川十三菩提の遺跡」『史潮』第64・65合併号　大塚史学会
大坪宣雄・渡辺昭一　2006「川崎市宮前区三荷座前遺跡第4地点発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』第41集　川崎市教育委員会
大坪宣雄・渡辺昭一　2008『十三菩提遺跡第9地点発掘調査概要報告書』有限会社吾妻考古学研究所
岡部町教育委員会文化財保護室　2002『古代の役所－武蔵国榛沢郡家の発掘調査から－』岡部町教育委員会
神奈川県考古学会　2006『平成18年度考古学講座　古代遺跡再発見』
河合英夫　1997「川崎市橘樹郡衙関連遺跡の調査」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
河合英夫　2000「川崎市影向寺址」『かながわの古代寺院』神奈川県考古学会
河合英夫　2001「影向寺址をめぐる問題」『神奈川の古代寺院　研究の成果と課題』神奈川県考古学会
河合英夫　2002「影向寺址考」『多摩考古』第32号　多摩考古学研究会
河合英夫　2003「古代の役所を掘る－武蔵国橘樹郡衙推定地の発掘調査－」『古代を考えるⅠ　郡の役所と寺院』川崎市市民ミュージアム
河合英夫　2006「（調査報告）ここまでわかった橘樹郡衙－調査成果と課題－」『シンポジウム古代の川崎市役所を発掘する－橘樹郡衙推定地の調査成果と歴史的意義－発表要旨』川崎市教育委員会
河合英夫・伊東甚吉　2008「川崎市高津区影向寺遺跡第11次発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第43集　川崎市教育委員会
河合英夫ほか　2000『川崎市千年伊勢山台北遺跡調査報告書』千年伊勢山台北遺跡調査団
川崎市　1988『川崎市史』資料編1（考古・文献　美術工芸）
川崎市教育委員会　2002『川崎の遺跡』
川崎市教育委員会　2007『シンポジウム古代の川崎市役所を発掘する－橘樹郡衙推定地の調査成果と歴史的意義－記録集』
川崎市教育委員会　2008『武蔵国橘樹郡衙推定地千年伊勢山台遺跡第9・10・11次－川崎市高津区千年におけるガス管敷設工事及び緑地整備に伴う確認調査報告－』
菅野和郎　1996「川崎市十三菩提遺跡の土器－川崎市市民ミュージアム所蔵資料の紹介－」『川崎市市民ミュージアム紀要』第8集　川崎市市民ミュージアム
北平朗久　2004「川崎市高津区影向寺台遺跡第２次発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第40集　川崎市教育委員会
久保常晴・大三輪龍彦　1975『川崎市高津区影向寺遺跡発掘調査概報』川崎市教育委員会
小池　聡　2008『野川神明社南遺跡発掘調査概報』株式会社盤古堂
小池　聡・粕谷　隆　2002『三荷座前遺跡第3地点発掘調査概要報告書』三荷座前遺跡第3地点発掘調査団
田尾誠敏　2006「高座郡家と下寺尾廃寺をめぐる古代相模国の様相」『市民講座「茅ヶ崎市下寺尾地区の遺跡群について」』神奈川県教育委員会教育局生涯学習文化財課・茅ヶ崎市教育委員会生涯学習課
竹石健二・澤田大多郎　1993「川崎市宮前区影向寺北遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第29集　川崎市教育委員会
竹石健二・澤田大多郎　2009「川崎市影向寺境内（4）遺跡発掘調査報告－薬師堂西－」『竹石健二先生・

澤田大多郎先生古希記念論文集』 竹石健二先生・澤田大多郎先生の古希を祝う会
竹石健二・澤田大多郎・日本大学先史学研究会　2009 「川崎市宮前区野川神明社遺跡発掘調査報告」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』 竹石健二先生・澤田大多郎先生の古希を祝う会
竹石健二・澤田大多郎・野中和夫　1984 「影向寺周辺遺跡発掘調査報告書―三浦邸・宮澤邸に関わる調査―」『川崎市文化財調査集録』第 20 集　川崎市教育委員会
竹石健二・野中和夫　1983 「千年伊勢山台遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財調査集録』第 19 集　川崎市教育委員会
竹石健二・原　廣志　2002 「影向寺境内出土の「无射志国荏原評」銘瓦について」『川崎市文化財調査集録』 第 37 集　川崎市教育委員会
竹石健二・村田文夫ほか　1989 『影向寺薬師堂保存修理工事報告書〔基壇部記録調査編〕』 影向寺
出浦　崇　2007 『三軒屋遺跡Ⅰ－上野国佐位郡衙正倉跡の調査－』 伊勢崎市教育委員会文化財保護課
戸田哲也・河合英夫ほか　2000 『川崎市高津区千年伊勢山台北遺跡調査報告書』 千年伊勢山台北遺跡調査団
戸田哲也・河合英夫ほか　2004a 『武蔵国橘樹郡衙推定地千年伊勢山台遺跡―第 7 次発掘調査報告書―』 川崎市教育委員会
戸田哲也・河合英夫ほか　2004b 『武蔵国橘樹郡衙推定地千年伊勢山台遺跡―第 8 次発掘調査報告書―』 川崎市教育委員会
戸田哲也･河合英夫ほか　2005 『武蔵国橘樹郡衙推定地千年伊勢山台遺跡―第 1 ～ 8 次発掘調査報告書―』 川崎市教育委員会
戸田哲也･河合英夫ほか　2007 『川崎市宮前区影向寺遺跡第 12 次調査発掘調査報告書』 宗教法人影向寺･玉川文化財研究所
戸田哲也・小山裕之・赤間和重　1998 『川崎市子母口植之台遺跡埋蔵文化財発掘調査概要』 子母口植之台遺跡発掘調査団
鳥羽政之　1995 『中宿遺跡－推定・榛沢郡正倉跡の調査－』 岡部町遺跡調査会
鳥羽政之　1997 『中宿遺跡Ⅱ－推定・榛沢郡正倉跡の調査－』 岡部町遺跡調査会
中島広顕　2000 「武蔵国豊島郡衙の正倉－御殿前遺跡－」『郡衙正倉の成立と変遷』 奈良国立文化財研究所
樋口清之・麻生　優　1968 『野川南台団地埋蔵文化財調査報告―十三菩提遺跡―』 野川南台団地埋蔵文化財調査団
樋口清之・麻生　優　1971 「十三菩提遺跡」『埋蔵文化財調査報告』2　神奈川県教育委員会
藤枝市教育委員会・藤枝市郷土博物館管理課編　1993 『復原され奈良・平安時代の郡役所　駿河国『志太郡衙跡』－史跡志太郡衙跡保存整備事業報告書－』
古江亮仁　1968 「先史時代及び古代」『川崎市史』 川崎市
松井一明　2006 「官衙の地域色と集落」『静岡県考古学会 2005（平成 17）年度シンポジウム　古代の役所と寺院』 静岡県考古学会
三輪善之助　1922 「影向寺域発見瓦」『考古学雑誌』第 13 巻第 2 号　日本考古学会
村田文夫　2001 「影向寺址に関する発表へのコメント」『かながわの古代寺院　研究の成果と課題』 神奈川県考古学会
村田文夫　2007 「武蔵国橘樹郡衙の郡庁域に関する一考察」『東国史論』第 21 号　群馬考古学研究会
持田春吉・東原信行・北原勝司　1973 『川崎市野川十三菩提小松原遺跡発掘調査概報』 高津区図書館友の会郷土史研究部
吉野真由美　2003 「川崎市高津区千年―1 遺跡採集の瓦塔について」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 16 集　川崎市市民ミュージアム

横浜考古学研究会とその会員

岡本孝之

はじめに
1. 活動歴
2. 石田武雄と清水裕
3. 池田健夫
4. 尾形順一郎と松下胤信
5. 斎藤房太郎
6. 高橋正人
まとめ

はじめに

1920～30年代（昭和初期）に横浜で考古学活動を活発におこなった横浜考古学研究会について、今はどれだけの人が知っているのであろうか。今、横浜を冠する考古学研究会は存在しない。横浜に住む私にとって、まだ全貌を知りえないが、活動の様子と会員についてまとめておきたいと思う。『丘の上』という会誌を15号まで1928年から1937年までの間に刊行しているが、13号と14号は未刊で欠号となる。神奈川県立図書館には第15号だけが納本されていた。

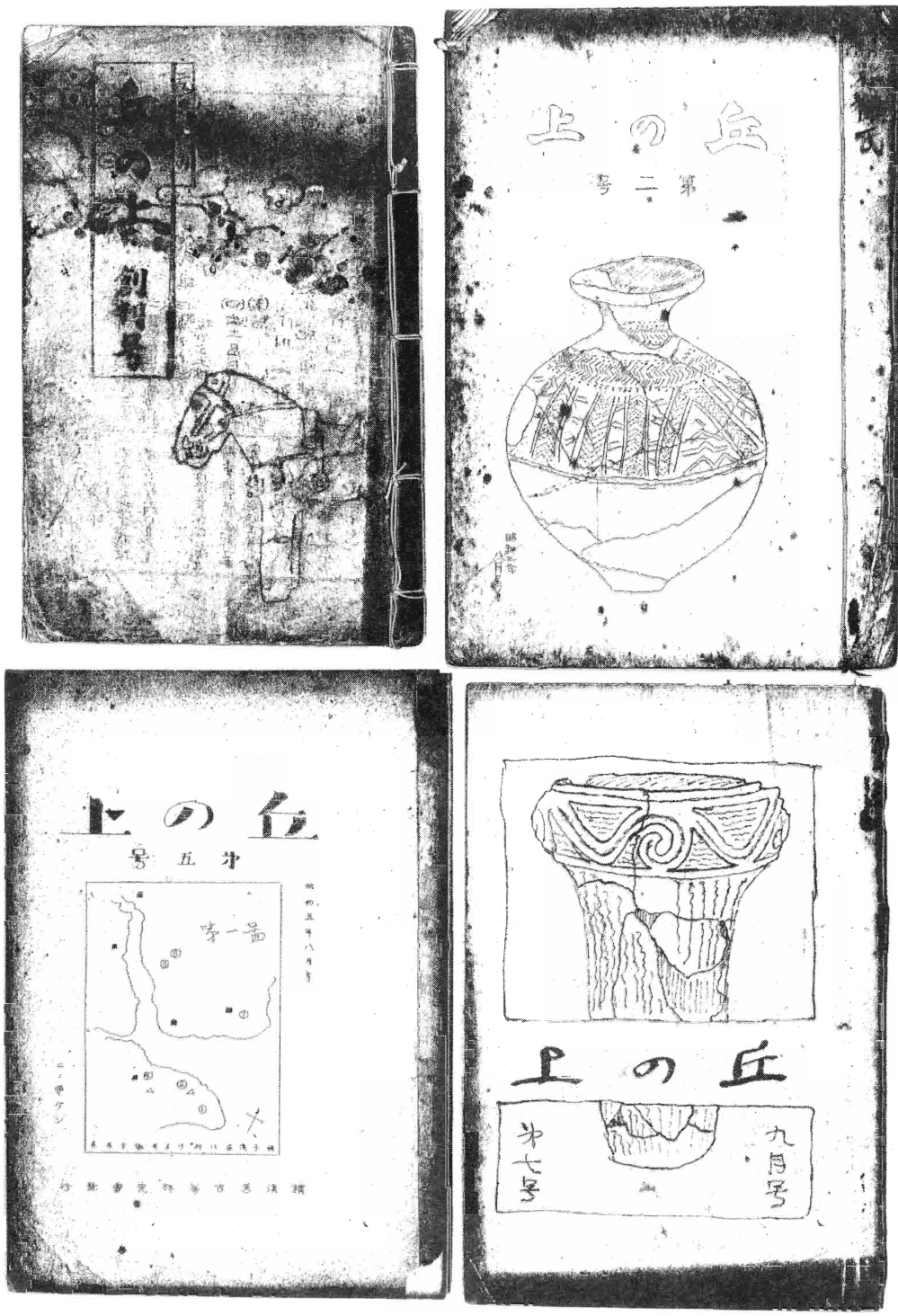
今回の検討に際しては、会員の清水裕氏の遺族が神奈川県立博物館に寄贈した資料群（神奈川県立博物館1977）の複写を活用した。しかし『丘の上』の3・4・6・11・12号は未見である。6号と11・12号は酒詰仲男氏らの引用文献に出てくる。会誌発行の中心的役割を担った池田健夫氏も2006年に亡くなり、独立行政法人東京国立博物館に資料が寄贈されたという。以下、敬称を省略する。

1. 活動歴（第1・2図、第1・2表）

活動歴を第1表のようにまとめてみた。関東学院の中学生（現在の高校生）を中心に結成された組織で機関誌『丘の上』（第1・2図）を刊行した。

関東学院における考古学活動には講師として指導した石野瑛の役割があり、第一世代の石田武雄、清水裕らがいて、石田らは微古会を組織していたし、武相考古会にも入会していた。神奈川第二中学校には教員として谷川磐雄や石野瑛がいて学生考古会も組織されていたが（大場1975）、まだ相互の連絡はなかったようである。

石田や清水は、弘明寺瓦を出土し、土師器の製作遺跡として知られた南区永田の東台遺跡の調査を始めた人物として石野瑛の報文に出てくる（石野1927、岡本ほか2001）。東台遺跡は弥生時代中期後半～後期の遺跡としても知られ、後に斎藤房太郎が森本六爾を案内し、採集土器



第1図　『丘の上』表紙　創刊号、2号、5号、7号

第2図 『丘の上』表紙　8号、9号、10号、15号

第1表　横浜考古学研究会のあゆみ

1922年	大正11年ごろ			石田武雄、森大塚踏査
1923年		春		微古会結成　石田武雄、古田新一郎、中山晋、本貞和夫、中山昇三、益川肇
				石田・古田、武相考古会に入会
				仏向貝塚、大曽根の横穴調査
1925年	大正14年	2月	11日	石田・清水、根岸坂ノ台踏査
1926年	大正15年	2月	末	根岸坂ノ台へ教練　石斧など採集（戸根木亀之助配属将校・清水裕）
		12月	24日	東台製陶所遺跡の調査（清水裕）
		12月	25日	東台製陶所遺跡の調査（清水裕・石田武雄）
		12月	26日	東台製陶所遺跡の調査（清水裕・石田武雄と石野瑛）
1927年	昭和2年	1月	10日	石野瑛「大岡川村永田は古代の製陶所」貿易新聞に発表
		2月	末	池田健夫、戸根木と話す
		4月	末	戸根木、池田に研究会結成を提案
		夏期休暇		池田、八王子史談会の展覧会を見学　木下止好、小松茂盛、安西英夫を知る
		7月	下旬	池田、戸根木、久保田誠吾、伊沢南海男ら、八王子史談会の木下止好訪問
		9月	20日	横浜考古学研究会創立　戸根木を会長とする、関東学院の同好者8名
		11月		第1回遠足　弘明寺在六ッ川の貝塚　10名参加
1928年	昭和3年	1月	18日	先輩石田武雄入会（戸根木会長紹介）
		1月		会員29名
		1月	末	根岸坂の台貝塚（第2回遠足か）　中川一郎、池田に手ほどき
		2月	13日	先輩清水裕入会（石田紹介）
		3月	16日	『丘の上』創刊号30ｐ刊行
		5月	7日	清水、根岸加層の新井氏宅五輪塔など調査
		6月		『丘の上』第2号刊行予定とするが池田が病気のため1ヵ月半休み延期となる
		7月	29日	戸根木大尉の送別会を戸根木宅にて開催
		8月	10日	戸根木、連隊に復帰
		8月	10日	『丘の上』第2号31ｐ刊行
		11月		藤森栄一入会（戸根木紹介）
		秋		関東学院理工部にて展覧会を予定
1929年	昭和4年	1月	3日	尾形順一郎（横浜史料係）入会、松下胤信入会（尾形紹介）
		2月		『丘の上』第3号刊行
		6月	3日	高橋正人（慶応大学医学士）入会
		8月		『丘の上』第4号刊行
1930年	昭和5年	4月	2日	八幡一郎入会
		8月		『丘の上』第5号40ｐ刊行
		11月	5日	桜ヶ丘貝塚第1回発掘（池田1931）
		11月	9日	桜ヶ丘貝塚第2回発掘（池田1931）
		12月	20日	桜ヶ丘貝塚第3回発掘（池田1931）
1931年	昭和6年	1月	17日	桜ヶ丘貝塚第4回発掘（池田1931Ｂ）
		1月	24日	桜ヶ丘貝塚第5回発掘（池田1931Ｂ）
		4月	3日	桜ヶ丘貝塚第6回発掘（池田1931Ｂ）
		4月		『丘の上』第6号刊行
		5月	18日	池田、橘樹考古学会の岡栄一訪問
		6月	4日	桜ヶ丘貝塚第7回発掘（池田1931Ｂ）
		8月	2日	池田、中須治五郎を訪問
		8月	4日	池田、中須と中村茂を訪問
		8月	12日	第1回陳列会の案内状30枚印刷発送
		8月	15日	第1回陳列会準備
		8月	16日	第1回遺物陳列会開催（池田宅）
			17日	第1回遺物陳列会開催（池田宅）
				高橋正人、中川一郎、中須治五郎、岡栄一、吉野清之輔、内芝正彦、
				尾形順一郎、沢野六郎、清水裕、久保田誠吾
		9月		『丘の上』第7号40ｐ刊行
		10月	30日	八幡一郎、横浜貿易新報に折本貝塚発掘の記事
		11月	2日	池田、折本貝塚発掘に参加（～4日）
		12月		『丘の上』第8号24ｐ刊行
1932年	昭和7年	7月		橘樹考古学会廃会
		10月		『丘の上』第9号18ｐ刊行
		11月	12日	池田と清水、石田宅訪問し原稿依頼
1933年	昭和8年	1月		『丘の上』第10号34ｐ刊行
		11月		『丘の上』第11号刊行（12月か）
1934年	昭和9年	6月	21日	斎藤と稲荷山貝塚　池田は斎藤兄とする
		9月	9～16日	稲荷山貝塚発掘（横浜考古学研究会第2回発掘会）
		11月	19日	稲荷山貝塚発掘（横浜考古学研究会第2回発掘会）
1934年		12月		『丘の上』第12号刊行
1935年	昭和10年	2月	28日	森本六爾『丘の上』12受け取る（池田が送付）（『考古学』6－3編集所日記）
1937年	昭和12年	12月		『丘の上』第15号12ｐ刊行
1939年	昭和14年	1月		慶応商工学校の史学会と横浜市稲荷山貝塚を発掘予定（『貝塚』6）

第２表 『丘の上』目次

第１号 1928年３月	30p		第１号目次
			本誌発行に付ての会則の一部
		池田健夫	巻頭言
	1	石田武雄	東台製陶所に就て
	25	中川一郎	紀元節に因で
	28	池田健夫	石器時代に於ける東西文化
	30	中川一郎	切抜帳より
		戸根木亀之助・池田健夫	編輯報告
第２号 1928年８月	31p		第２号目次
	1	石田武雄	称名寺を中心とした一地域の有する史的価値の概要
	15	石田武雄	東台遺跡出土品（見取図）
	20	久保田誠吾	大略打製石斧の形状
	22	戸根木亀之助	東台遺跡出土品（見取図）其の二
	25	清水裕	根岸加層出土の五輪塔と板碑
			最近乃ニュース
			会員名簿
		池田健夫	第２号編輯報告
第５号 1930年８月	40p		目次
			「告」
	1	高橋正人	上沼部貝塚（其二）
	23	松下胤信	帷子渓谷に於ける貝塚の研究
			史蹟と名勝を訪ねて　其の一
	34	清水裕	市場の一里塚
	36		宿題　土偶並びに人面把手に就て
		池田健夫	編輯後記
		池田健夫	本会の歴史
			「おわび」
第６号 1931年４月		池田健夫	桜ケ丘出土の大諸磯式土器
		石田武雄	「東台製陶所遺跡に就て」（再録）
第７号 1931年９月	40p		表紙説明
	1	高橋正人	東山竪穴群に属する一遺跡の報告　其一
	18	池田健夫	桜ケ丘貝塚
	29	清水裕	桜ケ丘貝塚に就て
	36		小記
	38		編輯後記
第８号 1931年12月	24p		表紙説明
			目次
			編輯後記
	1	高橋正人	神奈川県橘樹郡日吉村日吉台に４箇所の小貝塚を発見す
		高橋正人	新郷貝塚を掘る（其一）
	15	池田健夫	折本貝塚を掘る（其一）
	22	清水裕	「丘の上」所感
第９号 1932年10月	18p		表紙説明
			目次
			橘樹考古学会並に同会誌の廃会廃刊を惜しむ
	1	高橋正人	北海道石狩国小樽市富岡町より出土せる石器時代遺物に就て
	11	中村茂	土器石器保存法一考
	14	池田健夫	折本貝塚を掘る（其二）諸磯式第三号・土器
			編輯後記
第10号 1933年１月	34p	「丘の上」生	霞ケ丘に捧ぐ
			お願い
	1	石田武雄	「丘の上」の５周年を迎えて（微古会の追想）
	6	清水裕	私の考古学入門
	9	高橋正人	新郷村東貝塚を掘る（其二）
	14	西岡秀雄	汐見台横穴群に就て
	29	池田健夫	創立満五年を迎ふ
			編輯後記
第11号 1933年11月		守田文彦	武蔵国橘樹郡旭日村上末吉貝塚出土の打製石斧に就て
第12号 1935年12月		池田健夫・斎藤房太郎・佐藤陽之助	神奈川県横浜市中区稲荷山貝塚発掘調査概報
		斎藤房太郎	文献に現はれたる武蔵久ヶ原貝塚
		池谷健治	横浜市鶴見区下末吉（旧旭村）小仙塚貝塚出土の骨角器に就て
第15号 1937年12月	12p	池田健夫 斎藤房太郎	横浜市神奈川区篠原町富士塚貝塚報告

が実測されて東京考古学会の『弥生式土器集成』（東京考古学会 1938）に掲載される。

二人は関東学院の考古学活動が第二世代（3年後輩）の池田らによって横浜考古学研究会としてまとまると、早速入会し、石田は東台の資料報告を『丘の上』第１号と第２号に載せる

（第3図）。第1号はおそらく蒟蒻版印刷によるものと思われ鮮明ではない。第6号に再び掲載されるが未見である。

池田が会を始める直接の契機には、陸軍から派遣された戸根木亀之助大尉の役割が大きい。長野県の出身らしく藤森栄一を紹介、入会させている。1930年に台湾歩兵第2連隊に移る（『丘の上』5）。1937年には愛媛県道後町に住む（関東学院橄欖会1937）。

『丘の上』の目次をまとめてみた（第2表）。15号の予告には13号は篠原貝塚、14号は桜ヶ丘貝塚の報告として計画されていたが、刊行にはいたらなかった。

池田健夫の第1号掲載の「巻頭語」を示す。

「思えば創立以来半年以上になる。それにまだ遠足十二回したきりであった。今回始めて先輩諸氏の助けによりまして、雑誌創刊号を出すことの出来ることは真に之が会の経営者として喜ばしいことである。

抑、本会は学業の余暇に於ける考古学研究の一機関であって、殊に先史時代と原史時代との人類の物質的遺物を研究し、古代風俗、習慣、工芸、宗教、文学等攻究し、これが学問を世に普及せしむことを以て我が研究会の使命とするのである。

爾来事業は何も出来なかったとは云え、常に或る何物かを求めて行くならば我々が集の将来は、決して心配ないと確く信ずるのである。で力は足らぬながらも此の如き粗末な形式の雑誌を発行したいと思います。どうぞ諸賢の奮発を望む次第であります。

－終り　昭和3年3月16日（木）－」

「本誌発行に付ての会則の一部」が第1号表紙裏に目次の下段に示されているので、これも転載する。

「本誌発行に付ての会則の一部」

一、本会の名称を横浜考古学研究会とす。

一、本会は学業余暇に於て郷土史殊に考古学を研究し、其の趣味を普及するを以て目的とす。

一、本会は研究の為遠足見学会合等を催す。

なお、中川一郎、久保田誠吾、今泉秀雄、池田健夫、勝見、若松、伊澤南海男、川上、神保が当初の会員であった。

2. 石田武雄と清水裕（第3図、写真1、第3・4・5表）

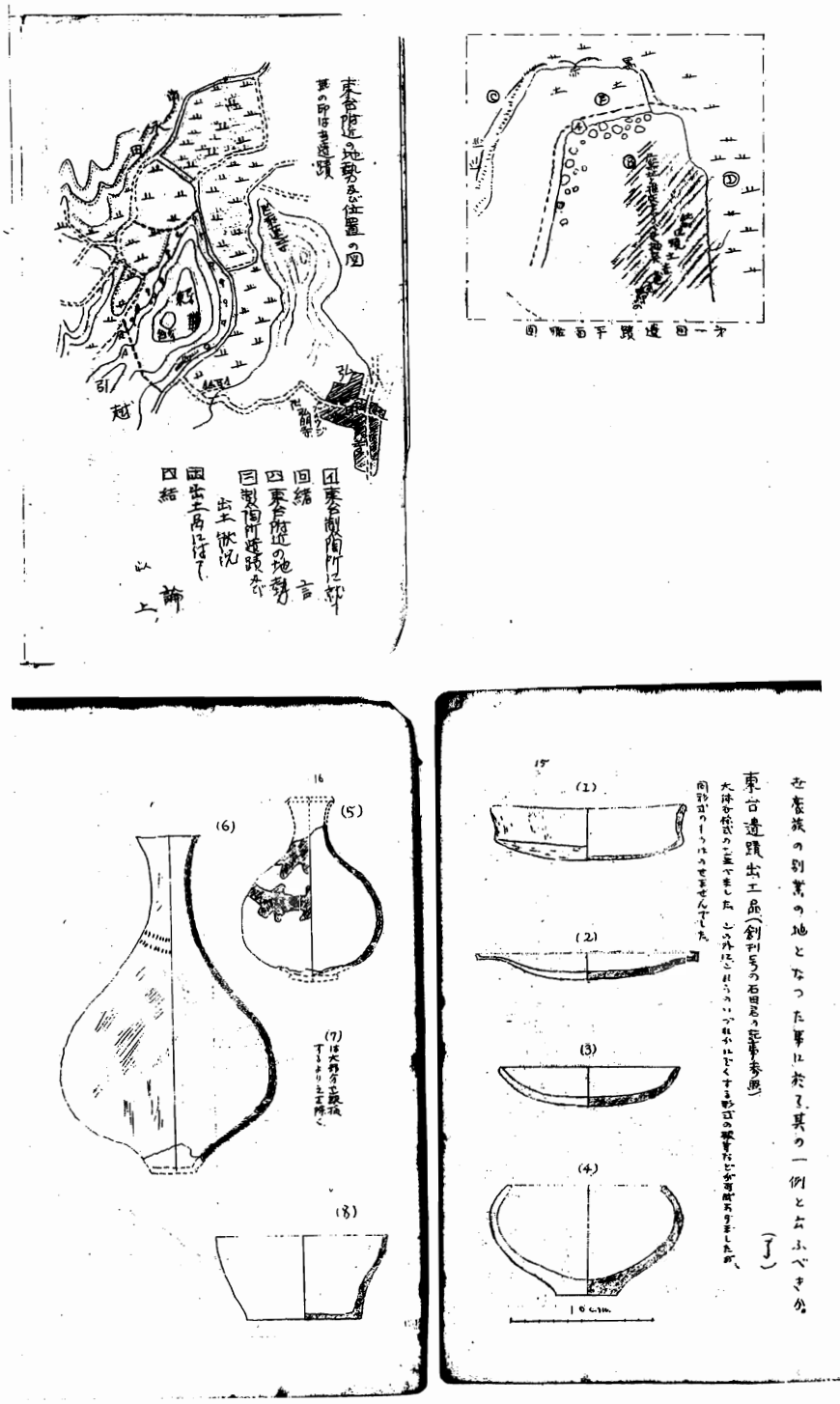
石田と清水は、1926年3月に関東学院を卒業するので1908年生まれであろう。石田は東洋大学に進学し、1937年には横浜市立吉田小学校の教員としてある（関東学院橄欖会1937）。清水は横浜市立教員養成所に進み、1928年には鶴見区豊岡小学校に勤務する。1937年には神奈川区子安小学校にいた（関東学院橄欖会1937）。東台遺跡調査は関東学院卒業直後のことであった。

第３表　石田武雄年譜

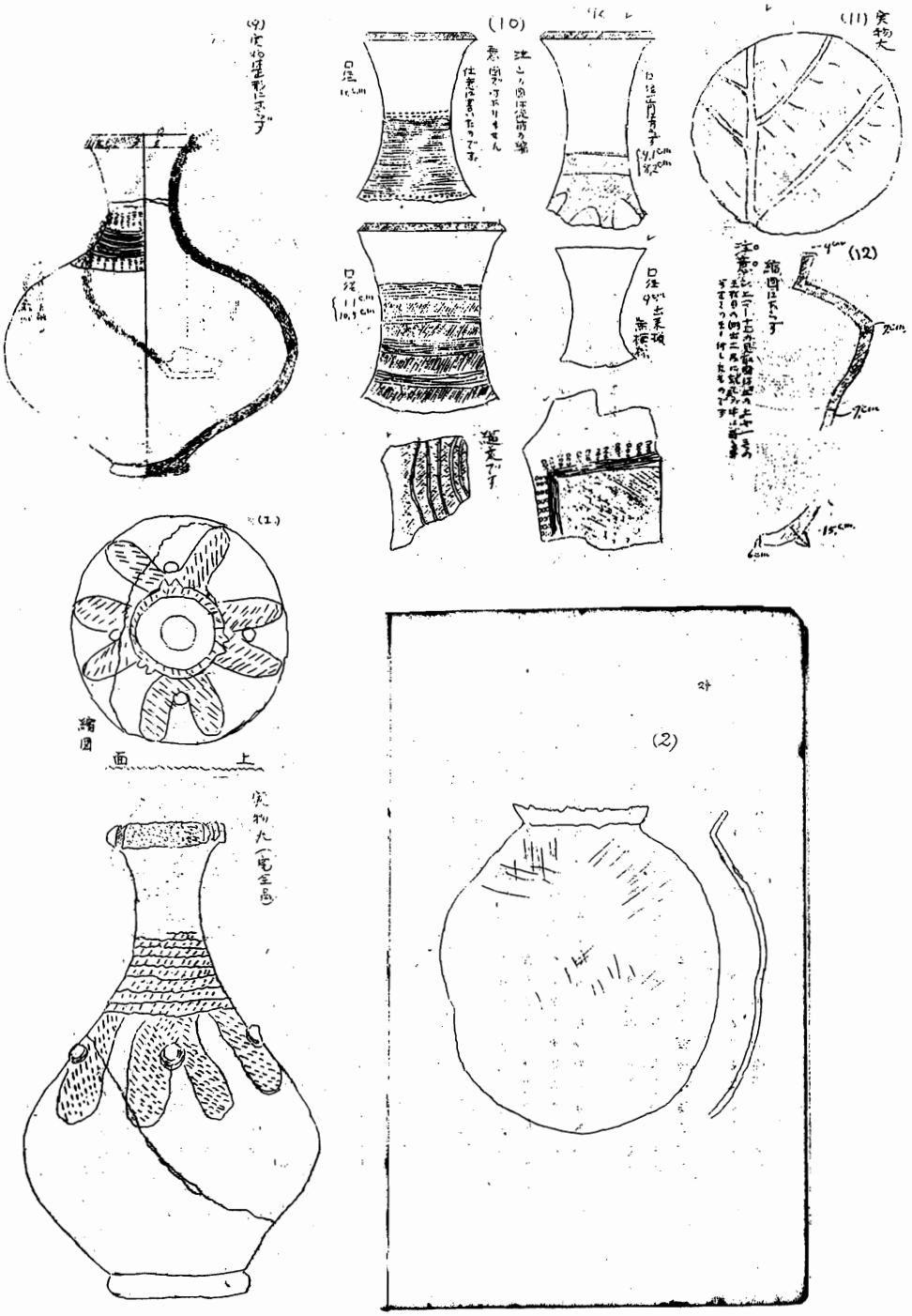
	1908 年か				誕生（池田健夫より３年上級）
14 歳	1922 年ころ	大正 11 年			森大塚踏査
15 歳	1923 年	大正 12 年	春		徴古会結成
					石田と古田　武相考古会入会
					仏向貝塚、大曽根横穴
17 歳	1925 年	大正 14 年	２月	11 日	坂ノ台貝塚踏査　清水と
18 歳	1926 年	大正 15 年	２月	末	根岸坂ノ台へ教練　石斧など収穫
			３月	１日	関東学院卒業（関東学院 1937）清水裕と同級
			４月		東洋大文科入学
			12 月	25 日	清水裕と東台調査（石野瑛 1927）
			12 月	26 日	石野と東台調査
20 歳	1928 年	昭和３年	１月	18 日	横浜考古学研究会入会
			３月	16 日	『丘の上』創刊号　「東台製陶所遺跡に就て」
			８月	10 日	『丘の上』２「称名寺を中心とした一地域の有する史的価値の概要」
					「東台遺跡出土品（見取図）」
22 歳	1930 年	昭和５年	３月		東洋大文科卒業（推定）
23 歳	1931 年	昭和６年	４月		『丘の上』６「東台製陶所遺跡に就て」（再録）
24 歳	1932 年	昭和７年	11 月	12 日	池田と清水、石田武雄訪問
25 歳	1933 年	昭和８年	１月		『丘の上』10「「丘の上」の５周年を迎えて（徴古会の追想）」
			４月	29 日	早川（中山）昇三没（明治薬専卒）（関東学院橄欖会 1937）
29 歳	1937 年	昭和７年	11 月		卒業生名簿　吉田小学校（関東学院橄欖会 1937）磯子区磯子町
39 歳	1947 年	昭和 22 年	４月	30 日	共進中学校（共進中学校 1996）
42 歳	1950 年	昭和 25 年			共進中学校副校長（『横浜市教職員録』1950）磯子区森町
49 歳	1957 年	昭和 32 年	10 月	31 日	共進中学校離任（共進中学校 1996）
53 歳	1961 年	昭和 36 年	９月	１日	共進中学校校長となる（『南区の歴史』1976 ｐ 306）
60 歳	1968 年	昭和 43 年	６月	22 日	関東学院橄欖会教員の会（於コベルホール）
			８月	31 日	共進中学校離任（『南区の歴史』1976 ｐ 306）
68 歳	1976 年	昭和 51 年			共進中学校の東台遺跡出土品（『南区の歴史』1976 ｐ 23）
76 歳	1984 年	昭和 59 年	10 月	６日	『関東学院百年史』　編集委員会の招待リストにあり

第４表　清水裕年譜

	1908 年か				誕生（池田健夫より３年上級）
					父は三河出身で瓦商人『郷土研究とよおか』（清水 1929）
17 歳	1925 年	大正 14 年	２月	11 日	坂ノ台貝塚踏査　石田と
18 歳	1926 年	大正 15 年	２月末		根岸坂ノ台へ教練　石斧など収穫
			３月	１日	関東学院卒業（関東学院橄欖会 1937）
			４月		市立教員養成所入学
			12 月	24 日	東台遺跡調査（石野瑛 1927）
			12 月	25 日	石田と東台調査（石野瑛 1927）
20 歳	1928 年	昭和３年	２月	13 日	横浜考古学研究会入会
			４月		豊岡小学校着任
			５月	７日（日）	根岸、加層台で五輪塔と板碑調査
			７月	29 日（日）	戸根木亀之助大尉送別会
			８月	10 日	『丘の上』２刊行　「加曽出土の板碑」
21 歳	1929 年	昭和４年	３月	10 日	市場の一里塚調査
					豊岡小学校（鶴見区）勤務
			３月末から４月初め		桜ヶ丘貝塚調査
			６月以降		『郷土研究とよおか』
					鶴見の郷土史をまとめる予定（清水 1929『郷土研究とよおか』）
22 歳	1930 年	昭和５年	８月		『丘の上』５刊行　「市場の一里塚」
23 歳	1931 年	昭和６年	８月	14 日	横浜考古学研究会陳列会に貸出
			８月	17 日	池田宅で陳列会見学
			９月		『丘の上』７刊行　「桜ヶ丘貝塚に就て」
			12 月		『丘の上』８刊行　「丘の上所感」
					中区翁町２丁目に住居
24 歳	1932 年	昭和７年	11 月	12 日	池田健夫とともに石田宅へ
			11 月	26 日	貝塚発掘
			11 月	27 日	原稿執筆
25 歳	1933 年	昭和８年	１月		『丘の上』10 刊行　「私の考古学入門」
26 歳	1934 年	昭和９年	11 月		日本考古学会入会か（～ 1940）考古学雑誌購読
27 歳	1935 年	昭和 10 年	３月	１日	豊岡小学校離任
29 歳	1937 年	昭和 12 年	11 月	１日	卒業生名簿　子安小学校（関東学院橄欖会 1937）中区翁町
30 歳	1938 年	昭和 15 年			1938『弥生式土器集成図録』に東台の清水裕資料を斎藤房太郎図化
37 歳	1945 年	昭和 20 年			豊田小学校勤務（豊田小学校 1991）
42 歳	1950 年	昭和 25 年			豊田小学校（『横浜市教職員録』1950）
53 歳	1961 年	昭和 36 年			三殿台発掘に参加（豊田小学校 1991）
56 歳	1964 年	昭和 39 年			豊田小学校離任（豊田小学校 1991）
60 歳	1968 年	昭和 43 年	６月	22 日	関東学院橄欖会教員の会（於コベルホール）記念写真
68 歳	1976 年	昭和 51 年	３月	５日	亡くなる　横浜市戸塚区矢部町
－	1977 年	昭和 52 年	８月		『神奈川県立博物館年報』昭和 51 年度（清水資料の寄贈記事）
－	1992 年	平成４年	７月		『郷土研究とよおか』復刻（神奈川県立図書館）



第3図　東台遺跡報告図（『丘の上』1・2、石田武雄による）



第４図　東台遺跡報告図（『丘の上』2、石田武雄、戸根木亀之助による）

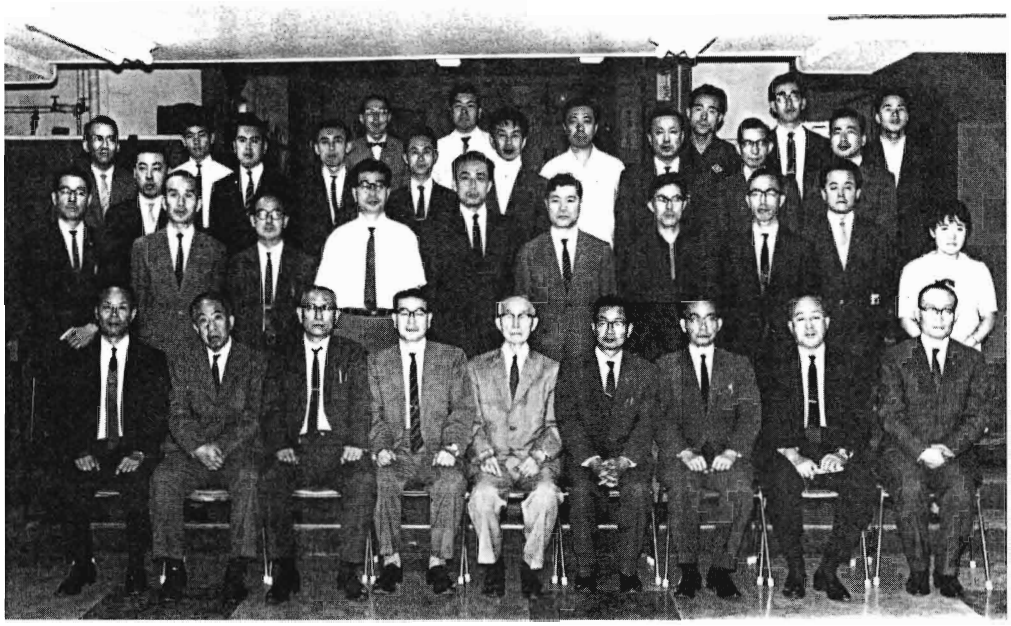


写真1　関東学院橄欖会教員の会記念写真（1968年）前列左から二人目が清水裕

第5表　清水裕寄贈資料

10	横浜市中区	元町増徳院裏山貝塚	
8	横浜市南区	永田町東台	
5	横浜市南区	永田町東台	
3	横浜市磯子区	弘明寺	南区
8	横浜市磯子区	根岸加層　板碑	
6	横浜市磯子区	根岸坂の台貝塚	
21	横浜市磯子区	岡村町三殿台	
3	横浜市鶴見区	東寺尾桜ヶ丘貝塚	
1	横浜市鶴見区	三ツ池宝泉寺裏山貝塚	
2	横浜市鶴見区	上末吉町	
4	横浜市鶴見区	上末吉町三ツ池貝塚（小仙塚）	
9	横浜市鶴見区	上末吉町三ツ池貝塚	
13	横浜市鶴見区	北寿町別所	北寺尾町
16	横浜市鶴見区	東寺尾	
19	横浜市鶴見区	寺尾	
14	横浜市港北区	新羽町	
5	横浜市戸塚区	田谷町字堀の内千秀小学校前台地	
7	横浜市戸塚区	小雀町小雀神社前	
11	横浜市戸塚区	上倉田	
12	横浜市戸塚区	下倉田	
15	横浜市戸塚区	飯島町飯島トネ谷	
25	横浜市戸塚区	飯島町（長谷）	
26	横浜市戸塚区	飯島町貝殻谷	
27	横浜市戸塚区	上矢部松尾神社附近	
28	横浜市戸塚区	飯島町飯島広ヶ谷（小塚）	
29	横浜市戸塚区	原宿	
20	横浜市金沢区	金沢寺前	
22	横浜市金沢区	青ヶ台　青ヶ台貝塚	
23	横浜市金沢区	野島　野島貝塚	
24	横浜市金沢区	称名寺貝塚	
6	横浜市金沢区	金沢町称名寺	
2	海老名市	国分寺　相模国分寺跡	
4	川崎市	菅寺尾台	
17	北海道室蘭市	外祝津字エトモ	

番号は県立博物館資料による

東台遺跡は石野瑛により弘明寺瓦などの出土地としてとりあげられる。石田の報告には中期弥生土器が描かれ、後に森本六爾の踏査が実施されている。弘明寺の北側の六ッ川の谷の北側の丘陵先端にあり、環壕集落の存在も考えられる立地にある。

石田武雄は、戦後1947年には南区共進中学校の教員となる（第3表）。1950年は副校長であり、一時異動で離れるが1961年には校長として同じ中学校に戻る。1968年に離任、退職する。1976年にまとめられた『南区の歴史』には共進中学校には東台遺跡採集の瓦などがあると記載されている。これは石田の採集であろうと思われるが、いまは所在不明であるという（田代昭夫氏教示）。石田の名は『関東学院百年史』編修委員会（関

東学院 1984）の招待リストにある。学院史作成に協力したものと思われる。没年は未確認である。

清水裕は、1945 年には戸塚区の豊田小学校に勤務する（第 4 表）。1964 年に離任する。その間、1961 年の三殿台遺跡の発掘に参加している（豊田小学校 1991）。しかし、『三殿台』の参加者名簿にはない。

神奈川県立歴史博物館におられた川口徳治朗から清水の写真（写真 1）の提供をうけた。1968 年の関東学院橄欖会教員の会の集合写真は、清水らの退職を祝う会らしく未確認だが石田もともにいるものと思われる。1976 年 3 月 5 日に 68 歳で亡くなり、書籍、考古資料、化石資料などは神奈川県立博物館に寄贈された（神奈川県立博物館 1977）。一覧には土錘 1 点他 6 件 178 点とある。企画展などに展示されているが、リストなどはまだ公表されていないので示しておきたい（第 5 表）。

考古資料だけでなく化石にも関心があり、神奈川県立博物館の松島義章とも交流があった。長沼層産貝化石（キララガイの一種）2 点他 51 種 376 点、長沼層産シカの角化石 1 点、小柴層産サメの歯化石 6 点を寄贈している（神奈川県立博物館 1977）。

なお、石田らの仲間であった早川（中山）昇三は、1933 年に 25 歳で亡くなっている（関東学院橄欖会 1937）。明治薬専を卒業していた。

3. 池田健夫（第 6 表）

池田健夫について江坂輝弥から横浜の歯医者であると教示されていた。関東学院橄欖会の卒業生名簿に 1929 年卒業で東京歯科医師専門学校に進学し、中区境谷で歯科医院を開業しているとある（関東学院橄欖会 1937）。戦前の『神奈川県歯科医師会員名簿』（神奈川県歯科医師会 1942）にもあり、明治 12 年生まれの池田徳太郎が歯科医師会長となっており、父親と思われる。弟嘉夫も歯科医師となって、境ノ谷で開業している。関東学院の卒業が 1929 年であり、石田らとは 3 年後輩となるので、1911 年生まれと仮定してみた。

池田は、研究会結成にむけて戸根木亀之助大尉と相談している。八王子史談会の展覧会（陵東土俗研究会第 1 回展、椚 1996）を見学し、木下止好、安西英夫（1888 ～　）、小松茂盛（1898 ～ 1968）らを訪問して教えを受けている。川崎市溝口の医師、岡栄一（1903 ～ 1964）の橘樹考古学会とも連絡を取り合い、相互の展覧会や講演会に出席している。また、突然の橘樹考古学会の廃会には驚きの声明を発表している（『丘の上』9）。

1931 年 8 月 16 日と 17 日に池田の自宅で開催された第 1 回遺物陳列会には、高橋正人、中川一郎、中須治五郎、岡栄一、吉野清之輔、内芝正彦、尾形順一郎、沢野六郎、清水裕、久保田誠吾らが訪れた。岡と吉野は橘樹考古学会会員、内芝は東京高等学校学生である。

1927 年に南区六ッ川貝塚、1928 年に中区坂ノ台貝塚、1930 ～ 1931 年に鶴見区桜ヶ丘貝塚、

第6表　池田健夫年譜

	1911				誕生（逆算）
13歳	1924	大正13年			関東学院入学
16歳	1927	昭和2年	2月	末	池田、戸根木亀之助大尉と話す
			4月	末	戸根木、池田に研究会設立を勧める
			夏期休暇		池田、八王子史談会展覧会見学
			7月	下旬	池田ら　八王子史談会の木下止好訪問
			9月	20日	横浜考古学研究会創立　中区西戸部境ノ谷
			11月		第1回遠足会　六ッ川貝塚の発掘
17歳	1928	昭和3年	3月	16日	『丘の上』創刊号刊行
					「巻頭言」「石器時代に於ける東西文化」「編輯報告（戸根木と共著）」
			6月		池田、病気で1ヶ月半休む　『丘の上』2の刊行が遅れる
			7月	29日	戸根木亀之助大尉の送別会
			8月	10日	『丘の上』2刊行
18歳	1929	昭和4年	2月		『丘の上』3刊行
			3月	1日	関東学院卒業（関東学院1937）第6回卒業生
			4月		東京歯科医師専門学校入学
			8月		『丘の上』4刊行
19歳	1930	昭和5年	4月	上旬	八幡一郎を訪問　根岸町競馬場附近貝塚採集の顔面把手を示す（八幡1930）
			4月	2日	八幡入会
			8月		『丘の上』5刊行　「本会の歴史」
			11月	5日	桜ケ丘貝塚第1回発掘
			11月	9日	桜ケ丘貝塚第2回発掘
			12月	20日	桜ケ丘貝塚第3回発掘
20歳	1931	昭和6年	1月	17日	桜ケ丘貝塚第4回発掘
			1月	24日	桜ケ丘貝塚第5回発掘
			4月	3日	桜ケ丘貝塚第6回発掘
			4月		『丘の上』6刊行　「桜ケ丘出土の大諸磯式土器」
			5月	18日	橘樹考古学会訪問
			6月	4日	桜ケ丘貝塚第7回発掘
			8月	2日	中須治五郎氏訪問（桜ケ丘貝塚）
			8月	16・17日	第1回遺物陳列会を自宅で開催
			9月		『丘の上』6刊行　「桜ケ丘貝塚（2）」
			9月	12日	大場磐雄と岡栄一を訪問（『橘樹考古学会誌』1－11）
			9月		橘樹考古学会に『丘の上』5・6を寄贈（『橘樹考古学会誌』1－9）
			10月	15日	橘樹考古学会創立1年記念例会出席（『橘樹考古学会誌』1－10）
			11月	2～4日	八幡の折本貝塚発掘に参加
			12月		『丘の上』7刊行　「折本貝塚を掘る（其1）」
21歳	1932	昭和7年	10月		『丘の上』9刊行　「折本貝塚を掘る（其2）」
			11月	12日	池田と清水、石田武雄訪問
22歳	1933	昭和8年	1月		『丘の上』10刊行　「創立満5年を迎ふ」
			11月		『丘の上』11刊行
23歳	1934	昭和9年	2月	16日	立正大学考古学会石器時代遺物展覧会（『銅鐸』4）
					森本、斎藤房太郎、池田健夫、岡栄一ら参加
			5月	26日	斎藤房太郎が森本を東導して横浜へ
					本町小学校、池田健夫、田村宗順の弥生式土器を実測する
			6月	21日	斎藤と稲荷山貝塚　池田は斎藤兄とする
			9月	9～16日	稲荷山貝塚発掘（横浜考古学研究会第2回発掘会）
			10月	14日	東京人類学会創立40周年記念（『人類学雑誌』49－11）佐藤陽之助も参加
			11月	19日	稲荷山貝塚発掘（横浜考古学研究会第2回発掘会）
			12月		『丘の上』12刊行　「神奈川県横浜市中区稲荷山貝塚発掘調査概報」
					（斎藤房太郎・佐藤陽之助と共著）
24歳	1935	昭和10年			東京歯科医師専門学校卒業か
			1月		『史前学雑誌』7－1（再録）「神奈川県横浜市中区稲荷山貝塚発掘調査概報」
			2月	28日	森本六爾『丘の上』12受け取る（池田が送付）（『考古学』6－3編集所日記）
26歳	1937	昭和12年	2月		酒詰仲男、斎藤房太郎、池田健夫令弟、芹沢長介ら岡村貝塚発掘
					（板橋区立郷土資料館2009）
			3月		先史考古学会会員氏名にあり（神奈川）『先史考古学』第1巻第3号　5月
			11月		歯科医院（卒業生名簿）（関東学院橄欖会1937）中区境谷
			12月		『丘の上』15刊行「横浜市神奈川区篠原町富士塚貝塚報告」（斎藤房太郎共著）
					（『丘の上』13は篠原貝塚、14は桜ケ丘貝塚を予定するも刊行にいたらず）
29歳	1940	昭和15年	2月	20日	東京考古学会同人（『考古学』11－2、『丘の上』13）
			3月	28日	斎藤房太郎の帰還歓迎会（新宿中村屋）に参加（1940『考古学』11－5）
			5月	15日	東京考古学会例会研究旅行の件で研究所来訪（『考古学』11－5）
31歳	1942	昭和17年			『神奈川県歯科医師会員名簿』にあり　境ノ谷
46歳	1957	昭和32年			埼玉県歯科医師会会員（埼玉県歯科医師会1957）
63歳	1974	昭和49年			狭山市入間川小学校・入間川東小学校歯科医（埼玉県歯科医師会1974）
95歳	2006	平成18年	7月	7日	葬儀　狭山市市政功労者

1931年に港北区折本貝塚、1934年に南区稲荷山貝塚、1936～37年に港北区富士塚貝塚を発掘し、ほかに港北区篠原貝塚を発掘している。

1937年2月とされる岡村三殿台貝塚の発掘で酒詰仲男が残した写真（写真2）がある（酒詰、1967、国学院大学2005・2006、板橋区郷土資料館2009）。芹沢長介が撮影したもので斎藤房太郎がいる。この写真は『貝塚に学ぶ』（酒詰1967）にも掲載されているが説明がなかった。大

場磐雄の写真資料（国学院大学 2005・2006）には、斎藤と酒詰が示されていただけであった。昨年の特別展『貝塚に学ぶ』では 1937 年 1 月 31 日に酒詰仲男は斎藤房太郎、芹沢長介、池田健夫と三殿台貝塚を発掘しているとその写真説明にあったが（板橋区立郷土資料館 2009）、原写真には池田健夫令弟とあった。写真 3 の右側が酒詰であるので、左の手前が斎藤、中央奥が池田令弟となるのであろう。弟嘉夫も考古学に関心をもっていたことになる。

戦後は横浜を離れて埼玉県狭山市に移る。学校歯科医として功績があり、狭山市の市政功労者となったが、埼玉県では考古学活動を行っていないようである。2006 年 7 月に 95 歳で亡くなり、葬儀には狭山市長も出席した。横浜での活躍は 1927 年から 1937 年までの 11 年間であった。稲荷山貝塚出土の土偶を国立博物館に寄託していた関係から遺品が国立博物館に移された（望月幹夫氏教示）。

4. 尾形順一郎と松下胤信（写真 2、第 7・8 表）

尾形順一郎については石野瑛の紹介がある（石野 1927）。写真は板橋区郷土資料館 2009 に白髭姿のものがある（写真 2）。晩年に故郷に帰ろうとしたが果たさず、1954 年 8 月 19 日に 77 歳で亡くなった（第 7 表）。

「尾形順一郎氏は明治 9 年 9 月 10 日を以て山形県坂田町浜畑町に生まれた人である。代々地頭をした家で仙台は尾形衛門という。明治 25 年相続上の煩を避けて北海道に渡ったが、同 27 年父衛門氏が台湾に戦没されるに及んで、氏は北海道師範に入り業を終えて最初に教職に就いたのが、古代文字で有名な手宮の洞窟の真上の分教場であった。其処で 1 個の石器を拾われたのが採集の第一歩であった。この分教場に居ること 3 年の後、天塩の増毛に 4 年、その間諸所に採集を試み又アイヌ民族に就いて観察して手宮文字や環状石籬は旧アイヌ族とは関係の無いものであるとの論を作った。後本州に帰り奥羽地方や関東地方の遺跡を訪れて遺物を採集された。氏は一度実業界に転じ大いに為すあらんとしたが事志と違い、再び横浜に於いて啓蒙の任に当たりつつ、相変わらず余暇を以て諸所に踏査を行い、先史遺物（北海道の小樽付近のものが最も多い）を始めアイヌに関するもの、横浜に関するものなどを所蔵して太古庵主人と称し悠々自適しつつ趣味の満足に力めて居る。」（石野 1927）

写真 2　史ヶ丘貝塚の酒詰仲男と尾形順一郎（板橋区郷土資料館 2009）

北海道での教員から上京して実業界に転じて、東京人類学会に 1916 年 40 歳の

第7表　尾形順一郎年譜

	1876	明治9年	9月	10日	山形県酒田町浜畑町に生まれる（石野瑛1927）
25歳	1902	明治25年			北海道に渡る（石野瑛1927）
27歳	1904	明治27年			父衛門が台湾にて戦没　北海道師範に入る（石野瑛1927）
					小樽手宮分教場　石器を採集する　3年（石野瑛1927）
					天塩の増毛　4年（石野瑛1927）
					本州に帰り実業界に転ずる（石野瑛1927）
40歳	1916	大正5年	12月	15日	東京人類学会入会（松村瞭紹介）『人類学雑誌』31－12
					府下荏原郡下目黒村字鳥森北垣別邸内
41歳	1918	大正7年	6月	30日	谷川と阿部、尾形順一郎を訪問（大場1975『楽石雑筆』p 13）
42歳	1919	大正8年	2月		府下荏原郡目黒村大字下目黒731　（『人類学雑誌』34－2）
			8月		府下荏原郡大井町東京毛織株式会社女工寄宿舎事務所内
					（『人類学雑誌』34－8）
44歳	1921	大正10年	12月		横浜市中村町字池ノ下市営住宅76号（『人類学雑誌』36－9～12）
45歳	1922	大正11年			武相考古会入会（『武相研究』3）
		このころから			横浜に於いて啓蒙の任にあたる（石野1927『趣味の考古学』）
46歳	1923	大正12年	3月	11日	大場磐雄、石野瑛と三殿台貝塚踏査（大場1975）
			9月	1日	関東大震災
49歳	1925	大正14年	10月	25日（日）	人類学会千葉県犢橋貝塚遠足会に参加（『人類学雑誌』40-12）
50歳	1926	大正15年	5月	9日	人類学会千葉県姥山貝塚遠足会に参加（大場1975）
51歳	1927	昭和2年	3月	14日	南太田町富士見耕地でヘラシカ出土
					石野瑛1927「武相考古関係の会」『趣味の考古学』に紹介される
52歳	1928	昭和3年	9月		東漸寺貝塚調査（尾形・松下1930）
			12月	2日	武蔵野会を石野瑛とともに横浜、弘明寺などを案内（武蔵野会1929）
53歳	1929	昭和4年	1月	3日	横浜考古学研究会入会（横浜史料係とある）同時に松下胤信を紹介
			4月	20日	史前学会会員（『史前学雑誌』1－2）
			11月	20日	中区中村町池下市営住宅60（『史前学会会員名簿』史前学年報昭和4年度）
	1930	昭和5年			「横浜市杉田東漸寺貝塚の研究（1）～（3）」『史前学雑誌』2-1・2・6（松下胤信）
					神奈川区北幸町3497（『史前学年報』昭和5年～9年）　10年以降の名簿になし
54歳	1931	昭和6年	8月	16日	横浜考古学研究会第1回遺物陳列会参加
62歳	1939	昭和14年	1月	8・9日	東京考古学会第1回総会参加　記念写真あり（『考古学』10－4）
63歳	1940	昭和15年	2月	1日	邸内の史ヶ丘貝塚を酒詰仲男、和島誠一発掘（酒詰・和島1940）
					板橋区立郷土資料館2009に写真
69歳	1946	昭和21年	8月	11日	武相文化協会復活第154回に参加（石野1964）
				13～15日	石野に武相関係資料を譲り渡す相談（石野1964）帰郷を考える
				16～27日	ヘラシカ角化石など搬入（石野1964）
73歳	1950	昭和25年	4月	30日	武相文化協会第196例会　客員（『武相学報』11　1950年5月20日）
77歳	1954	昭和29年	8月	19日	逝去、石野弔問（『武相文化』66　12月1日）
	1986				内田四方蔵1986「ヲガタヘラシカ横浜号」『史話・私の横浜地図』よこれき双書

ときに入会し、1921年、45歳で横浜に移る。このころは横浜市史料係として知られるので、横浜市史編纂にかかわる仕事をしていたらしい。武相考古会にも入会している。1928年12月2日には石野瑛とともに鳥居龍蔵の武蔵野会の一行を弘明寺などに案内している（武蔵野会1929、岡本ほか2001）。

1928年から磯子区東漸寺貝塚の調査を松下と行った。1929年1月3日に横浜考古学研究会に入会し、松下を紹介した。

1940年2月1日に自宅敷地内の貝塚を酒詰仲男と和島誠一が発掘しており、尾形の命名により史ヶ丘貝塚としている（酒詰・和島1940）。板橋区郷土資料館『貝塚に学ぶ』（板橋区郷土資料館2009）に写真があり、建築しようとする建物基礎が写っており（写真2）、工事により発見された貝塚の調査であった。なお、史ヶ丘の名は地名でなく、尾形の呼称であり、遺跡名としては不適当と思う。『神奈川県貝塚地名表』（神奈川県立歴史博物館2008）では、斎藤分町貝塚とした。また、ヲガタヘラシカ横浜号の発見者として知られる（内田1986）。

松下胤信は大正大学を卒業し、桑山龍進（1909～1987）と考古学仲間であったことが知られているが、詳細不明である。大学の在学期間もまだ確認できていないが、桑山の1年先輩と思われる。東京人類学会会員、史前学会会員、先史考古学会会員である。発表論文と住所の変遷から追いかけてみたい（第8表）。

磯子区東漸寺貝塚の調査を1928年9月から尾形とともに10ヶ月間に数十回実施している。

第８表　松下胤信年譜

1928 年	昭和３年	５月		東京人類学会入会　直接申込（『人類学雑誌』43 － 5）
		９月	下旬	東漸寺貝塚の調査（10 ヶ月に数 10 回）『史前学雑誌』２－１
1929 年	昭和４年	１月	３日	横浜考古学研究会入会（尾形順一郎の紹介）
		４月	20 日	史前学会会員（『史前学雑誌』１－２）
		６月	22 日	史前学会三ツ沢貝塚調査に参加（『史前学雑誌』２－２）
				横浜市中区久保町 501　『史前学年報』昭和４年
		９月		「帷子川流域に於ける諸磯式遺跡の新例」『考古学雑誌』19 － 9
				「帷子渓谷の石器時代遺物発見地名表」『史前学雑誌』１－５
1930 年	昭和５年			「横浜市杉田東漸寺貝塚の研究（1）～（3）」『史前学雑誌』２－１・２・６（尾形順一郎と共著）
				「横浜市青木町三ツ沢貝塚発見の土偶」『史前学雑誌』２－２
		５月		「鉄滓を伴う遺蹟の新例」『考古学』１－３　p195 ～ 197
		７月		桑山龍進、柴田敏夫、三浦美雄ら　菊名宮谷表谷貝塚発掘（池田 1935、桑山 1980）
				「横浜先史時代遺物発見地名表」『史前学雑誌』２－３
		８月		「帷子渓谷に於ける貝塚の研究」『丘の上』５
		９月		「東京府荏原郡玉川村奥沢の先史遺跡」『史前学雑誌』２－５
				「横浜市に於ける貝塚出土の耳飾と腕飾」『史前学雑誌』２－５
				「横浜市中区根岸町ヒナソ貝塚出土の土偶と曲玉」『史前学雑誌』２－５
		10 月	５日	大場磐雄が来訪、東漸寺貝塚などを案内（大場 1976）
		10 月		「神奈川県愛甲地方の先史時代遺物」『人類学雑誌』45 － 10
		11 月		「神奈川県浦賀に於ける考古学的調査」『史前学雑誌』２－６
		11 月		東京人類学会会員
				「武蔵大岡・帷子両渓谷に於ける二三の貝塚」『人類学雑誌』45 － 12
		12 月		「考古雑報」『考古学雑誌』20 － 12
1931 年	昭和６年	５月		「延命寺の板碑」『史蹟名勝天然記念物』６－４　p326 ～ 327
		９月		「武蔵国菊名宮谷貝塚調査予報」『史前学雑誌』３－４
		９月		会報　転居　大阪市東区高麗橋２丁目　松下善四郎方『史前学雑誌』３－４
				「横浜市神奈川区篠原貝塚調査小報」『史前学雑誌』３－５
				「由比が浜採集の一弥生式土器」『考古学雑誌』21 － 5
1932 年	昭和７年	１月		大阪へ引越し（松下 1932，３月）
				大阪市東区高麗橋２丁目　松下善四郎方　『史前学年報』昭和６年
		３月		「大阪の先史時代遺跡」『史前学雑誌』４－１
		６月		「鎌倉由比ガ浜発見の二三の土器類」『武蔵野』18 － 6　p26 ～ 30
				大阪市東淀川区豊峰町南浜１－ 17 松下別荘内　『史前学年報』昭和７年
		夏		桑山龍進　三戸方面調査　写真を松下に提供（桑山）
		11 月		「考古雑録」『史前学雑誌』４－３・４
1933 年	昭和８年	１月	５日	「続考古雑録」『史前学雑誌』５－３執筆　畏友桑山龍進
				「横浜市中区山手貝塚調査概報」『史前学雑誌』５－２
				「続考古雑録」『史前学雑誌』５－３　吉井、江戸坂、内郷村、三戸
1934 年	昭和９年	１月		「考古断片」『史前学雑誌』６－１　ｐ 56 － 58
		11 月		「兵庫県岡本梅林遺跡」『史前学雑誌』６－６　ｐ 361
				「史前横浜遺物発見地名表」『史前学雑誌』６－６　13 件
1935 年	昭和 10 年			大阪市東区高麗橋２丁目　松下商店『史前学年報』昭和 10 年
1936 年	昭和 11 年			大阪府三島郡茨木町下中條 276『史前学年報』昭和 11 年
1937 年	昭和 12 年			大阪府三島郡茨木町下中條 276『史前学年報』昭和 12 年
		３月		先史考古学会会員氏名にあり（大阪）『先史考古学』第１巻第３号　５月
1938 年	昭和 13 年			『史前学年報』昭和 13 年になし

現在の横浜市西区久保町に住む。西区池ノ上貝塚や池ノ坂貝塚の近くである。史前学会に入会した直後の 1929 年６月 22 日に大山柏らが行った三ッ沢貝塚の発掘に参加している。さかんに県内各地を踏査した。東漸寺貝塚の調査に関心をもった大場磐雄が約束して 1930 年 10 月５日に横浜駅で待合わせして松下宅を訪ね、東漸寺貝塚、杉田貝塚、称名寺貝塚などを案内されている。「白面長身の美男子」とある（大場 1976 ｐ 17）。

1931 年９月か、1932 年１月に横浜から大阪市に転居する。大阪市東区高麗橋の松下善四郎方、松下商店、あるいは東淀川区豊峰町の松下別荘内などとあり、実家に戻られたのであろうか。大阪から岡本梅林遺跡の報告をしたりするが少なく、横浜での採集遺跡の地名表を雑録というかたちでまとめている。史前学会会員は 1937 年まで確認でき、先史考古学会にも参加しているが、以後の記録は確認されない。1908 年生まれと仮定して 29 歳である。横浜での活動は 1928

年から1931年までの4年間であった。在学期間と一致するのであろうか。

5. 斎藤房太郎（写真3、第9表）

史前学会会員、東京人類学会会員、東京考古学会同人、先史考古学会会員である斎藤房太郎の学歴は把握できない。東京都大田区の雪谷貝塚、久ヶ原遺跡、下沼部貝塚、馬込貝塚などの調査を行っている。しばしば立正大学学生の斎藤武一（1909～1996）と行動を共にし、共同して報告をまとめている。立正大学の展覧会（1934年2月16日）に参加し、川崎市北加瀬了源寺前の地下式坑の発掘にも参加しているが立正大学の出身ではないという（坂詰秀一氏教示）。その展覧会で森本六爾と出会い、自宅を訪問し、東京考古学会に入会し、雑誌『考古学』の編集も手伝うようになる。1934年5月26日に森本を横浜に案内して清水裕らの東台遺跡の弥生土器を実測する。石器に関する報告もある（斎藤1934・1937）。森本の勧めがあって1934年8月1日に秩父の踏査を行い、縄文・弥生時代の石器や土製耳飾を紹介している（斎藤1935・1937・1939）。斎藤の紹介した多頭石斧は、群馬県の川島守一を経由して江坂輝弥のもとにある（岡本2009）。

池田健夫と1934年6月21日から横浜市稲荷山貝塚の発掘をおこなう。池田とは、やはり立

写真3　岡村三殿台貝塚の酒詰仲男、斎藤房太郎、池田健夫令弟、（芹沢長介撮影）
（板橋区郷土資料館2009）

第９表　斎藤房太郎年譜

1909 年ころ			誕生
1930 年	5 月		史前学会入会『史前学雑誌』２－３　麹町区元園町１ノ 27
	5 月		東京人類学会入会『人類学雑誌』45 －５
1931 年	1 月		「武蔵国都筑郡折本発見の磨石斧」『史前学雑誌』３－１
	1 月	1 日	史前学会会員名簿（昭和５年 12 月 31 日）東京市麻布区新網町１ノ 27
	9 月		「東京府下池上町久ヶ原庄仙出土の石器時代遺物」『人類学雑誌』46 －９
	9 月		「東京都麻布仙台山出土の弥生式遺物」『史前学雑誌』３－４
	9 月		会報　転居　東京市外杉並町馬橋 298『史前学雑誌』３－４
1932 年	3 月		「子母口出土の小型弥生式土器」『史前学雑誌』４－１　p48
	3 月	1 日	史前学会会員名簿（昭和６年 12 月 31 日）東京市外杉並町馬橋 298
	11 月	3 日	人類学会遠足会千葉県鰭ヶ崎貝塚に参加（人類学雑誌 47-12）記念写真
	11 月		「世田ヶ谷区鶴岡出土の弥生式土器」『史前学雑誌』４－３・４
1933 年	3 月		「東京府西多摩郡増戸村網代西峯田の一遺跡に就て」『考古学雑誌』23-5 p310 ～ 314
	10 月		「東京市大森区久ヶ原町庄仙の土器」『考古学雑誌』23 － 10（斎藤武一と共著）
1934 年	2 月	16 日	立正大学考古学会石器時代展覧会（『銅鐸』4） 森本、斎藤房太郎、池田健夫、岡栄一ら参加
	2 月	18 日	立正大学考古学会石器時代遺物展覧会目録（『史前学雑誌』６－２） 馬込、久ヶ原庄仙、小学校付近、久ヶ原貝塚、折本貝塚などの資料を出品
	3 月	10 日	斎藤房太郎、斎藤武一と森本宅へ（『考古学』５－５）
	5 月	10 日	森本宅へ　東京考古学会に入会（『考古学』５－６）
	5 月	21 日	森本宅へ（『考古学』５－６）
	5 月	1 日	『考古学』５－５　編集担当者として名がでる　５－６、５－10 も
	5 月	25 日	森本宅へ
	5 月	26 日	森本を東導して横浜へ　本町小学校、池田健夫、田村宗順の弥生式土器を実測する
	5 月	27 日	森本らと久ヶ原遺跡へ
	5 月	28 日	森本宅へ
	6 月	2・5・7 日	北加瀬了源寺前地下式坑発掘に参加（『銅鐸』4）
	6 月		「関東に於ける弥生式石器資料（1）」『考古学』５－６　p175 ～ 177
	6 月		「大森雪ヶ谷遺跡」『考古学雑誌』24 －６（斎藤武一と共著）
	6 月	21 日	池田と稲荷山貝塚　池田は斎藤兄とする
	8 月	1 日	秩父調査（斎藤 1939）森本六爾のすすめ
	9 月	9 ～ 16 日	稲荷山貝塚発掘（横浜考古学研究会第２回発掘会）
	11 月	19 日	稲荷山貝塚発掘（横浜考古学研究会第２回発掘会）
	12 月		「稲荷山貝塚」『丘の上』12（池田健夫、佐藤陽之助と共著）
	末		簡野啓氏から下沼部貝塚調査依頼（斎藤 1937）
	12 月	1 日	史前学会会員名簿（昭和９年 12 月１日）東京市大森区堤方町 1001
1935 年	1 月	1 日	「神奈川県横浜市中区稲荷山貝塚発掘調査概報」『史前学雑誌』７－１ （池田健夫、佐藤陽之助と共著）
	1 月		「埼玉県皆野町新井出土の土製耳飾」『史前学雑誌』７－１
	12 月	1 日	「文献に現はれたる武蔵久ヶ原貝塚」『丘の上』12（杉山貝塚目録）未見
1936 年	1 月	22 日	森本六爾没（32 歳）鎌倉市
	12 月	25 日	東台原稿（数年前東台調査）
1937 年	1 月	31 日	岡村三殿台貝塚土器出土状態写真　酒詰仲男、池田健夫令弟、芹沢長介撮影 （国学院『大場磐雄写真資料』）（板橋区立郷土資料館 2009 には２月とある）
	3 月	5 日	「武蔵馬込貝塚出土の繊維土器」『先史考古学』１－２
	3 月	30 日	秩父原稿
	3 月	26 日	秩父石冠・下沼部原稿
	3 月		先史考古学会会員氏名にあり（東京市）（『先史考古学』第１巻第３号 5 月）
	5 月		「横浜東台出土の弥生式石斧」『史前学雑誌』９－２
	6 月		「武蔵下沼部 1,180 番地貝塚覚書」『史前学雑誌』９－３
	6 月		「埼玉県秩父郡久那村出土の石冠」『史前学雑誌』９－３
	12 月		「富士塚貝塚」『丘の上』15（池田健夫と共著）
	12 月		史前学会会員名簿（昭和 12 年 12 月１日）なし　以後なし
1938 年			『弥生式土器集成図録』1938 東台の清水裕資料を図化　森本六爾は田村氏資料を図化
1939 年	1 月	8 日	東京考古学会第１回総会　同人（浅田芳朗 1982『考古学の殉教者』p 174）
	3 月ごろ		応召（『貝塚』９号）東京都目黒区軽重兵第一連隊留学隊百々瀬部隊
	4 月	20 日	「秩父点描」『貝塚』９号
	9 月	20 日	斎藤から酒詰へ私信（『貝塚』13 号）満州国興安北省ハイラル野戦郵便局　真砂部隊
1940 年	3 月	12 日	斎藤、凱旋（『貝塚』18 号）
			予告記事あり（『考古学』11 － 3）
	3 月	28 日	斎藤房太郎の帰還歓迎会を新宿中村屋で（『考古学』11 － 5）

正大学の展覧会で出会ったのであろう。1934年6月、9月、11月に稲荷山貝塚を発掘し、12月に「神奈川県横浜市中区稲荷山貝塚発掘調査概報」『丘の上』12（翌1935年に『史前学雑誌』7－1に再録）をまとめる。1937年に「横浜市神奈川区篠原町富士塚貝塚報告」『丘の上』15を池田らとともに発表した。1937年1月31日か2月に三殿台貝塚の発掘を酒詰、芹沢と行う。池田令弟が一緒であった（写真2）。1939年1月の東京考古学会第1回総会に出席したのが考古学活動の最後で、1939年3月に徴兵され、満州に派遣される。無事凱旋し、酒詰仲男や江坂輝弥も参加して新宿中村屋で帰還歓迎会が開催されるが、以後の動向は確認できていない。再び徴兵されたのであろうか。歓迎会には池田健夫も出席している。考古学活動は東京を含めても1930年から1939年の10年間であった(註1)。

6. 高橋正人（第10表）

高橋正人（第10表）は、1919年に慶応大学医学部に入学し（逆算）、1925年に卒業している（1925～1929『三田評論』）。本籍は宮城県とあるが、東京に住み、弟二人がいる。卒業後は医化学教室に所属している。同教室には1929年まで確認できるが、以後の記録は確認していない。1928年に『子供の科学』に「貝塚の発掘」を発表しており（中山2001）、考古学への関心は学生時代に遡る（註2）。『丘の上』5号には1923年10月20日から12月21日まで、24回の調査

第10表　高橋正人年譜

1901年			誕生（逆算）
			東京高等学校卒業か（『丘の上』10）
1919年			慶應義塾大学医学部入学
1923年	9月	1日	関東大震災
	10月	20日	12月21日まで24回上沼部貝塚調査（『丘の上』5）山内清男、八幡一郎参加
1925年			卒業（宮城県）医化学教室
1926年			医化学教室
1927年			医化学教室
1928年			医化学教室
	10月	1日	「貝塚の発掘」『子供の科学』（中山2001p63）上沼部貝塚発掘のこと
1929年			医化学教室
	6月	3日	横浜考古学研究会入会
	10月	23日	日吉、矢上谷戸貝塚調査（『丘の上』8）
			史前学会入会　1936年まで
1930年	8月		「上沼部貝塚（其二）」『丘の上』5
	10月	4日	弟三男より小樽市富岡町遺物を贈られる（『丘の上』9）
	10月		「不思議不可解な小樽手宮の古代文字」『子供の科学』12－4（『丘の上』9）
			「北海道の石器時代に就て」（未発表）（『丘の上』9）
			東京人類学会入会
1931年	2月	2日	東山遺跡調査（『丘の上』7）
	5月	31日	新郷貝塚調査、東京高等学校理科2年内芝正彦と（『丘の上』8）
			鈴木尚参加（『丘の上』10）
	8月	16日	第1回遺物陳列会（池田宅）に参加
	9月		「東山竪穴群に属する一遺跡の報告　其一」『丘の上』7
	12月		「神奈川県橘樹郡日吉村日吉台に4箇所の小貝塚を発見す」『丘の上』8
			「新郷貝塚を掘る（其一）」『丘の上』8
1932年	10月		「北海道石狩国小樽市富岡町より出土せる石器時代遺物に就て」『丘の上』9
1933年	1月		「新郷村東貝塚を掘る（其二）」『丘の上』10
			『世界人類考古学者列伝』孔版（『丘の上』10に予告、中山2001p64）
1934年			
1935年			
1936年			この年まで史前学会会員

記録を示す。参加者に予科大淵真蔵先生、本科望月周三郎博士、江崎学士、中村鋳太郎先生、医学部本科2年の大堀奏一郎、近藤宗彦、福井末吉、故大沼帯刀、田中憲太郎、故高橋哲太郎、阿曽三樹、深瀬亮作、井上林之助、三浦、岩田、松井八郎、大淵三雄、寺田文次郎らがおり、三田の移川子之蔵先生、経済学部学生で東京人類学会会員の岩田虎太郎もいる。また11月3日に東大人類学教室の鳥居龍蔵に報告しており、八幡一郎を四谷で土器をみせ、現地を案内している。4日には八幡と山内清男が発掘に参加している。これは中村五郎が編集した年譜にはない（中村1996)。山内21歳のことである。

横浜考古学研究会や史前学会への入会は1929年であるので、教室から離れたことと関係があるのかもしれない。1930年に東京人類学会にも入会している。『丘の上』には東京都大田区上沼部貝塚（5号)、目黒区東山遺跡（7号)、神奈川県日吉台遺跡（8号)、埼玉県新郷貝塚（8号、10号)、北海道小樽市富岡町遺跡（9号）など各地の遺跡を紹介している。さらに、1937年に『世界人類考古学者列伝』孔版（中山2001）をまとめている。

新郷貝塚の参加者に東京高等学校学生の鈴木尚や内芝正彦がいる。高橋も東京高等学校の卒業のようである。慶応大学の後輩であった西岡秀雄を横浜考古学研究会会員に紹介した。

1901年の生まれと推定するが、1936年で活動をやめている。病気により亡くなったという。上沼部貝塚の発掘参加者にも故人となったものが多い。

まとめ

横浜考古学研究会の活動は、1927年から1937年までの11年間にすぎない（第11表)。石田武雄、清水裕、池田健夫は長命であったが考古学活動は短く、青春の一時期の10年ほどであっ

第11表　横浜考古学研究会の11年（1927～1937）

	『丘の上』	池田健夫	石田武雄	清水　裕	尾形順一郎	松下胤信	斎藤房太郎	高橋正人	
生年		1911	1908	1908	1876	1908	1909	1901	
1921年			関東学院	関東学院	横浜へ			慶応大	
1922年			森大塚		武相考古会				
1923年			徴古会						関東大震災
1924年		関東学院							
1925年			坂ノ台調査	坂ノ台調査				医化学教室	
1926年			東台調査	東台調査				医化学教室	
			東洋大	市教員					
1927年	創立				ヘラシカ			医化学教室	
1928年	1･2号	1号	東台報告	加層台	東漸寺調査	東漸寺		医化学教室	
1929年	3･4号	東京歯科		一里塚	入会	三ツ沢		入会	
1930年	5号	会歴史		5号	史前学会	史前学会		5号	
1931年	6・7・8号	陳列会	東台再録	7･8号	陳列会	大阪へ	史前学会	7･8号	
1932年	9号	折本			史前学会		史前学会	9号	
1933年	10･11号	5周年	5周年	10号	史前学会	史前学会		10号	
1934年	12号	稲荷山			史前学会	史前学会	稲荷山	史前学会	
1935年	未刊	（篠原）				史前学会	久ヶ原	史前学会	
1936年	未刊	（桜ヶ丘）				史前学会		史前学会	
1937年	15号	富士塚				史前学会	富士塚		
		歯科医師	吉田小教員	子安小教員					
1938年							弥生集成		
1939年							応召		
1940年		斎藤凱旋			史ヶ丘発掘		凱旋歓迎会		
没年		2006没		1976没	1954没				

た。関東学院以外の松下胤信は4年、高橋正人は11年、斎藤房太郎は10年活躍するが、戦争や病気などのため考古学活動を断念したようである。この短さに驚く。そして、皆若かった。20代から30代前半である。

縄文貝塚、弥生集落、古代寺院瓦など興味ある調査をおこなった。貝塚では八幡一郎や酒詰仲男らの指導を受け、斎藤房太郎、高橋正人や西岡秀雄らの東京在住の会員を加えている。

なお、酒詰仲男の『貝塚』6（1939年1月）には慶応商工学校の史学会と横浜市稲荷山貝塚を連携して発掘しようとする記事がある（『貝塚』6）。

神奈川の貝塚に学ぶ会での神奈川県内貝塚の巡検では、しばしば驚かされた（神奈川県立歴史博物館2008）。鶴見区の桜ヶ丘貝塚、南区の六ッ川貝塚、中区の坂ノ台貝塚を確認することができた。桜ヶ丘貝塚では踏査の際に会員の中須治五郎宅をみつけ、夫人や家族からお話を聞くことができた。会員にはほかに池谷健治（1913～1998）らがいる。なお、『丘の上』は横浜市立図書館などで複写品をみることができる。

謝辞

昨年11～12月に板橋区郷土資料館で開催された『貝塚に学ぶ』展を見学した。郷土資料館の守屋氏と酒詰仲男長男の酒詰治男ご夫妻のご好意を受け、酒詰が残した『日本貝塚所在地名考』の原稿や写真類をみることができた。原稿には池田や松下、池谷健治らの名前が随所にでてくる。その検討は後日を期したい。教示を受けた諸氏の名前を記して感謝したい。

江坂輝弥、大貫英明、川口徳治朗、酒詰治男、坂詰秀一、田代昭夫、松島義章、望月幹夫、守屋幸一（敬称略）

註

(1) 出席者に和歌山県の竹中仁一があり、斎藤は和歌山県出身かもしれない。
(2)『子供の科学』は再確認できてない。

引用・参考文献

石野　瑛　1927「7・8世紀の横浜近郊」『横浜近郊文化史』
石野　瑛　1927「武相考古関係の会」『中央史壇』13－1（1927『趣味の考古学』、1934『考古集録』第一所収）
石野　瑛　1964『武相学園の成るまで』
内田四方蔵　1986『史話・私の横浜地図』
大場磐雄　1975「楽石雑筆上」『大場磐雄著作集』6
大場磐雄　1976「楽石雑筆中」『大場磐雄著作集』7
岡本孝之・国平健三・田代昭夫　2001「弘明寺の古瓦」『神奈川考古』37
岡本孝之　2009「多頭形橋場型石斧論」『西相模考古』18
椚　國男　1996『土の巨人―考古学を拓いた人たち―』多摩歴史叢書4
久野恵司　1950『横浜市教職員録』日本産業情報社
酒詰仲男　1967『貝塚に学ぶ』
酒詰仲男・和島誠一　1940「横浜市史ヶ丘貝塚に就て」『貝塚』20
杉山博久　1996『縄文期貝塚関係文献目録』
中村五郎　1996「年譜」『画竜点睛―山内清男先生没後25年記念論集―』
中山清隆　2001「江見水蔭ゆかりの」遺跡東京・神奈川・埼玉の遺跡」『江見水蔭『地底探検記』の世界　解説・研究編』
板橋区郷土資料館　2009『貝塚に学ぶ―考古学者・酒詰仲男と地球環境―』
神奈川県歯科医師会　1942『神奈川県歯科医師会員名簿』

神奈川県歯科医師会　1963 『神奈川県歯科医師会史』
神奈川県立博物館　1977 『神奈川県立博物館年報』 昭和 51 年度
神奈川県立歴史博物館　2008 『神奈川県貝塚地名表』
関東学院　1984 『関東学院百年史』
関東学院橄欖会　1937 『関東学院橄欖会会員名簿』
国学院大学　2005・2006 『大場磐雄博士写真資料目録』1・2
東京考古学会　1938 『弥生式土器集成』
武蔵野会　1929 「横浜見学旅行記事」『武蔵野』13 － 1
横浜市南区　1976 『南区の歴史』
横浜市立豊田小学校　1991 『とよだ　創立百年記念誌』
横浜市立共進中学校　1996 『かがやく浪　創立 50 周年記念誌』

『考古論叢 神奈河』投稿規定

『考古論叢 神奈河』は、会員のみんなで育てる会誌です。

考古学会に衝撃を与えるような論文も歓迎しますが、身近にある資料の紹介や、研究ノートも気軽に投稿してください。投稿を希望される方は8月末までに役員にその旨をご連絡ください。なお、規定は下記の通りです。

1. 投稿資格

神奈川県考古学会の会員であること。但し、会誌担当役員からの依頼原稿に関してはこの限りではありません。

2. 原稿の種類と頁数

論文（概ね20～30頁）、研究ノート（概ね10～20頁）、資料紹介（概ね数～10頁）等

3. 投稿手続

投稿希望者は役員に連絡した後、申込書を提出してください。後日、会誌担当役員から執筆要項と割付用紙等を送付します。なお、希望者多数の場合には次集以降に掲載をお願いする場合があります。

4. 原稿の採否

原稿の明らかな誤りや、他人を誹謗中傷するような不適切な表現などがあった場合には、投稿者に訂正をお願いすることがあります。また、レイアウトの都合により原稿の変更を求めることがあります。最終的な採否は、会誌担当役員に一任下さい。

5. 英文題目

裏表紙に英文目次を掲載するため、投稿者は各自で論文の英文題目を作成して下さい。

6. 別刷

投稿者には、次のとおり雑誌・別刷を進呈します。

論文　　：本誌5冊・別刷50部
研究ノート：本誌3冊・別刷50部
資料紹介　：本誌3冊・別刷50部

※別刷を上記以上に希望する場合の費用は、投稿者の負担とさせて頂きます。

考古論叢神奈河第17集には次のような訂正があります。

P11の第5図
「三之宮比々多神社所蔵顔面把手と類似する装飾を持つ顔面把手・釣手土器の分布」中の②を③に、③を②に訂正します。(位置を入れ替えます。)

P19の8行目
「漁労活動」を「漁撈活動」に訂正します。

P21～P43の奇数ページのノンブル
「三浦半島における宮ノ台式土器の編年と様（白石)」を「三浦半島における宮ノ台式土器の編年と様相（白石)」に訂正します。

P26の3行目
「鴨居上ノ台出土土器（大8図43・44)」を「鴨居上ノ台出土土器（第8図43・44)」に訂正します。

P29の3行目
「東海地方西部の文様帯（題12図)」を「東海地方西部の文様帯（第12図)」に訂正します。

P32の29行目
「白岩式土器（第11図7～10)」を「白岩式（第12図7～10)」に訂正します。

P33の13行目
「佐原泉32B住（第6図4）や矢ノ津坂遺跡の資料（第6図8・12)」を「佐原泉32B住（第7図4）や矢ノ津坂遺跡の資料（第7図8・12)」に訂正します。

P36の35行目
挿図出典に「【第13図】玉川1997　【第14図】杉原1968　【第15図】横山2003」を追加します。

P44の後
右頁の「第12図～第15図」を追加します。

P45の2行目
「『吾妻鏡』にみえる。」を「『吾妻鏡』にみえる（註1)。」に訂正します。

P45の20行目
「れる。」を「れる（註2)。」に訂正します。

P46の6行目
「る。」を「る（註3)。」に訂正します。

P51の15行目
「溝6・7は断面逆台形状と薬研堀の溝。」を「溝6・7は断面逆台形状と薬研堀の溝（註4)。」に訂正します。

P53の30行目
「えられる。」を「えられる（註5)。」に訂正します。

P55の29行目
「使用している点である。」を「使用している点である（註6)。」に訂正します。

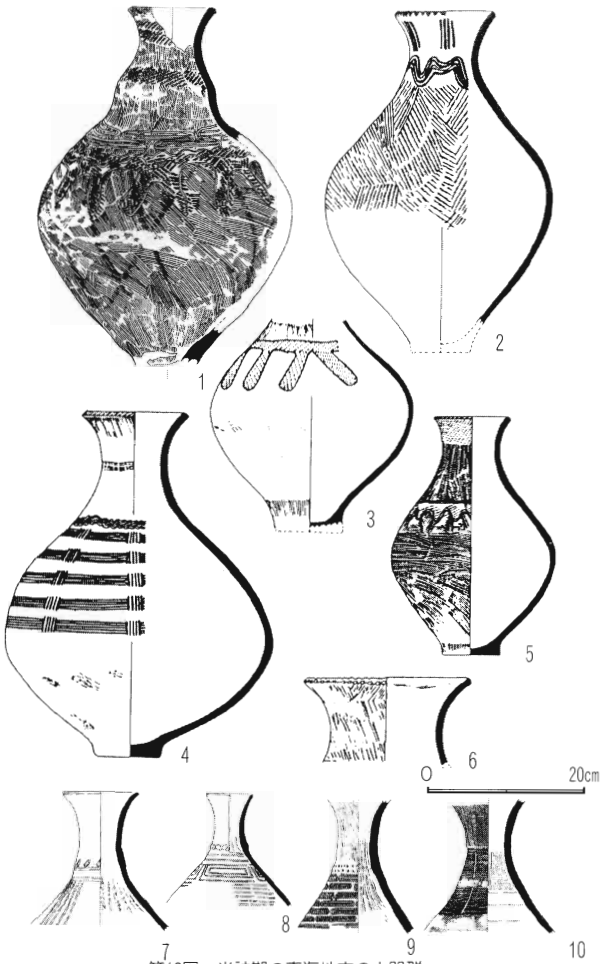
P60の15行目
「海抜7.0前後」を「海抜7.0m前後」に訂正します。

P61の18行目
「条尺制を採用しているが、」を「条尺制を採用しているが（註7)、」に訂正します。

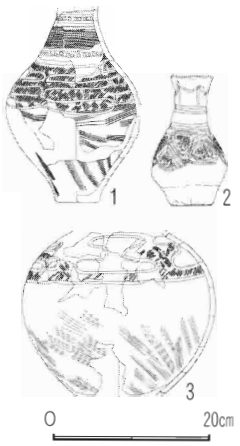
P61の30行目
「約33mということになる。」を「約33mということになる（註8)。」に訂正します。

P62の5行目
「一の鳥居周辺においても」を「一の鳥居周辺（註9)においても」に訂正します。

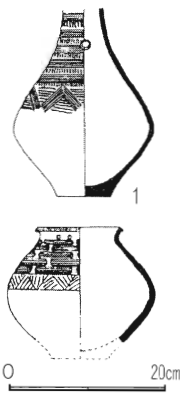
P62の15行目
「この論文は平成19年6月3日大三輪龍彦教授追悼シンポジウム「仏教・鎌倉・考古学」の発表内容を基に再構築したものである。」を追加します。



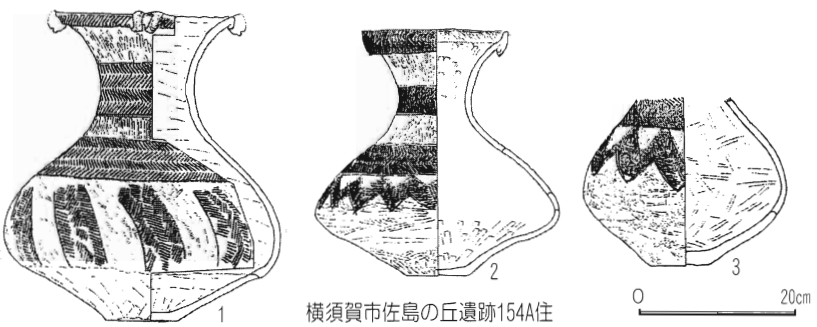
第12図　当該期の東海地方の土器群
（1：長伏六反田11方周、2～6：長伏溝状遺構、7～10：白岩1966年調査資料）



第13図　中里遺跡出土土器



第14図　小田原遺跡出土土器



横須賀市佐島の丘遺跡154A住

第15図　久ヶ原式土器

執筆者紹介　松島義章　（放送大学大学院客員教授）
副島蔵人　（日本大学大学院博士後期課程）
栗田一生　（川崎市教育委員会）
岡本孝之　（慶応大学ＳＦＣ研究所准教授）

会誌担当役員　川嶋実佳子・霜出俊浩・永田史子

考古論叢神奈河第18集

平成22年3月31日　印刷
平成22年3月31日　発行

編集・発行　神奈川県考古学会
事務局　〒252-8520　藤沢市遠藤5322　慶應大学岡本孝之研究室　気付
郵便振替　00240-9-71208
e-mail　soumu@koukokanagawa.net
URL　http://www.koukokanagawa.net
印刷　株式会社神奈川機関紙印刷所（きかんし印刷）

KOKO-RONSO KANAGAWA

vol.18

CONTENTS

Yoshiaki MATSUSHIMA — Paleoenvironmental changes during the Jomon Period in Kanagawa
— Jomon Transgression deduced from the shallow marine molluscan assemblages —

Kurando SOEJIMA — The aspect of Yukoutsubatsuki-doki (Pot with brim and holes around rim) in Kanagawa

Kazuo KURITA — Some Aspects of the Ancient Tachibana County Public Office (橘樹郡衙) and the adjacent region
— From the Result of the Excavation Investigation of Jusanbodai Site (十三菩提遺跡) and Sibokuchi-Uenodai Site (子母口植之台遺跡) —

Takayuki OKAMOTO — The Members of Yokohama Archeological Society 1927-1937

2010.3